

---

# 魔法少女とかマジ笑える

二足歩行犬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女とかマジ笑える

### 【Nコード】

N0912Z

### 【作者名】

二足歩行犬

### 【あらすじ】

リリカルな世界に転生した少年の物語。

能力は貰えなかったが、精一杯生きています。今、中学2年生の春が始まる！！

## プロローグ（前書き）

どうも、二足歩行犬です。

かなりgood goodな感じですが、どうか温かい目で見てやってください。

感想をくれると、夕食のおかずが一品増えます。

## プロローグ

4月。

まだ寒気が残るが、徐々に暖かさを感じるようになる季節。  
そして、始まりの季節。

入学、就職、新学期、留年（笑）。

そんな始まりのイベントが、もちろん俺にもある。

西野音耶、中学二年生になりました！！

あっ、あと転生者です。

（13年前）

「知らない天井……が、ないだと……!？」

やってくれるな、俺を嵌めるなんて。

まさか天井がないとは。

で、ここどこだ？

「ふぉ、起きたようじゃの」「

死んだじーちゃんに良く似た声がした。  
おいおいっ！やめてくれよじーちゃん！！  
俺が幽霊嫌いなもの知ってんだろ！？

下半身のダムが崩壊しそうなのを我慢して、恐る恐る振り向くと、  
そこには良く見知った人がいた。

「あ、あんたは！？」

「ふおおおふお、そうじゃ。わしはk「山本元柳斎重國！！」万象  
一切灰じ、って違うわ！！！！！」

ノリのいい老いぼれだった。

「で？あんただれよ？」

「神じゃ」

「へー」

「……それだけかの？」

いや、これ転生つてやつだろ？  
二次創作でよく見る展開だし。  
だから神が出て、特に何も。

「なんじゃ、つまらんのぉ」

頬を膨らませてブーブー言ってくる。  
うはっ、きめえ！！

「で、能力は何くれんの？転生先は？」

「転生先は『魔法少女リリカルなのは』の世界じゃ」

ああ魔王ね。

んで、能力は？

「やらん」

「What?」

「だから、能力はやらん」

なに言ってるのこいつ？

俺に桃色バスターを生身で受け止めると？

「じゃあ原作介入は？」

「しなければ良からうが」

「それじゃ転生の意味なくね？」

「そっじゃの」

え？こいつ何なの？アホなの？死ぬの？

「まったく、うるさいやつじゃのお。いいか？わしだって能力をやりたい。しかしな、能力を授けると……減るんじゃ……」

減る？なにが？寿命か？

「髪じゃ」

「よし、つるつるになるまで能力寄せ」

「嫌じゃー!」

「アンタの髪の毛だって、もう疲れたんだ!ー!楽にしてやれ!ー!」

「毛は我と共にあり」

「お前も帰れ」

「いや、お主が帰れ」

「いやいや俺死んで、ツなんだこれ!？」

足元から黒い何かが、徐々に俺を包んでいく。

「一応、魔導師の子供になるようにしといたからの。感謝するんじゃないぞ」

「あつ、ちよつ、アーーーーーッ」

黒いものに全身を包まれた俺の意識は、そこでブラックアウトした。

「ふむ、やっぱり能力をやっても良かったかのお。……いや、あや

つにまでやるとわしの髪の毛がなくなるか」

「さで、あやつら3人がどのような物語を見せてくれるか楽しみじ  
「や



**第1話 俺の家族。妹はマジ天使（前書き）**

聖祥は男女一緒にしました。

何か誤字がありましたら、お教えください。

今日のうちに、あと一話いけるかな？

## 第1話 俺の家族。妹はマジ天使

現在、午後7時。

枕元に置いた目覚まし時計が、不快になるほど電子音を鳴らしている。

けど俺は起きない。

いや、実際起きているのだが寝たフリをする。

否！！しなければならぬのだ。

その時、扉をノックする音がした。

「……おにいちゃん？」

聞こえてくるのは、甘いロリボイス。

憎き早朝を清清しい朝に変えてくれるAngel voice。  
しかしまだ起きない。

「入るよ？……起きて。学校遅れる」

そう言つて俺を揺さぶる。

仕方ない、起きるか。

泣かれても困るしな。

「んっ…おはよう、雪音」

「おはよう」

ニコニコしながら挨拶を交わすMy Angel。

あまりの可愛さに撫でてやると、気持ち良さそうに目を細めた。

朝から俺を殺す気ですか？

「おにいちゃん、お腹すいた」

「ああ、今作るから待ってな」

そう言っつて雪音に先に降りてもらおう。

俺は制服に着替えると、朝食を作るためリビングへ向かった。

「おっす、兄貴ー!!」

「朝からうるせー」

「兄貴が、テンション、低いだけだよ!!」

リビングで朝っぱらから逆立ち腕立て伏せをしているこいつは、弟の紫音。

別名、イガグリ紫音。

坊主頭の熱血男子だ。

坊主なのに紫音。

坊主なのに紫音。

大事なことなので二回言った。

「紫音、シャワー浴びとけよ」

「えー、めんどくせー」

「モテないぞ？」

「なんか無性にシャワー浴びたくなった!!!」

風呂場に向かって走って行く紫音。

ふっ、単純な奴だ。

「おにいちゃん、ご飯」

クイクイツと服を掴む雪音。

雪音は俺の妹で、紫音の姉。

黒いツインテールが可愛さを倍増させている。

基本、俺と紫音と両親以外には口数の少ない女の子。

しかし、それがいい…。

ちなみに両親は管理局員をしているため、家には不在。

なので、俺たち3人で家庭を切り盛りしている。

まあ、主に俺だけだけど。

「雪音は何が食べたい？」

「…パン」

「じゃあ、パンと目玉焼きとサラダでいいか」

俺は裾を掴む雪音に名残惜しいが離れてもらい、キッチンへと向かった。

「……いただきます」「」

朝食を作り終え、3人で食卓を囲む。

「兄貴、最近たるんでない？」

「いきなり何を言うか、イガグリ」

「イガグリじゃねえよ！！坊主だよ！！」

「で？何がたるんでるって？」

「修行だよ修行！！」

あー、確かに最近やってないかも。  
時間もあんまり取れなかつたし。

「まあ、俺は家族を守ればそれでいいからな」

「……わたし、守ってくれるの？」

「ああ、頼りないかもだけど、母さんと雪音は俺が守るよ」

「……あれ？俺と父さんは？」

「野郎は知らん」

ガツクリしているイガグリを放っておいて、向かいに座る雪音を撫

でようとしたが……出来なかった。

原因はコイツ。

西野家名物、食パンタワー。

見上げるほどの食パンが、俺と雪音の間の壁となっている。

お陰で人形のような雪音フェイスが見えない。

ああ忌々しい。

「しかし、姉ちゃんは良く食べるよな」

「…食べるの、好き」

「俺は雪音の食べる姿が好き」

「……兄貴って本当に姉ちゃんが好きだよな」

「ああ、もう胸が満腹だ……」

「「「いってきます（！）（！）」」」

「おう、いってらっしゃい。あ、イガグリ、雪音の弁当落とすなよ」

「これくらい大丈夫だって!!」

そう言うイガグリの手には重箱2つ。

どちらも雪音の分だ。

雪音はかなり食べるのに非力なので、弁当持ちはコイツの仕事。

ちなみに2人は小6と小5です。

学校は私立聖祥大付属小学校。

俺はその中学2年。来年は雪音が上がってくる。  
考えただけでも涎が出そうだ。

さて、俺も支度をして行くかな。

第1話 俺の家族。妹はマジ天使（後書き）

出ました、西野ファミリー！！

読みは…

音耶 おとや  
音 ゆき  
雪音 ゆきね  
紫音 しおん

です。

紫音とか絶対に付けられたくないですよね？  
俺だったらグれます。



第2話 新クラス。魔王はマジやばい（前書き）

今日で3話。

頑張った俺。

そんな俺には一品おかずが増えます。

ガーリックトースト

神の作りし聖なる食物。

美味でした。

## 第2話 新クラス。魔王はマジやばい

着きました中学校。

え？展開が早い？だって登校しただけだよ？

まあそんなこんなで、俺は掲示板の前にいる。  
目的は新クラスを確認するためだ。

さてと、まずは2 - Aから…

秋本…

川井…

立川…

内藤…

ぬこ…

……ないか。B組は…

あああ…

エロ…

鬼山…

クレス…

屍人…

豚々…

ぬこ360…

……突っ込まんぞ。Cは…

アリサ…

海堂…

高町…

月村…

西野…

フェイト…

八神…

ふむ、どうやらC組のようだ。

しかしなんだ、原作キャラ纏められているな。

まあ、関わらなければいいだけだ。

桃色バスター喰らいたくねえし。

で、着きました教室。

知ってる奴いないな。まあ、元から友達なんていないけどね、ハハハ。

俺は広く浅くの関係を望んでいるのだよ、ワトソン君。

今、水深0メートルくらいだ。

あ、原作キャラもまだ着てないようだ。

俺はMYデスクの場所を確認して席に着いた。

場所は窓側の一番後ろから二番目。まあまあなポディション。

俺は席に着き、鞆からある物を取り出した。

ふむ、朝はこれがないと。

くなのはside

今日から新学年！！

わたしは新しい出会いを楽しみにしながら、通学路を歩いていた。

「おーい、なのはっ」

「あ、アリサちゃん！！」

「おはよう、なのはちゃん」

「アリサちゃんとすずかちゃん、おはよう」

「おはよ。それにしてもなのは、なんか楽しそうね」

「うん、だって新しいクラスだよ？楽しみに決まってるよ！」

「いっしょのクラスになれるといいね」

「うん！！」

わたしは親友のアリサちゃん、すずかちゃんと共に学校へ向かいました。

「なのはっ」

「みんな、おはよっ」

「フェイトちゃん、はやてちゃん」

学校に着くと、校門前にフェイトちゃんとはやてちゃんがいました。どうやら、わたし達を待っていてくれたみたいなの。

「さて、クラス分けを見にいきましょう」

アリサちゃんの一声で、私達は学校の掲示板へと向かいました。

「うわっ、人が多いわね…」

「しょうがないよ、新学期なんだし」

掲示板前の人ごみを見て、アリサちゃんは凄く嫌そうな顔をしました。

わたしもあの中に突入する勇氣はないの…。

「おっす、みんな」

と、わたし達が困っていると人ごみから1人の男の子が近づいてきました。

「海斗くん、おはよう」

「おはっ、今日もええ髪しとるのお、すずか嬢」

「あんだ、すずかを口説いてんじゃないわよ!」

「ツンデレええわあ、君のデレを見せてくれないか（キリッ）」  
「きもっ！！」

「口の端がにやけとるよ、海斗君」

「はやて嬢か、……特になし」

「あ、ちよつとカチンときたわ」

「は、はやて、抑えて抑えて」

「フェイト嬢、結婚してください！！」

「ええええええええ！？」

「フェイトを困らせんじやないわよ」「ドゴッ！！」

「ぐはあ！！」

アリスちゃんに殴られた海斗君は、きれいに半円を描いて吹っ飛んだの。

痛そお。アリスちゃんも手加減しないなあ。

「大丈夫、海斗君？」

「…な…なのは嬢…すまんのお…」

海斗君は差し出した手に掴まり、なんとか起き上がりました。海斗君は生まれたての子鹿のように、足をプルプルさせてる。

わ、笑っちゃ駄目っ、耐えないとっ。

「……なのは嬢」

「なっ、なにっ？」

柔らかな顔でわたしを見つめてくる海斗君。けど下を見ると、足がプルプルしてるのっ。

「ありがとう、なのは嬢（ニコッ）」

ゴッ！……！

「」「」「」「」「」「」

何故か私の拳が、前に突き出されていました。

「……なのは嬢、ジムに通ってみる気はないか？」

「うう、ごめんなさい」

あの後、復活した海斗君の額には大きな青あざが出来ていました。

「でもねっ、なんか海斗君の笑顔を見ると手が勝手に…」

「」「」「」「」

「全員同意！？まあええけどさ」

「そんなことより、クラス分け見に行かない？」

「……フェイト嬢って、偶にワシの扱いがひどい」

しょうがないよ、海斗君だもん。

わたし達が掲示板の前に移動しようとする、今度は別の男の子が  
駆け寄ってきました。

「おはよう、なのは（ニコッ）」

「あ、うん、おはよう」

来たのはクレス君。

キレイな金髪と中世的な顔立ち。

向けてきた笑顔は、なんだか絵になります。  
けど、わたしは何故か寒気を感じました。

「なのは、今年は違うクラスだね……」

「やっ……！」

「やっ？どうしたの、なのは？」

「や、やだね？べ、別のクラスなんて」

「そっだね……」



危ないの…。

思わず喜びそうになっちゃった。

クレス君は寂しそうだけど、わたしはちょっと嬉しい。だって、クレス君ってちょっと苦手だから。

「でも、なのはは他の皆と一緒にだから安全だね。僕も昼休みとかはC組に行くから」

「え……。あッ！？うん是非！！」

昼休みも来る気なの…。

と、わたしが気落ちしていると、海斗君がクレス君に声をかけました。

「あんさん、ワシは何組やった？」

「なのは、何かあったら呼んでね？直ぐに駆けつけるから」

「あ、うん」

「なあなあ、だからワs「それじゃあ、そろそろ行くね？また後で」

クレス君はそう言って、校舎へと歩いていった。

無視されていた海斗君は、へらへらしながら「もう慣れたわ」と言っている。

海斗君かわいそうなの。

そういうところが苦手なんだよ？クレス君。

「ほんま空気読めへんな、クレス君は」

わたし達はクラス分けを見に行かず、教室へ向かった。

海斗君はクラス分けを見に行くらしい。

わたし達が確認しに行かないのは、単にネタバレされたから。

はやてちゃんも不満みたいなの。

他の皆も不満そうな顔をしている。

そっだよ。クラス分け確認するのも楽しみだったんだもんね。

「で、でも、またみんな同じクラスでよかったよ！」

場の空気に耐えられなかったのか、フェイトちゃんがわたし達に言った。

「そっだね、みんな1年間よろしくね」

「そうね、こんな空気じゃやってられないわ。みんな、またよろしく」

「よろしゅうなあ」

「うん、また楽しい1年になるよ、きつと！」

私達は新たな1年に期待を寄せて、教室へと向かった。

教室に着くと、みんな自分の席を確認して席に着く。

わたしの席は窓側2列目の、後ろから2番目。

斜め後ろ、窓側最後尾には海斗君の名前があった。

同じクラスなんだ、海斗君。

他の皆は少し席が離れている。

わたしは自分の席に着くと、隣に目をやった。

どうやら隣は男の子ようだ。

席表には西野って書いてあったから、西野君か。

隣の席なんだし、仲良くなれるといいな。

わたしは西野君に話しかけようとしたが、一瞬踏みとどまる。

理由は、西野君の真剣な表情。

西野君は手に持ったファイルを真剣に見つめていた。

勉強かな？真面目なのかもしれないの、西野君は。

でも『極秘ファイル』って、なんなのかな？

知られちゃいけない勉強？

うう、気になるう。

わたしは意を決して話掛けようとするが、またもや踏みとどまる。

というよりは、絶句して固まった。

だって、西野君の頬に一筋の涙が出来ていたから。

なんで泣いてるの!?

ううう、内容が凄く気になるの!!

「あ、あの!!西野君!!」

「……………」

あ、あれ？もしかして無視された？  
いや、きつと集中して聞こえなかっただけなの！！

「西野君！！」

「……………」

ま、また！？

む、無視するなんて酷いの！！

「に、西野君！！」

わたしはお話するために、西野君が持っているファイルを取ろうと  
した。

そうすれば、話してくれるかもしれないから。

そして、ファイルに手が触れそうになった瞬間…

「触るな小僧ッ！！！！！！！！！！」

「にゃっ！！！？？」

突然、大きな声を発した西野君に驚き、わたしは尻餅をついてしま  
った。

な、なんなの！？突然！？

「小僧：貴様は罪を犯そうとした…」

「わ、わたし、小僧じゃな」だまらっしやいッ！！」「ひい！！！！」

まるで、幽鬼のように立ち上がる西野君。  
わたしは恐怖のあまり動けなくなっていた。

「これはなあ、貴様のような薄汚れた小僧が触れていいものではない！……！言わば聖典なのだッ！……！」

「よ、汚れてないもん！毎日お風呂入ってるもん！……！」

「身体ではない……心だッ！……！」

「こ、心！？よ、汚れてないよ！？……たぶん」

「汚れてるねッ……風呂のタイルのカビくらい……！」

「カ、カビ！？」

「ああ、そうだ。お前の心は根が深い汚れなんだ。落とせないくらい深いな」

「わ、わたしは汚れてなんか……」

「いやッ、汚れてるね。人の持ち物に無断で触るとか、汚れている証拠。しかも人が見ている最中に」

「そ、それは西野君が……」

西野君が気づいてくれないからだよ……。

「仕舞いには人のせいかとことん汚れてるな、お前」

「よ…よこれてないよお…」

「いや、きつとお前の心は茶色だ」

「き…汚なく…ない…」

なんでだろう、すつごく苦しいの…。

なんでわたしがここまで言われなくちゃ…。

「汚い。そして席に着け。なんか目立ってる」

「きつ…グス…たなく…んっ…ないよお…グズツ…」

「ちよつ、泣くとか。しかし俺は動じない。きつと俺の心は鋼で出来ていた。そして去れ小僧、…いや、タイルの汚れ」

「ふえっ、ふええええええん!!」

〈side out〉

なんか、目の前の女が泣き出した。

お前が悪いのに何故泣く？理解不能だ。

つて、良く見ればコイツ高町なのはじゃん…。

俺は原作キャラを泣かしたのか？

やべえ、チートなしで勝てたよ。

「あんだ、なのはに何したのよ!!!!」

ここで現れるお仲間達。

全員、俺に敵意の視線を向ける。

って、なんか男混じってね？

こんな奴、原作にいたっけ？

「なのは！？大丈夫！？」

「ふえ、フエイトちゃん…」

「お前、なのはは何をしたッ！！！」

今にも掴みかかってきそうな金髪ちゃん。

あれ？なんで俺が悪い事になってんの？

「俺は悪くない。勝手に泣いたのもそれだ」

「ちょお〜まで、女の子をそれ呼ばわりか？」

「それ、悪人」

俺は高町を指差す。

だって本当だよ？

俺、悪くない。

「悪人って！？だから、なのはが何したって言うのよ！…」

「ちょお落ち着き、アリサちゃん」

狸がどうにかアリサをなだめている。

「で、なのはちゃんが何したって？」

狸は静かに訊いて来るが、絶対切れてる。だって目が据わってるもん。

「そつだな…よし、その男子」

「なんや？」

「お前の大事なもんは何だ？」

「そら、エロ本や」

「エロ本か…やるなお前…。じゃあ、もしエロ本を見ている時に母親が入ってきて、エロ本を強奪したら？」

「切れる」

「だろ？こいつはそれをやろうとした」

「なッ！？ア、アンタが朝からそんな物、読んてるからいけないんじゃない！！」

「エロ本がそんな物とはなんじゃ！！」

「海斗君…少し黙ってよう？」

「あ……」「ごめんなさい……」



「工口本は例えだ。つまり大事な物を取られそうになった。説教したら泣いた。お前から登場」

「え？大事な物取ろうとしたって本当なんか？なのはちゃん」

「べ、別に取るうとはしてないよ？ただ、お話がしたくて…」

「話がしたいから強行手段か？どこの魔王だお前は？」

「なのは……」

フェイトを見ると、ちよつと引いてた。

苦労したんだな、お前。

「とりあえず俺は悪くない」

「まあ、確かに悪いのはなのはちゃんやな。そこは勘違いしとった、ごめんな」

「まあ、分かればいいんだけど」

「因みに大事な物ってなんや？」

さすが狸。さりげなく探ろうとしている。

くだらない物だったら、アリサ辺りが逆切れするんだろうな。仕方ない、俺の平穩のためだ…。

ごめん、俺の宝物……お前を…人の目にさらす。

「……これだよ」

「『極秘ファイル』？なんやこれ？……ああ、言わんといていいわ。大体予想ついたわ」

「なっ！？あんたやっぱり！！」

「勘違いするな。中身はこれだ」

俺は極秘ファイルを奴らに見えるように開く。  
中身は…

「絵？」

そう、中身は雪音が小さい時に書いてくれた、数々の俺の絵だ。  
うまいとは言えないが、一枚一枚に愛を感じる。  
これを見て、雪音に会えない時間を耐え抜く。  
言わば俺にとっての強壮薬。  
金には替えられない俺の宝物だ。

「これはな…昔、妹が書いてくれた絵なんだ…」

脳裏に浮かぶのは、雪音が小さい時に記憶。  
まったく…気づいたらあんなに成長してやがって…。  
兄ちゃんは嬉し悲しいぞ…。

俺は後に思う。

あの時の俺はどんな顔をしていたんだろう。

「……そっか。なんかごめんな…」

「いや、俺も言い過ぎたかも」

「はやて…。あたしも悪かったわ、ごめんなさい」

「気にすんな」

「わたしもごめんね。大切な物なんだね、それ」

「ああ、宝物だ」

「すまんかった、ワシも疑ってたわ」

「過ぎた事だ。エロ本で手を打ってやる」

「その…ごめん、疑ったりして。私も気持ちはよく分かるよ…」

お前妹いたっけ？姉さんじゃないの？

あ、シスコンってことか。

「ありがとう、君とは仲良くなれる気がする。良かったら、今度話をしよう」

まさかフェイトが妹の良さについて分かるとは…。

いや、お前は姉か。

「え…う、うん…！」

さて、最後は…。

高町を見ると、顔を青くして今にも泣きそうだった。やっとお前も、この聖典の神聖さに気づいたか。

「わ、わたし…そんな大切な物を…ほ、本当にごめんなさい…」  
しかしまあ、謝られて許さない俺じゃない。  
汝の罪、我が許そう。

「いいよ。俺も言い過ぎたしごめんな」

「…許してくれるの？」

「ああ、話がしたいのならいくらでも話してやる」

「…ありがとう。西野君のこと誤解してた…」

誤解？はて、なんのことだ？

「あの、西野君。その…良かったらお友達になってくれるかな？」

「だが断る」

「…え？」

魔王と友達とか一寸先は闇。むしろ地獄。  
俺を墮とすつもりだろ。  
騙されんぞ、ブルータス。

## 第2話 新クラス。魔王はマジやばい（後書き）

出ました!!

原作キャラと転生者2人。

補足ですが、ニコゴッ!!について。

海堂海斗の能力。

相手の目を見てマジで微笑むと、鉄拳が飛んできます。

海斗は常に笑っています。あくまでニコニコではなく、へらへらしているだけです。

なので、普段は発動されません

第3話 昼食。マジモんの厨二患者だ（前書き）

疲れた…。

眠いお。

けど、仕上げた。

僕頑張った。

### 第3話 昼食。マジモんの厨二患者だ

朝の事件。

強奪未遂犯が身内の弁護士を騙し、見方に引き入れた事件。被害者までも仲間にしようとしたが、それを阻止。

しかし被告人は女の武器を行使し、被害者は嫌々友好関係を気づいた。

なお、この事件をMYKK（魔王はやっぱり心が汚かった）事件と名づける。

そして、現在昼休み。

俺は魔王御一行に拉致られ、屋上へと連れて行かれた。

「神は私を見放したッ！！！！」

「なに言つとるん？弁当冷めるで」

屋上ってなんか叫びたくなるよね。

「音耶君、こっちこっち」

高町が隣を開けながら手招きしている。

つつか、いつの間にか名前と呼ばれてる。

さすが魔王。図々しい。

しかし、まさか魔王御一行と食事を取るなんて…。

どんな地獄の晩餐会になるのだろう。

あ、昼食だから昼餐会？

とりあえず高町と海堂の間に座り、鼻歌を歌いながら弁当を取り出す。

「なんだか機嫌いいね、西野君」

「今日の弁当が楽しみでな」

今日は奮発した弁当を持ってきたため、気分は最高にいい俺は、弁当箱であるツッパを開いた。

「き〜み〜が〜あ〜よ〜〜は〜」

「って、日の丸弁当やないかつ！！」バシッ！！

いつの間にか後ろに移動していた八神が、ハリセンで叩いて来る。お前、絶対狙ってたろ。

「なあ、自分。なんでそんな弁当なんじゃ？」

「俺が日本国民だからさ。日本バンザイ」

「で、おかずは？」

スルーされた。

「家計が苦しいから、おかずなんて贅沢な物はない」

主に雪音の食費で。

可愛いから許すけど。



事実を言ったら、なんか皆が暖かい眼差しを向けてきた。  
やめるよ…照れるじゃないか。

「音耶、私のおかずあげるよ」

フエイトから、から揚げを貰った。

つて、あんたも呼び捨てかい。

まあ、犬は飼い主に似るって言うしな。

「私のもお裾分けや」

八神からアスパラのベーコン巻きを貰った。  
うむ、これは好きだぞ。

「わたしのも食べて」

月村から肉を貰った。

血肉にさせてもらおう。

「感謝しなさいよね」

アリサから、なんか黒いつぶつぶを貰った。  
おそろくタピオカだろう。

「はい、音耶君」

高町から人参を貰った。  
きつと、マンドラゴラだろう。

「ワシのも食ってなあ」

海堂から、食べかけのハンバーグを貰った。

「高町、あーん」

「へっ!?!あ、あーん…って、きゃあッ!?!」「パシンッ!?!」

ハンバーグは叩き落された。

「ワシのハンバアアアアアアアアゲッ!?!?!?!」

海堂が泣いた。

そんなこんなで続いた昼食は、ある者が現れる事によって終止符を打つ。

そいつは突然やってきた。

「なのはッ!?!?!」「バンッ!?!」

突然響く重低音。

発信源はドア。

「うっ、クレス君…!」

高町が嫌そうな顔をする。

その男は高町に近づくと、いきなり高町の手を握った。

「なのは！！良かった…無事だったんだね…」

「い、いきなり何？」

「なのはが暴行を受けたって聞いて心配したんだ！！頭がおかしくなりそうだったよ」

「へ、へえ、そう…」

「で、誰なんだい？なのはに暴行を加えたクズは！？」

「暴行なんてされてないよ…」

「そんな訳ないだろ！？こんなに目を腫らして…んっ、見ない顔がいるな」

半狂乱になって叫ぶ奴と目があつた。

やめて、そんなに見つめないで。

「んっんんっ！突然すまないね、君は？」

なんか人懐っこい笑みで見てくる。

今更遅いぞ。

「名乗る時は自分から。小学校で教わらなかったか？」

ピクツと、相手の眉が動いた気がする。

「そうだね、では名乗るよ。僕はクレス・レオンフォード、なのは達の幼馴染だよ」

金髪。

赤と青のオッドアイ。

クレス・レオンフォード。

僕…。

俺は優しくクレスの肩に手を置き、温かな目で見る。

「大丈夫。誰だって一度は通る道だから」

「…は？」

「金髪は染めたのかい？瞳もカラコン？偽名は出来るだけ隠したほうがいいよ。恥ずかしいから」

「き、君はいったい何が言いたい！！??」

言ってしまうのか？

しかし相手が望んでいるんだ。心苦しいが、ズバツと言ってあげよう。

「厨二は卒業しなさい」

「……ブフォツ」「」

アリサ、八神、海堂が吹いた。

笑うなよ、可哀想だろう。

「……き……」



お前ら酷いな。特に高町。  
あいつだって頑張ってたぞ。

「き、きさまっ！…もう許さん！…！！」

怒り狂った厨二は、胸元から青い宝石のついたペンダントを取り出した。

「なっ！？あれは不味いで！！」

「レオンハート！！セットアツ」やめんかッ！！！！」ツチ！！離せ  
！！！！」

厨二が変身しようとするが、海棠に押さえつけられ、宝石を八神に奪われる。

てか、あれってデバイスだよな。

「悪いけど西野君。このバカと話があるから席を外してもらってもええか？すずかちゃんたちも」

「わかった、がんばれよ」

「おおきに。頑張って説教したるわ」

俺たちは屋上を後にした。

階段の踊り場でしばらく雑談していると、屋上のドアが開き厨二が降りてきた。

俺の前まで来ると、俺を睨み付けてきた。

「絶対に許さないからな」

いや、ハンバーグを装備して凄まれても……。厨二の間ではハンバーグが流行っているのか？

「てな事があつたんだ」

「おにいちゃん…大変」

「つつか兄貴、そいつデバイス持ってたの？」

俺は本日の出来事を、夕食時に話した。

あの後、八神達から謝られ、後は特に何もなく帰宅した。で、現在それを話している。

「ああ、レオンハートって厨二くせい名前だった」

「レオンハートって……兄貴！！もしかしてこの人か!？」

イガグリが服の中から雑誌を取り出す。  
お前はヤクザにでも狙われているのか、イガグリ？

「兄貴これだよ！！これ！！」

「ふむ、どれどれ……最強の魔導師『クレス・レオンフォード』、  
あいつミッドでも偽名なのか」

「やっぱりこの人！？かぁー！！！すげえ！！こんな近くにいたんだ！！」

「どんだけハイテンションなんだ、きもいぞイガグリ」

「だって最強だぜ！？俺、この人に憧れてんだ！！」

マジか。

頼むから厨二にならないでくれ。俺が恥ずかしい。

「つつかそれ、地球の雑誌じゃないよな？」

「ああ！！父さん達のお土産！！『月刊 魔導師』！！」

なんて分かりやすいタイトルなんだ。  
つて、おいおい魔王も写ってるぞ。

「ああこれ？この人は今話題のエースだよ。地球出身なんだって！！」

「エース？魔王じゃないのか？」



「魔王？なに言ってるんの兄貴？」

「その人は見習っちゃだめだ。いつか、下僕Gって呼ばれるぞ」

「えー！？この人の砲撃に憧れてるのに」

「手遅れか…。雪音はいつまでも綺麗でいような」

「…うみゆ？」

胸が満腹です。

第3話 厚食。マジモんの厨二患者だ（後書き）

**第4話 なまえをよんで。マジで名前なんだっけ？（前書き）**

こんにちは、二足歩行犬です。

今回はかなりgag gagになってしまいました。

あと、1話くらいいけるかな？

#### 第4話 なまえをよんで。マジで名前なんだっけ？

新学年になり1週間。

あの日から、やたらと絡んでくる魔王御一行。

俺の精神は魔王の微笑みでどんどん擦り減っていく。

否、現在進行形で擦り減っている。

「わたし、音耶君のお弁当も作ってきたんだ。良かったら食べて」  
ニコニコ」

現在は昼休み。

場所は最近、新たなテリトリーとして使っている屋上。

食事時は皆の顔が見えるように円になっている。

そして俺は海斗と高町の間が定位置とかしていた。

実に不満だ。意義を申し立てる。

「なのはちゃんの手作り弁当か。モテモテやな西野君」

「もう〜、そんなんじゃないよ〜はやてちゃん」

「なんか最近嬉しそうじゃのお〜、なのは嬢」

「あ、それ私も思った」

「食事（俺）を前にして喜んでいるんだろ？」

「そんなに食いしん坊じゃないもんっ」

「じゃあ、何かいい事あったの？」

「うん！最近クレス君の顔を見ないんだっ」

クレス君？……ああ、厨二か。

つうか高町。お前何気にひどいな。

「うわっ、ハッキリ言っわねえ」

「なのはちゃん……」

見ろ、2人が若干引いてるぞ。

そこまで厨二が嫌いか、高町。

「そういえば音耶、今日はどんな弁当持って来たじゃ？」

「本日のメインディッシュは10秒チャージ」

「よし、なのはちゃんの弁当もらっとき」

「あ、そうだった！はい、音耶君」

高町から青い包みを渡された。

中々重量のある代物だ。

微かに焼いた肉の香りが漂う。

「ひだりへ受け流す……」

「おお！なのは嬢……ワシのために愛妻弁当を……」

「ちがうよっ！？それは音耶君の……」

「人肉は食えんとです」

「人肉！？ソーセージだよ、人肉じゃないの！！」

「ふむ、なら頂こう。海斗、お前に人間の食物はまだ早い」

俺は海斗から弁当を奪取した。

海斗は眉の下のダムが崩壊した。

「その…あまり美味しくないかも…」

「なに、人間の食い物なら食べる」

高町を横目に恐る恐る弁当を開く。

中身はミートボール、ソーセージ、卵焼き、ハム、レタス、プチトマト、フルーツと、意外と普通の弁当だった。

「UMAは出て来なかったか…」

「未確認生物扱い！？」

「しかし、何か可愛らしい弁当だな」

「あの、もしかして嫌だった…？」

「いや、正直助かる。死んでしまった豚に感謝して、いただきます」

「ピンポイントで豚かいな」

とりあえず、盛り付けたフルーツを一口。  
ふむ、甘い。

「ちよつとあんた、普通デザート先に食べる？」

「甘いものはいちごミルク以外好かんとです」

「あつ、だからいつもダルそうなんだね」

「糖分不足つて言いたいのか、このヤロー」

「音耶は嫌いなものは先に食べる派なんだね」

フエイト嬢は中々の観察眼を持っているようだ。

ふむ、では卵焼きを頂こう。

「……………甘くない」

「お父さんが甘い卵焼きは苦手なの。だから塩を入れたんだけど……でもちよつど良かった、音耶君は甘いもの苦手なんだもんね！」

「そこに直れ、このヤロー」

「ふえ？」

「いいか、甘くない卵焼きは卵焼きとは言えん。塩？アホかお前。卵焼きを辱めるのもいい加減にしろ」

「ええええええええ！？」

「なんやコイツ、めんどくさっ!！」

甘くない卵焼きなんぞ、俺は認めん。

「音耶、この前のアレどうじゃった？」

食事も終わり、今は雑談タイム。  
海斗が俺に話しかけてきた。

「アレか…。意外と良かったな。まあ、M Y A n g e l には遠く及ばないが」

「そかそか、音耶はええ趣味してるのお」

「やめろよ、照れるじゃねえか」

「……あんたら、何の話しとるん？」

「なに…ってそりゃあ、…なあ？」

「あんたらホンマ仲ええな」

まあ、話が合うしな。

主にあっち方面で。



「そういえば、いつの間にか名前で呼びあってるしね」

「親友じゃからな!!」

「切っても切れない仲だ」

「ふ〜ん……ねえ西野」

「なんだアリサ？」

「あんだ、なんでなのは達は苗字で呼んでるの？」

何を言ってるんだコイツは？

いきなり名前で呼ぶとか失礼だろ。  
常識を勉強しなさい。

「なんかムカつくわね……。でも、あたしやフェイトは名前じゃない」

「え？」

「え」

「名前なの？」

「そうよ、フェイト・T・ハラオウンにアリサ・バニングス。名前じゃない」

「……………」

「？」

「嘘だツツツツツツツツ！！！！！！！！！！」

「きゃあっ！！！」

「騙されんぞブルータス。お前の名前はバ…バ…バウイングだろ！！」

「バニングスよ！！それにバニングスはファミリーネームだわツ！！」

「ファミリーネームって……お前外人だったのか！？」

「ハーフよ！ハーフ！！金髪見れば分かるでしょ、普通！！」

「いや、てっきり厨二病患者かグれてるだけだと……」

「あんだ…殺すわよ」

おー、怖い怖い。

しかし、まさかハーフだったとは。

最近、原作知識が無くなってきたな。

「じゃあバニング「はあ、アリサでいいわよ」「…んじゃ、アリサ」

「なあ、もしかして西野君って私達の名前知らん？」

「なにを言う、早見優。これでも記憶力には自身あり」

「ネタが古いわ！！……じゃあ、私の名前言ってみ？」

「八神狸だろ？」

「たぬツ！？ちゃうわー！八神はやてや、は・や・てー！！」

「借金執事か……」

「あ、あれおもしろいな」

「ああ、俺も好きだぞ」

「って、名前違いや！！」

うるさい狸だ。

カチカチ山再現すつぞ、このヤロー。

「もうええわ……。それじゃあ、すずかちゃんのフルネームは？」

「お前アホだな、自分で言ってるぞ。月村・すずか・チャン、だろ？」

「……アンタも相当アホやな」

「私は月村すずかだよ……」

「おk。記憶完了」

最近の名前はややこしいのが多いからな。  
覚えるのも大変だ。

「音耶、私の名前は？」

「ああ、フェイトか…。お前の名前はインプットされてる。いい名だからな」

「え！？そ…そう？ありがとう」

何故赤くなる？

事実を言っただけだぞ。

「性がフェイト、名がテストロッサ、字がハラオウんだろ？珍しいよな、今の時代まだ字を持つてるなんて」

「……………??？」

「フェイトは中国人じゃないわよ…」

フェイトは良くわからないみたいだ。

アリサはさすが優等生。

憧れも痺れもしねえけど。

「冗談だ、気にするな。フェイトのフルネームはアレだろ、Fat e / t e s u t a r o s s a h a r a o u n d だろ？」

「あ、うん。なんか違う気がするけどそれでいいよ」

「ちなみに私はバーサーカーが好きや」

「わたしはライダーかな？」

「ワシは兄貴や」

「お前らやるな。俺はアーチャー一筋。今度、はやてん家でバトロ  
うぜ」

「おお、ええで。つてあんた、私の名前…」

「類友だからな。てなわけでよろしく、はやてとすずか」

「うん、よろしく」

「よろしゅう」

俺は仲間をゲットした。

いつか魔王の元から開放してあげよう。  
と、クイクイっと俺の服を引っ張る何かがいる。

「あの、わたしも名前…」

「魔王だろ？」

「魔王じゃないよ!？」

いやいや、お前が魔王じゃなかったら誰が魔王なんだよ。  
お前はラスボスだろ？  
よくRPGに出てくるだろ？

「音耶君…わたしのフルネームわかる？」

「わかるに決まってんだろ。何年一緒にいたと思うんだ」

「1週間や」

「音耶君…」

「魔界脊策魔物門脊椎魔物亜門人肉食網魔人目魔王科戦闘民属、高町なのはだろ？」

「なんか違うの!？」

「あんたって実は頭いいでしょ…」

「いってよりは、頭の回転が速いだけなのかもね」

「ねえ、わたしも名前だよんで？」

「わかったよ、魔界脊「なのは」……魔お「なのは」……m「なのは」……」

なんだろう、高町の目から光がなくなっている。  
遂に本性を現したか。

ここで選択肢を間違えるとBAD END直行だな。  
俺は…

1・素直に名前と呼ぶ。

2・バトルを挑む。

3・魔法の呪文

4・脱ぐ

ふむ、とりあえず2は捨てるか。

勝てるわけないし。

4…は、社会的に死ぬな。

後は1と3か…。

なら選ぶほうは決まっている。

「高町…確かにお前は強い…」

「けどなあ！！僕にだって守りたい世界があるんだッ！！！！！」

「何言ってるの？」

「行くぞ！！俺の魔法の呪文を喰らえ！！！！！」

「え！？魔法やて！？」

「なのは！！逃げて！！！」

「すずか嬢！アリサ嬢！ワシのそばから離れるな！！！」

「え！？ちょっとどういふことっ！？」

「まさか西野君も！！！？」

「これで俺は最強となる…さよならだ高町…」

俺は右手を前に突き出し、左手を右手首に添えた。

高町はどうかやら混乱しているようだ。

「行くぞッ！！！！！」





「ねえ…音耶君…」

振り向いちゃだめだ！振り向いちゃだめだ！振り向いちゃだめだ  
ッ！！！！

しかし、振り向いてしまうのが人間の性。  
後ろには目が逝ってる魔王がいたとです。

「音耶君…なまえをよんで…」

ドクンッ！！

な、なんだ！？この胸の鼓動は！？

身体は全身鳥肌なのに、心が熱くなっっていくだと！？

まさか…恋？

次週『真剣で魔王に恋しなさい！！』

なんてね。

こんな状況でも、冗談を言える俺の心はきつと鋼で出来ていた。

「ねえ？音耶君…？」

「…なんだ？」

「なまえを…よんで？」

「だが断」 「なまえをよんで」 …いッ 「なまえをよんで」 …k 「な  
まえをよんで」 …神は私を見放したッ！！！！」

「さあ、なまえをよんで？」

「……なの……」

「聞こえないよ？もっと大きな声で……」

「な……なの……」

「うん、あと少し……」

「なのっ」

「なの？」

「ナノインパクト……！」

後の俺は言った。

弁当箱は鈍器にもなる。よい子は真似しないでね。

「なあ、因みにワシの名前は？」

「何言ってるんだ？お前には名前なんてないだろ」

「……え？」

第5話 翠屋。マジ笑えない(前書き)

今回は、突撃翠屋!!

さよなら、音耶君…。

君はきっと死ぬ。

## 第5話 翠屋。マジ笑えない

『喫茶 翠屋』

別名 戦闘民族の巣窟。

数々の人間を破壊、蹂躪してきた戦闘民族の村。

「あそこだけは近づいてはならん……近づくと引き込まれるぞ……  
ああ……わしの妻も……あやつらに……クツ……ばああああああああ  
ああああああああんツ！！！！！」

つて、じいちゃんも言ってた。

近づいたら死。

そんな場所に俺はいた。

俺も好きでいるわけではない。

あれは昨夜のことだった……

〈回想・昨夜〉

「さてイガグリよ、雪音は寝たか？」

「ああ、今は寢床でぐっすりさ」

場所は海鳴市に存在する一軒の家。

そののリビングで今、重大な会議が起ころうとしていた。

出席者は二名。

真っ暗なリビングではテーブルの上に置いたケータイだけが、妖しい光を放っていた。

「さて、イガグリよ。今回の議題…わかっておるな？」

碇ポーズで尋ねる俺に、イガグリも碇ポーズで答えた。

「ああ、明日の事だろ？」

「ふっ、分かっているではないか。そう、明日は……」

「『雪音、初めてハイハイしました記念日』」

「って、やっぱり必要なのこれ？」

イガグリは立ち上がり、リビングの電気をつける。

秀囲気は大事だと教えたはずだが？

ちっ、これだから野郎は。

「で、兄貴。明日の記念日って必要なの？」

「当たり前だろう。妹が成長を遂げたという素晴らしい記念日。家族なら当然祝うだろ」

「俺のは無いんだけど……」

「野郎は知らん」

何言ってるんの、このイガグリ。

お前がハイハイできたくらいで祝わんわ。

「で、イガグリ。問題はプレゼントを何にするかだ」

「やっぱり食べ物じゃない？」

「それには同感だ」

「あ…そういうば、姉ちゃんがこの前言ってたんだけど…」

「k w s k」

「なんか、翠屋つてこのケーキが食べたいって言ってたよ」

「ふむ、ケーキか…祝いの場にはぴったりだな。しかも雪音が御所望ときた。決まりだな、今年のプレゼントはケーキだ…！」

「じゃあ、兄貴買って来て。俺は出前頼みまくるから」

「よし、では今回の議事を閉幕する…！」

く回想終了く

「ミスった。あの時、気づいていれば」

俺が思い出したのは、ここに着いてからだった。

俺としたことが…なんてミスを。

しかしなんだ？結構、普通の喫茶店だな。

はっ！？騙されるな。

これはきつと罠だ。

平凡を装いながら店内は謝肉祭、酒池肉林、人肉取引……。  
クソツ！！さすが魔王の家族。汚いぜ。

しかし俺は行かなければならない。雪音のために。

絶対ケーキを持って帰るからな。

たとえ四肢が無くなるうとも。

だから、俺を見守っていてくれ雪音。

いざ……出陣！！！！！！

「いらつしゃいませ〜！！」

むっ、意外と挨拶も普通だな。

てつきり「ギャキュウヒョアガヒヒヒッキシャー……………ッ  
！！！！」かと思った。

「お1人様ですか？」

なんかメガネが話しかけてきた。

しかも疑問系。

お前には、俺のほかにも人が見えるのか？

「1人です」



「かしこまりました。カウンター席でよろしいですか？」

「はい」

「ではこちらにどうぞ」

通されたのはカウンター席のど真ん中。  
なんとなく辺りを見回す。

店内には俺以外の客がいない。

店内に1人って、ちよつと優越感。

「いらつしゃい」

と、店の奥から若い男が出てきた。

この人は覚えてるぞ、土郎さんだろ？

「ちわつす」

「今日は一人かい？」

「ええ、まあ」

「そういえば、その制服。ウチの娘と同じ学校なんだね」

来ると思ったよ、その質問。

しかし面倒な事に巻き込まれたくないの、ここは他人のふりをしよう。

「へー、そうなんすか？偶然ですねー」

「ははっ、そうだね。それで、「注文は？」

「コーヒー、ブラックで」

「おっ、渋いね。少々お待ちは」

「甘いもんは苦手っすから」

「そうか。そういえばうちの娘、高町なのはって言うんだけど知らないかな？」

「聞いたことはありませんね。なんでも聖祥五大美女だとか」

「ほう、そんな噂をされているのか。はい、「コーヒー」

「ども、……………うまいっすね。こんなの生まれて初めてだ」

「そりゃあ、ありがと」

マジでうまい。おそらく今までで一番。なんか、ここの店に通いたくなる味だ。

「そういえば君……………名前は？」

「阪東っす」

ここで本名を出すほどバカじゃない。呪術に使われんのもやだしな。

「阪東君に聞きたい事があるんだけど、いいかな？」

「なんなりと」

「君……西野音耶君って知らない？」

「知りません。聞いた事ありません。妖怪かなんかですか？」

「人間だよ。最近娘が事あるごとに、音耶君音耶君と話していてね。この前なんか手作り弁当を渡したみたいだよ。はははっ」

士郎さん、笑いながらグラスを握り締めないでください。  
ヒビ入ってますよ。

こりゃあ、さつさと用事を済ませるべきか。  
バレたら挽肉にされそうだしな。

「マスター、お土産用にケーキ20個包んで貰えます？」

「20個！？凄いやだね……」

「うちには大食いがいるんで」

「そうか……。種類は？」

「適当にお願いします」

俺がそういつと、士郎さんは奥に消えていった。



とりあえずサムズアップしました。

「…え！？お父さん、まずくないって！！」

「良かったな、美由希」

ほのぼのしんじゃねえよ。

こっちは地獄との瀬戸際だつての。

さすが、高町家。

やる事が汚い。

「…クソツ…甘えよ…甘すぎるよ…」

「お、お父さん！！私のケーキで涙を！！」

「……よかったな、美由希」

ごめん雪音…。

兄ちゃんは逝くよ…。

「クフオ〜…しよっぺえ…甘じよっぺ〜よ」

「しよっぺいのは君の涙だ」

先程から、約30分。

俺の死闘はまだ続いていた。  
半分残るケーキを見て、更に涙が溢れ出す。  
もう…ゴールしていいよね…。

と、その時…死にそんな俺に、天の声と地獄行き決定の音が聞こえた。

「ちい…す…!」

「ただいま、おとうさん」

「「こんにちは」」

「おかえり。海斗君とフェイトちゃんとアリサちゃん、いらっしやい」

魔王御一行が帰ってきた。

「ってあれ？音耶君！？来てたんだ!!」

「……音耶…君…?」

俺、終了の合図。

「って、こいつ泣きながらケーキ食べてるわ!?!」

「どっしたの、音耶!?!」

「うぼおおおおおおおお」

「すまん。何言ってるかさっぱりわからん」

「なになに？ケーキが甘い、死んじゃう？」

「分かるんか！？フェイト嬢！？」

「え？分からないの？」

「普通わかんないわよ」

いいから助けてお。

俺が助けを求めていると、高町がケーキのホイップを指で掬い取り舐めた。

「甘っ！？おとうさん！！これ凄く甘いよ！？」

「やっぱりか…」

「おとうさん、まさか味見は？」

「すまん、する勇気がなかった」

「もう！！大丈夫、音耶君！？」

「ぼおおおおおおお」

「えっと…じいちゃんが手を振ってる…」

「音耶君！？死んじゃだめえ！！」

こうして俺は死……なずに開放してもらえた。  
この時だけ、高町が天使に見えた。  
この時だけ。

大事な事なので2回言った。  
ちなみに、ケーキは高町印のゴミ箱へ消えた。

「うう、ごめんなさい……」

メガネが頭を下げてくる。  
本当に申し訳なさそうに謝っている。

「だが許さない」

「ええ！？」

「冗談だ。しかし高町、助かった。あのままだったらきつと、地獄  
行きの片道切符を買ったところだった」

「こっちこそごめんね。2人が変な物食べさせちゃって……」

「ああ、私からも謝罪するよ」

「いえ、別にもういいですって」



さて、色々あって少し長居しすぎたかな。  
そろそろ帰るとするか。

「じゃあ、俺は帰るんで」

そう言つてを背を向けると、何故かガシツされた。  
犯人は……あなたですね、土郎さん。

「少し君と話があるんだ…西野音耶君」

「俺はありません」

「はははっ、私にはあるんだよ」

「あなたは俺に、細菌兵器入りケーキを食べさせました」

「それはすまなかつたね。けどそれとこれとは、話は別だ」

俺は首根っこを掴まれ、引きずられてく。

高町と目があった。

助けを呼んだ。

「なまえをよんで」

ま・た・そ・れ・か。

しかし、背に腹は変えられない。

オーケー、取引成立だ。

「行けなのは！！滅びのバーストストリーム！！」

「それはできないの」

あっ、引っ張る力が強く。

もう無理ぽ…。

なんとか助かった俺は、ケーキを受け取り帰宅した。

ケーキを雪音に渡したら、凄く喜んでくれた。

兄ちゃん冥利に尽きる。

後日、俺は高熱を出し寝込んだ。

やはり、あのケーキは兵器だった。

第5話 翠屋。マジ笑えない(後書き)

士郎さんってこんな感じだっけ？

うーん、よくわからん。

第6話 学力テスト。マジで語ろう(前書き)

まさか、もう1話仕上げてしまった…!!

がんばった俺。しかし明日学校。

電車で一時間…。

どうして遠い大学選んだんだろう…。

今回は長くなるので、2つに分けました。

しかも今回の前編は、異常に会話が多いです。

## 第6話 学力テスト。マジで語るう

五月。

梅雨の季節。

または、うつ病増加の季節。

新しい環境に疲れた者たちがダメになる季節。

ここ、聖祥中学の生徒も例外ではなかった。

「鬱や……死のう……」

「鬱じゃあ……死のう……」

「鬱なの……死ぬの……」

「なのはが死ぬなら死のう……」

「……なんだこれ……」

いつもどおりの朝。

学校へ登校すると教室がホラーと化していた。

多くの生徒がテーブルに突っ伏し、死ぬ死ぬ連呼している。

魔法少女3人とアホも鬱っていた。

うつ病の感染率は高いらしい。覚えておこう。

「で？どういう状況だこれは？」

俺は後ろのほうで呆れた顔をしているアリサと、心配そうな顔をしているはずかのもとへ向かった。

「あっ、おはよう、音耶君」

「おはよう、音耶。見ての通りよ」

「見て分からないから聞いてるんだが？」

「うつ病に罹ったらしいのよ」

「うつ病？いつも、はな垂れ坊主のように元気なこいつらが？」

「音耶君、いいすぎだよ」

「すずかに注意された。」

「しかし魔王までも罹るとは意外だ。」

「何があつた？聖水でも浴びたのか？」

「原因はあれみたいよ」

「アリサの指差す先には、一枚のプリント。」

『第1回 学力テスト』と書いてあつた。  
なるほど。アレのせいか。

「うつ、絶対赤点なの……」

「歴史が……」

「全部やばいわ……」

「右に同じじゃあ……」

「休みすぎだ。お前達が悪い」

そう。こいつらは良く休む。

理由は知ってるが、俺には関係ナッシング。

管理局に入ったお前らが悪い。

海斗については知らんが、おそらくコイツも管理局員だろう。

「すずかちゃん、助けて〜」

「自業自得なのに人に縋るとか。その図々しさに脱帽」

「いいよ、勉強見てあげる」

「すずかの人の良さにも脱帽」

「ありがとう〜!!すずかちゃん!!」

「はあ、仕方がないわね…。あんた達!!今週の日曜は図書館で勉強よ!!」

どうやらこいつ等は休日も勉強するらしい。

やる気のある奴らだ。

敬意をはらってこの言葉を贈ろう。

「ガンバツツ!!!!」

「あんたも参加ね」

何故だ。

時は過ぎ日曜日。

場所は図書館、自習室。

幸い俺達以外に、人はいないようなので存分くつろげる。

「さて、お前達。パーティーステーションポータブル、略してPS Pは持ってきたか？デビルハンターやるぞ。爆弾の貯蔵は十分か？」

「って、なんでアンタはゲーム持ってきてんのよ!!」

「あ、アリサちゃん……実はわたしも……」

「すすかまで!?!」

さすが類とも。

図書館でやることを良くわかっている。

「俺とすすかは狩りに行ってくるから、お前ら勉強な。なに悔しがるな、これが平民と貴族の違いさ」

「いいからあんたも手伝いなさいよ」

「だが断る。さあ、すすか、狩りの時間だ」



「ごめんね、わたし勉強見てあげないと」

「お前もかあああああああつ、ブルウウウウウウタアアアアアアアアスツ！！！！！」

「うっさいッ！！！！」「ドゴッ！！！」

理不尽だ。

「なあ、そういえば音耶君は勉強しなくてええんか？そんな頭良くないんやろ？」

「1人寂しくPSPをピコっていたら、狸が聞き捨てならないことを言いやがった。」

「はん？頭が悪い？現代のピカソと言われた、この俺が？」

「いや、それ芸術家やから」

「ふむ、俺に向かって頭が悪いと言った狸に問題だ」

「……頭かち割ったるか？」

「トウルンツ！！問題、鎌倉幕府はいつ出来たか？」

「1185年やる？簡単や」

「え？」

「え？」

「お…おう、正解」

「あんたも勉強追加」

何故だ。

「うう、歴史がまったく分からない…」

勉強会に追加され30分。

フェイトが音をあげた。

忍耐力の無い子。お前は忠犬のはずだろ？

八千公見習えや。

「記憶するだけだろ？」

「それが出来れば苦労しないんだけど…」

「そういえば自分の好きなものに例えると、覚えやすいつて聞いた

で？試しにほら、本能寺の変を想像してみ」

「本当？えっと…私の好きなもの……」

（フェイトの愉快的な頭の中）

巨大な寺の前に、馬に跨ったある男がいた。  
名は海堂海斗。  
後に有名となる武将である。

「皆のもの！！敵は本能寺にあり！！行くぞッ！！！！」

海斗の一声で大勢の兵が、本能寺を包み込もうとした。

「……クソっ……ここまでなの……」

燃え盛る寺の中、1人の女が今窮地に立たされていた。

「まさか海斗君が……ここまでやるなんて……」

思い浮かぶは彼が部下だった時の記憶。

しかしそれも過去。

今は現実を見なければ。

だが、現状は変わらない。自分はきつと殺されるだろう。

「しかしこの、高町なのは！！決して敵になど殺されないのッ！！」



「良かった、無事で、なのは、なのは!！」

「一体なんなの~~~~!!」

「アホだな」

フェイトは正気を取り戻すと、顔を真っ赤にして海斗に謝った。

海斗は「ええんじゃ」と言っつてフェイトを撫でた。

次の瞬間、海斗は宙を待っていた。

不思議だ…。

ナデポならぬナデゴツ!!か？

色々あったが勉強会は再開された。

俺はなのはと勉強していたが、なぜかアリサに追い出された。

アリサ曰く「あんたがいると、なのはが集中できないの。ほら、バカ2人に混じって勉強してなさい」

理不尽だ。

「そういう訳で、この部署へ配属された、西野音耶軍曹であります」

「よう来たな、音耶軍曹。私は部隊長の副官をとる、八神はやて少佐や」

「そしてワシは部隊長の、海堂海斗大佐じゃ」

「よろしくおねがいます」

「ふむ、さっそくじゃが、この部署についての説明をする。八神少佐」

「はい。この部署は、女体に関する考察を主に担当しております。世界には様々な女体が存在しますが、我々は数ある女体の内、どれがいかに素晴らしい女体なのかを選定するために、設立された部署であります」

「ふむ、ご苦労じゃ。理解できたかの軍曹？」

「はっ！私は素晴らしい部署に配属されたのですね」

「ええ、ここより上はあらへんよ」

「では、さっそく今回の議題を発表する。今回は『巨乳の素晴らしい女体について』じゃ」

「意義ありッ！ー！」

「ふむ、発言を許す」

「はっ、巨乳の輝きなどほんの一瞬。言わば流れ星のような物。将来は垂れます！」

「意義あり！」

「発言を許す」

「その一瞬の輝きが、美しいのではあらへんのか？確かに垂れるかもしれないけど、それは昔、輝いていた証拠です。なので私は巨乳を推します」

「はんっ！将来垂れる物になんの意味がある」

「……何が言いたいんや、軍曹？」

「私はペチャを推します」

「何を言う、揉めない乳などに意味はあらへん！！」

「垂れるよりはいい！！」

「静粛にッ！……ここはもめる場ではないぞ？」

「すみません」

「ふむ、では軍曹の意見から聞こうかの」

「はい。私はあくまで巨乳を否定します。巨乳など、少女には不釣り合いです」

「ふむ、しかし今はそういう需要もあるのдар?」

「それは堕ちた者たちの意見です。彼らは忘れてしまっている、少女はナイチチという教えを…」

「ひとつええですか?」

「なんじゃ、八神少佐」

「先程から少女と言つ言葉を耳にしますが、まさか軍曹はロリコンですか?」

「なッ!? ロリコンって言うやつがロリコンなんだッ!」

「図星のようやね。音耶軍曹はロリコンと…」

「違う! あくまで父性本能だ!」

「ほお。……軍曹、取引せえへんか?」

「取引? ……何ですか?」

「我が家にはヴィータっちゅう娘がいる。軍曹の好きなロリロリや」

「ふんっ、それがどうしました?」

「しかもツンデレ属性。私にはデレるんやけど、そらぁ可愛ええで」



「なっ…っ、ツンデレロリ…だと？」

「ああ、しかもその娘はちょっと特別でなあ、なんと……エターナルや」

「！！？？……おお、神は存在したのか…」

「どや、会ってみたいか？」

「ふふっ、負けたよ少佐。取引成立だ」

「あんがとうな、軍曹」

「しかし、何故そこまで巨乳を？」

「乳は私にとって全てなんや…」

「素晴らしい…そこまで…」

「いや、あなたのペチャに対する気持ちもよう伝わったわ。これからは手を取り合おうやないか」

「はっ、どこまでも着いて行きます少佐！！」

「うむ、決まったようじゃのお。では、判決『乳に上下関係なし！  
！全て平等！！』じゃ」

「」「異議なし」

「うむうむ、ではこれで議k「あんた達……何してる訳?」「つく!  
総員撤退!」ワシもn「何処行くの?海斗君」す、すずか嬢……」

「あかん!!部隊長が捕まった!!はよ逃げ」「はやて、逃げちゃだめだよ」「ふえ、フエイトちゃん……」

「八神少佐ツ!!」

「来たらあかん!!軍曹は逃げえっ!!そして、世界に乳の良さを  
!!!!!!」

「く、くそおおおおおッ!!!!」

「頑張つてな、軍曹。私は世界中の乳を愛し、そして、世界をト」  
「なに言ってるの?はやて」ちょ、辞書はあかんてっ!フエイトちゃ  
ん!!!!」

「ありがとう少佐。あなたのお陰で大切なものに気づけた。だから、  
俺は貴方の想いを世界にツ!!!!??」

「何処行くつもりなのかな?音耶君」

「魔王か……。しかも目に光が灯っていない。バーサーカーモードか  
……最悪だな……」

「魔王じゃないの。なのはだよ」

「悪いがここは通らせもらうぞ。少佐の想いを無駄には、ツグハア  
……」

「逃がさないわよ……」

「辞書は反則だろ……って、お前は！？魔王の配下、四天王が1人、  
金髪緑眼炎の守り手、アリサ・バーニング！？」

「……………」

「ふっ、どうやらここまでみたいだな……。すみません少佐……。約束  
……守りませんでした……」

「 H A N A S H I よ ( な の ) ……」

この日、3人の命が散った。

しかし彼らの想いは、きつと誰かの胸に残っているだろう。

続く!!!!!!

## 第6話 学力テスト。マジで語ろう(後書き)

音耶君はロリコンのようです(笑)

本人は否定してますけどwwww

しかし、今回の話の後半。

はやてと海斗と音耶で、凄くやりたかった話なんですよね。

ちなみに作者はロリコンではありません。

第7話 学力テスト2。マジでやればモーマンタイ（前書き）

今回は後編です。

書くのに1時間半かった…。

一日一話が限界かな？

頑張れば二話行けるかも。

## 第7話 学力テスト2。マジでやればモーマントイ

海鳴市の惨劇から早1時間。

時刻は昼。

俺たちは某ファミレスへと来ていた。

ファミレスはいいよ。安いしくつるげる。

「のう音耶、ワシがピンポン押してええかの？」

隣に座る海斗がガキっぽいことを言ってきた。

因みに席は4人がけ席をドッキングさせた、簡易8人席だ。

席順は窓側が、海斗、俺、はやて

通路側はフェイト、なのは、すずか、アリサとなっている。

で、話を戻すが海斗が実に子供っぽい事を言ってきた。

ピンポン…それを押せば店員が駆けつけて来るといふ、画期的な機械。

幼稚園児、小学校低学年に絶大な人気を誇るボタンだ。

しかし、俺たちは中学生。

そんなボタンなど興味ないわ。

「と、引き下がる俺ではない。ピンポンは俺が押す」

「嫌じゃ、ワシが押す」

「黙れ。そのボタンはお前にはまだ早い」

「嫌じゃ!!!ワシが押す!!!」

「ダメだ、俺が押す」

「ワシじゃ!!!」

「俺だ」

ピンポン

「「あ」

「あ、あれ?もしかして押しちゃだめだった?」

「いや、ナイスよフェイト」

「ボタン一つで恥ずかしいの」

俺たちが聖なるピンポンを取り合っていると、あることが金髪忠犬フェイ公が押しやがった。

「~~~~!!フェイト嬢のバカッツ!!」

「きつとお前の心はヘドロで出来ていた。そして泣くなバカ、きもい」

「そういう音耶君も、目に水が溜まってるで」

「いや、これは心のあゝ」おまたせしました。ご注文はお決まりですか?」喋ってる途中に入ってくるとか。いったいどうゆう教育をされてる、店員?」

くそっ、ちょっと可愛いからって許されると思っな。  
ドリンクバー制覇すっぞ、このヤロー。

「すみません、こいつらは気にしなくていいです」

「は、はぁ」

「えっと、ドリンクバー7つ。あたしは、たらこスパゲティです  
ずかは？」

「わたしも同じものを」

「私は日替わりランチお願いします」

「私はサンドイッチで。なのはは？」

「わたしは、おろしハンバーグで。あとランチセットBお願いしま  
す」

「そちらのハンバーグは人肉ですが、よろしいでしょうか？」

「はい…って、何言ってるの!?!音耶君!?!」

「はい、って言ったよこの人。あ、俺リブステーキ、ランチセット  
Aで」

「か、かしこまりました。…あと、当店は牛肉ですので…」

「そんなこと分かっている。ジョークも分かんのか?今時の店員



「は

「す、すみません!」

「あの、本当にこいつは気にしないでください…」

「は、はい。」注文は以上でよろしいでしょうか?

「はい、お願いス」ワシがまだじゃ!」「いたのか虫」

「虫!? まあええわ。ワシはえびグラタン。えびとマカロニ抜きで」

お前も帰れ。

「ええよ、なのはちゃん達のも持って来るわ」

さすがはやて、良くわかつてる。  
アリサとは大違いだ。

「ありがとう、はやてちゃん。わたしはコーラお願い」

「私もコーラで」

「わたしは紅茶をお願いしていいかな？」

「俺はk「わかつた、ほな行って来るわ」お前もか、少佐」

信じてたのに裏切つたな、少佐。  
仕方ない、行って来るか。

「おい虫。おまえのも持ってきてやる」

「まじか？なんじゃ、音耶最高じゃな…。目頭が熱くなってきたわ  
…」

「親友だろ？で、何にするんだ？」

「親友……。なんでもええわ…親友の持ってきたもんなら何でも飲  
んじやるツ！！」

「任せろ。心を籠めて注いできてやる」

こうして俺はドリバコーナーに向かった。

親友のためだ、一肌脱ぐか！！

「で、なんじゃこれ？」

「ミックスジュースだ」

俺は親友のために頑張った。

親友の目の前には、七色に光る飲み物が置いてある。  
これを作っていた時は、周囲の目が凄く痛かった。

「色々ミックスしすぎじゃろ！！」

「ミックスジュースだからな」

「うわぁ…さすがにやりすぎなの」

魔王御一行は可哀想な眼差しを、海斗に向けている。

「お前、親友の作ったもんなら飲むって言ったよな？」

「け、けど…これはあかんで」

「飲むよな？」

「くう…ええけん！！飲んじゃるわ！！」

海斗はグラスを勢い良く持ち上げ、立ち上がった。  
やる気だな、こいつ。

そんなお前に、敬意を籠めてこの言葉を贈ろう。

「お前にレインボー！！！！！！」

「あ、あれ名作やな」

海斗は逝った。

その後は普通に食事を取り、再び図書館自習室。  
海斗？

ご想像にお任せします。

「ねえ、アリサちゃん。ここ分らないけど…」

「ああ、ここは…」

「すずか、ちょっといいかな？」

「うん」

「すずかちゃん、私もええか？」

「……………」

皆、黙々と勉強をしている。

さすがに危機感が湧いたか？

1人だけ顔色がゾンビになっているが。

しかし、あれだな。

人が真面目に何かをやっている時って、邪魔したくなるよな？  
なるだろ？

よし、邪魔しよう。

（音耶inアリサ&なのはコーナー）

「捗ってるか？」

「音耶君。うん、まちまちかな」

「あなた、何しに来たのよ？邪魔するなら、あっち行ってなさい」

「失敬な奴だな。俺も手伝いに着たんだよ」

ふむ、なのはは国語が苦手か。

日本人として恥だな。

「俺も国語は得意だ。なんでも聞いてくれ」

「ありがとう。じゃあ、この文の尊敬語の部分なんだけど……」

「孫・圭吾？」

「え、うん。尊敬語」

孫・圭吾？

中国人か？いや、圭吾は日本人だよな。

孫はきつと、三国時代に活躍した孫家のことだよな。

じゃあ、圭吾は？

やっぱり日本人だよな……。

孫…三国時代…日本人…圭吾…

…はッ！？まさか……。

よし、答えは導き出された……。

「なのは、答えがわかった」

「本当？教えてもらってもいい？」

「ああ……。孫・圭吾…三国時代に呉軍で活躍した武将で、孫家の1人。孫権の弟であり、日本人とのハーフ。享年37歳。若くして病でこの世を去った、悲劇の武将……。わかったか？」

「意味わかんないわよッ！！！！」

追い出されました。

何故だ。

「音耶innすずか&フェイト&はやてコーナー」

「ういゝす」

「……何しにきたん？」

なんだ、その帰れって目は？

俺は邪魔などせんよ。

「ああ、お前達に勉強を教えにきた。アリサとなのはには好評だったぞ？」

「ほんまか？アリサちゃんの怒声が聞こえた気がするんやけど…」

「怒声じゃない喜声だ」

「音耶、ここ分かる？」

フェイトが見せてきたのは、社会の教科書だった。

『第一次世界大戦』

戦争か？けど、第一次？

第二次が最初じゃないの？

けど、一っつついてるしな…。

知られざる戦争ってことか…。

「ふむ〜…」

「やっぱり、わからない？」

「ん〜…戦争…第一次…知られざる戦争…はッ!？」

「わかったんか？」

「…第一次…聖杯戦争…」

「なんやて!？」

「え?あ、あれ？」

「聖杯戦争がどうかしたの？」

「すずかか…。聞いてくれ、過去に第一次聖杯戦争が行われていたらしい…」

「えっ!？」

「まさか、現実で行われていたんか…」

「じゃあ、時期的にそろそろ第五次聖杯戦争が?…」

「ああ…、既に始まっているかもしれない…」

「「ッ!？」」



「ね、ねえ…三人は何話してるの？」

「すまん…フェイトちゃん。今は勉強どころの話やないんや」

「そうだね、戦いは既に始まってるとだよ…」

「それで？2人はこれからどないするん？」

「俺は遠坂家に行く。アーチャーに無限の剣製を習いたい」

「わたしは桜ちゃんの所かな？助けてあげたいし」

「私はイリヤの所や。バーサーカーの漢気に惚れた」

「全員別々か…」

「悲しいね…」

「仕方あらへん…。これも聖杯のためや…」

「ツ！？見る！！海斗が！！！」

「なッ！？海斗君！！！」

「生氣を感じられない…。まさか…キヤスターが？」

「柳桐寺か！キヤスターめ…！」

「皆、予定変更や。柳桐寺に行くで」

「うん、海斗君の仇を…」

「ああ、よし！柳桐寺に行くぞ！！キャスター、海斗のk」ガッ！！  
なんか、ガッ！！された。

後ろを向いてはいけない気がする。  
けれど向いてしまうのが人の性。

「おお…まさかアリサ…、お前がアヴェンジャーだったとはな…」

片手に何故か俺のバックを持った、アリサもといアヴェンジャーがいた。

笑顔だが眉がピクってるぞ。

「だが捕まるわけには行かぬ。俺は海t「あんた、もう帰れ」意義を申し立てる」

帰されますた。  
何故だ。

時は過ぎ、月曜日。

今日は学力テスト。

勉強を頑張った奴が報われる日。

「さて、今日は学力テストよ。皆、気合入れなさい！」

ホームルームで担任の三十路が話している。

と、なぜかフェイトが手を挙げた。

「どうしたの？ハラオウンさん？」

「あの…海斗が来てないんですけど…」

そういえばいないな。

なんだ？昨日のミックスジュースで腹でも壊したか？

「ああ、海堂君ね。海堂君は昨日、急性胃腸炎で倒れたらしいわよ。3日ほど入院だって。皆も気をつけさい！」

ま・じ・か。

そして、テスト返却日。  
俺たちは放課後、翠屋に来ていた。  
士郎さんは意外と俺に対して普通だった。  
別にブルってた訳じゃねえよ？

席に着きケーキやら飲み物を頼んだ。  
俺は勿論コーヒーだけ。

「さて、テストの結果を発表し合うわよ！！」

ケーキや飲み物が運ばれた後、アリサが今回集まった目的を口にした。  
因みに海斗は復活し、後日テストを受けた。

「あたしは平均92点！！赤点は勿論なしよ！！！」

「……お〜！」「……」

「じゃあ次はわたしだね。平均91点。アリサちゃんに負けちゃったな」

「……お〜！」「……」

「次は私だね。平均70点、赤点は回避できたよ。ありがとう、すずか」

「うん。おめでとうフェイトちゃん」

「次はわたしなの。平均52点、赤点なし！ありがと、アリサちゃん！」

「どういたしました。次は、はやてよ」

「私は微妙やな。平均46点。赤点はなかったわ」

「ま、赤点がないなら良いじゃない」

「そうだよ、はやて。……海斗に比べればマシだよ……」

「言わんとして！？フェイト嬢！」

「……あなた、そんなにやばかったの？」

「……平均12点……。全教科赤点や……」

「」「」「うわぁ〜」「」「」

「ワシなんか、笑えば良いじゃろつが！！」

「ははははははははははははッ！……！！！」

「ほんまに笑うん！？」

「で？そこで優雅にコーヒーを飲みながら笑ってる奴。あなたは何点よっ。」

アリサがニヤニヤしながら聞いてくる。  
俺が赤点だらけだと思っているな。  
しかし甘い！甘すぎるよアリサ君！！

「ほら、高貴なる点数だ」

俺は鞆から答案用紙を取り出し、机に放り投げる。  
理科の答案用紙が、海斗のケーキに刺さったが気にしない。

「えっと…国語98点!？」

「数学100点なの!？」

「社会は98点!？」

「英語は88点や!」

「理科は96点じゃ…化け物じゃ!」

「えっと…平均96点っ!すごいね、音耶君」

「どうせ中学生程度の問題。真面目にやればモーマンタイ」

俺の一言で何人かが崩れ落ちた。  
中卒とは違うのだよ、中卒とは。



第7話 学力テスト？。マジでやればモーマンタイ（後書き）

意外と頭が良い音耶君。

所詮、中学生の問題だから。

これが高校の問題になると、おそらく赤点があります。

そして海斗。ドンマイッ！..



## 番外編 海斗の過去（前書き）

こんにちは！

今回は海斗の過去についてです。  
過去といっても、原作者との出会いについてですが。

因みにギャグは少なめです。

それと皆様にご報告！！

今日、なんとなくアクセス数を見たんですが、見た瞬間、驚いてコーヒーを吹きそうになりました（笑）

なんと、PV13万突破！！ユニーク15000突破！！しかも、お気に入り900件突破！！

うううううひゃっほおおおおおおおおおおおおおッ！

！！！！！！！！

まさか執筆4日目で、ここまでいくななんて思ってもいませんでした！

これも皆様のおかげです！！

本当に応援ありがとうございました！！

これからも、精一杯精進していきます！！



## 番外編 海斗の過去

「やあ、こんちやあー！」

「ワシの名前は海堂海斗。またの名をダブルシーじゃー！  
かっこええじゃろ？」

「おーいつ、海斗〜いつまでも寝てんじゃね〜ぞ〜」

「おっ、姉御が呼びじゃー！」

「急ぐかの！」

「はよ、姉御」

「おー、さっさと飯食っちまえよ〜」

「この人はワシの姉御。」

「ワシが言うのもなんじゃが、中々の美人じゃ。」

「ただ、24歳になっても彼氏が出来ない可哀想な姉御じゃ。」

「海斗〜……殺すぞ」

「なんでじゃっ!?!?」

「いや、なんかバカにされた気がした」

感が鋭い怖い姉御じゃ。  
くわばらくわばら。

「じゃあ、先に行くからな〜」

「気張ってなあ〜」

朝、ワシより早く家を出る姉御。

目的は出勤。あれでも一応まじめなんじゃ。

ワシは学校へ行く準備をするため、一度部屋に戻る。

『おはようございます、マスター』

「おはつ、カラミティー!!」

部屋に入ると、ワシのデバイスであるカラミティが挨拶しとってくれた。

こいつは父ちゃんから譲り受けた、インテリジェントデバイスじゃ。堅っ苦しいが、良い奴じゃ。

『マスター、早くしてください。遅刻は許しませんよ』

ただ、母ちゃんみたいな奴じゃ。

「ちょっと待つてな。今ふたりに挨拶するわ」

ワシの机の上に置いてある両親の写真。

毎朝、挨拶するのが日課じゃ。

「母ちゃん、父ちゃん、行ってくる。今日も見守っててなあ」

挨拶を終えると、早速学校へ向かう。

今日も1日頑張るかのー!!

「虫、春巻き寄越せ」

「虫!? まあええけど。ってもう食ってるんじゃ!?!」

昼休み。

いつもの場所で、いつものメンバーと昼食をしている。

最近は1人メンバーが加わって、一層賑やかになったんや。名前は西野音耶。

不思議な奴で、なに考えてるかようわからん。

けど面白い奴で、今やワシの親友じゃ!

「なあ、私気になってたんやけど、海斗君はなんでこのメンバーにおるん？」

……え？

つまり、ワシは邪魔だと…？

何故じゃ…目頭が熱くなってきたわ…。

「おい狸。なに虫を泣かしてんだよ」

「ちょ、ちょおまちい！そういうことやなくて、海斗君が何でなのはちゃん達と、仲がいいのか気になって！」

「あつ、それ私も思った」

「せやろ？全然タイプ違うやんか、なのはちゃん達と」

「言われてみればそうだな。魔王と虫だから、食う側と食われる側だしな。全然タイプが違う」

「ひどい！？わたし虫なんかたべないの！！」

なのは嬢との出会いか…。

懐かしいなあ、確か9歳の頃やったっけ？

「聞きたいんか？なのは嬢との出会い」

「うん、聞かせてほしいな」

「そか、なら少し長くなるで？」

「なら、言わなくていい」

「聞いてやっ!?!?」

あれはワシが9歳の頃…

「おいおい、なんか語りだしたぞ、この虫」

（海斗・9歳）

「はあ、今日もつまらんかった…」

ワシは、最近お気に入りの神社へと来ていた。神社の裏手にある大木に腰を下ろす。

姉御が帰ってくるまでは、いつもここにいた。

両親がこの世を去ってから1年。

ワシは抜け殻のような生活をしていた。

「こんなことなら、転生なんぞしなければよかったのじゃ…」

そう、ワシは転生者じゃった。

事故死したはずのワシは、いつの間にか何もない空間にいて、神とか名乗る爺さんに会った。

爺さんは、ワシを転生させてくれると言った。

転生先は『魔法少女リリカルなのは』の世界。

ワシはそういう知識が無かったため、原作など分からなかった。そして神の爺さんはワシに、2つの能力をくれると言った。だからワシは、

『守れる力』と『ニコポとナデポの能力』が欲しいといった。

『守れる力』は、ワシは原作介入するつもりが無かったので、最低自分だけは守れるように、この能力を選んだ。

結果、ワシは結界やら防御やらの魔法適正が非常に高く、今や結界魔導師として魔導師登録されている。

『ニコポとナデポの能力』は、まあ、若気の至りじゃ。

けど、あの時はまさか、こんな変な能力に変えられるなんて、思ってもなかったのお。

そんなこんなで転生したワシは、ミッドで幸せに過ごしておった。

管理局員の父ちゃんと母ちゃん。同じく管理局員で、おっかないけど優しい姉御。

父ちゃんからはライフルによる射撃技術を、母ちゃんからは魔法を教えてもらった。

おかげでワシは7歳で管理局員となり、天才などと言われていた。

けど、局入りから1年。事件は起こったのじゃ。

とあるロストログア捜索任務を父ちゃんと母ちゃんが受けた。

しかし捜索の途中、偶々違法魔導師の組織と遭遇してしまい、母ちゃんと父ちゃんは殺された。

ワシにとって、衝撃的な出来事じゃった。

それからワシは心を閉ざしてしまい、姉御はワシを心配して管理局をやめた。

ワシも管理局をやめて、姉御と静かに暮らす事にした。

そしてここ、海鳴市へとやってきた。



海鳴市へとやってきて1年。

ワシは姉御のお陰で、ここまで精神的に回復した。けれど、なぜか毎日が昔のように楽しくない。

理由は分かっとなる。

2人の死という事実を、まだ受け止められてないんじや。

1年も過ぎたのに前に踏み出せないなんて、ほんまワシは弱虫じや。

「ワシはどないすればええんじやろ……」

ため息をついた、その時だった。

「ッ!? 魔力反応!?!」

突然、神社内で大きな魔力反応を感知した。

ワシは驚きながらも急いで表へ周った。

したら、あらびっくり。めっさデカイ犬っころがいたんじや。

しかも女の子に襲いかかろうとしている。

ワシは即座に魔法を使った。

「チエーンバインドッ!」

土色のチエーンが犬っころを縛りつける。

女の子は突然の介入に驚いたのか、その場で呆けていた。

「はよう逃げえ!!」

ワシの言葉で我を取り戻した女の子は、否定するように首を振り、なんやりリカルマジカルなんていい始めよった。ちよっと笑ってしもうたのは内緒じや。

その女の子はなんや魔導師らしく、速攻で封印魔法を使った。犬っころはミニサイズに戻り、一件落着した。と、女の子がワシに近づいて来た。

「あのっ、ありがとございました!!」

「気にしないでええんじや。君、魔導師よな？」

「え？魔導師？」

「え？」

女の子の事情を聞くとどうやら、この子はできたてホヤホヤ魔導師らしい。

しかも、つい最近まで一般人だったらしい。

なんやてそんな子が、魔法を？

答えは、大体フェレットのせいらしい。

とりあえずフェレットを地面に叩き付けてやったわ。当たり前じゃろ？

何、一般人巻き込んだるんじや。

「仕方ないのお、ワシも手伝ってやるか」

「えっ!?!いいんですか!?!」

「ああ、こつ見えても凄腕の結界魔導師じゃっ!」

「あ、僕も結界魔導師です」

なんやて。

〈回想終了〉

「これがワシとなのは嬢の出会いじゃ」

ワシは魔法の事を隠して、大体の経緯を話した。

「ほ、中々衝撃的な出会いやな」

「それでその後、色々あって仲良くなったんだよね」

「せや、アリサ嬢とすずか嬢に会ったのも、なのは嬢に紹介されてな」

「しかし、暗い虫か…。想像できねえな」

「確かにあん時は暗かったのう。ま、なのは嬢見てたら吹っ切れたけんど」

「それわかるよ、なのは見ると和むよね!」

「百合は黙ってる」

「百合！？違うよ、私は……」

フェイト嬢が必死に抗議している。

しかし、あれから4年かあ。

ほんま色々あったわ。

なのは嬢の手伝いをしたり…

アリサ嬢とすずか嬢に出会ったり…

フェイト嬢と戦闘したり…

そういえばクレスと出会ったのも、そんな時やったな。

たしか、アースラに乗ってた管理局員だっけ？

そんで、フェイト嬢の母親が逝ったり…

フェイト嬢と和解したり…

ほんま色々あったわ…。

「フェイトちゃんは、ほんまなのはちゃんLOVEやなあ」

「も、もう！はやてまで！！」

そういえばはやて嬢と出会ったのも、その後じゃったな。

守護騎士との戦闘…

はやて嬢との出会い…

防衛プログラムとの戦闘…あつ、確かあん時はム力つくことがあったな。

皆が頑張ってる時に、いきなりクレスが出てきて防衛プログラム破壊したからなあ。

あん時のドヤ顔はウザかったわあ。  
今まで一度も手伝わんかったくせに。ひとりだけいいとこどりやで？  
マジむかついたわあ。

「おい、虫。お前も百合犬に何か言ってるやれ」

「また虫！？フェイト嬢」

「海斗、私百合じゃないよね!？」

「…………百合もアリじゃっ!?!」

「海斗まで!?!」

色々大変なこともあったけど…

母ちゃん、父ちゃん、ワシは今幸せじゃ!?!?!?!

第8話 厨二襲来。マジで帰れ小僧(前書き)

死んだ…。

明日からバイト4連勤…。

冗談抜きで死ぬお…。



「とりあえず、絶体絶命だ」

現在クラスのほとんどの者が死んでしまい、我がチームで残るは俺、なのは、海斗の三人だ。

はつきり言って不安で仕方がない。

対して相手チームはアリサ、フェイト、すずかという運動神経抜群の3人娘だ。

はやて？

ああ、あそこで応援してる奴？

「さあ、もう諦めなさい！あんた達じゃ私達に勝てないわよ！！」

「諦めたら試合終了、って安西先生が言ってた」

バーニングアリサが何か言っているが気にしない。

そう、諦めたら試合終了だからな。

「だったら死になさい！！」

「ちっ、魔王！今こそ覚醒の時だ！！」

「ええ！？」

くそ、魔王は役立たずか…。

と、アリサがボールを投げてきた。

狙いは…魔王か！！

「きゃああああ！？」

「なのは嬢！？」



「ちっ！聖なるバリア、ミラーフォース！」

「え？ちよっ、音耶なにsゴフオオツツツ！！！」

なのはに迫っていたボールを、海斗が身を挺して防いだ。  
海斗…良くやった…お前は虫の中の虫だ！！

「お、音耶君？」

「何、気にするな。女を守るのが男の使命だ。お前は俺の後ろに隠れている」

「~~~~~！？音耶君……」

そんな見つめんなって、照れるじゃねえか。  
さて、尊い犠牲を払ってここまで来たんだ。  
絶対に負けられん！！

「アリサ、一騎打ちだ」

「ふん、かかってくるなさい！！」

「残念だがお前の負けだ。俺のショットは108式まである！おお  
おおおおおッ！！！！」「ビュンッ！！

「くっ！！」「バシッ！！

と、止められた…だと…。

俺の108式が？おいおい冗談はやめてくれ。

「ふふっ、全然ちよろいわよ!!」

「くっ!C組のモビルスーツは化け物か!？」

「意味がわかんない、わよッ!!」「ビュンッ!!」

「音耶君!？」

俺に狙いを定めてきたか!？

しかし、遅すぎる遅すぎるよアリサ君!!

「ローリングッッ!!」

「え…きゃん!!??」「バコン!!」

「」「」「」「あ」「」

「……………何故魔王が俺の後ろにいる」

「あんたが隠れてるって言ったんでしょ!!」

言っただけ？

「なのは、大丈夫？」

「うつつ…鼻がいたい…」

「反省はしている。しかし後悔はしてない」

「してよ!？」

昼休み。

ボールにキッスしたなのは、そのまま気絶してしまい保健室へと運ばれた。

戻ってきたのはいいんだが、今だ鼻を押さえている。まったく、軟弱な奴だ。

「まったく、アリサが本気で投げるから…」

「あんたが避けたんでしょ!！」

「うつつ、人のせいとか。親の顔が見てみたいわ」

「あ、あんたねえ…!」

「まあまあ、アリサちゃん落ち着きい。なのはちゃんも大事なくてよかったなあ」

「せや、ワシなんか食い物が喉に通らへんで？」

「海斗君、病院行った方がいいよ」

そんなこんなで、いつも通りほのぼのしている時、事件は起こった。

「なのはッ！！！！」ボタン！！

突然、教室のドアを乱暴に開いた大きな音。

そして、魔王を呼ぶ大きな声。

振り向くと…

「ま・た・お・ま・え・か」

厨二がいた。

厨二はものすごい剣幕で、なのはに詰め寄る。

「なのは、大丈夫かい！？大怪我をしたって聞いたんだけど！？」

「く、クレス君！！近い近いっ！！」

「ああ…無事そうでよかったよ…。ッ！？なのは、鼻が赤くなってるじゃないか！！！？？」

「こ、これは、ボールが当たって…」

「ッ！？なのはの顔にボールがッ！？」

「ちなみにコイツのせいや」

「ちよつ、余計な事を」

キモイほど心配する厨二に、狸が余計な事を言いやがった。

厨二はホラーばりに首をグリンツして、俺を見てきた。

「また貴様かッ！いつたい貴様は何がしたい!？」

「生きていたい」

「「ぶはっ!」「」

おい、何故笑う、狸と虫。

「貴様ッ！また僕を馬鹿にしてえ!!」

「俺はいつだって真剣だ」

なんかもう厨二の顔が放送禁止になっている。

「大体貴様は何なんだ!!何故なのは達と一緒にいる?!」

「俺に聞くな。俺は被害者だ」

こいつらが俺に付きまとうんだ。

いや、別にいいんだけどね。  
何気に話合っし。

けど、魔王はちょっと…。

「なのは!何故こいつと仲良くしてるんだい!??」

「えっと、友達だからだよ?」

「ッ!?!友達…だって?」

厨二は驚きに満ちた表情をしている。  
お前あれだよ、きつと顔芸で食っていけるよ。

「友達……ッ?!…そうか、貴様もなのはを……」

何一人でブツブツ言ってるの?

はっ!? これも厨二特有の症状か!

「おい貴様」

「なんだ厨二?」

「うち! 本当にムカつくやつだな…。 まあいい…貴様は、なのはが好きなのだろうか?」

「にあ!?!」

What?

ナノハガスキ?

おいおい、冗談は厨二病だけで勘弁してくれよ。

「貴様はなのはが好きだからこのグループに近づいた。 違うか?」

「全然ちげえよ。 なんだお前、頭でも湧いてんのか?」

「はっ! それは僕の台詞だ。 煩惱にまみれた俗物が」

「あ? てめえ人の話聞いてたか? ちげえって言ってんだろ」

「言葉ではそう言っているが、中身はどうなんだろうね? に・し・

の・君」

あ、今のはイラッてきた。

大体なんなのコイツ。いきなり出てきてペチャクチャと。シューズの中にクワガタ入れとくぞ、このヤロー。

「あれ、凶星かい？」

「てめえ、人が黙ってれば言いたい放題言いやがって。なのはが好き？はっ、誰が魔王なんか好きになるか。自ら魔王の下僕になるほどMじゃねえんだよ。つうか、なのはの事を好きなのは teme だろ？もしかして俺への嫉妬で、今まで絡んできたのか？うわっ、男の嫉妬とかマジきめえ。大体、俺が魔王を好きになるなんてありえねえんだよ。俺が愛する女性は雪音だけだ。雪音マジカワユス。つうかお前、魔王に好かれてえなら厨二卒業しろや。てめえが近くにいてるだけで恥ずかしい思いをするってわかんねえのか？さすが頭沸いてる厨二だな。そんな事もわからないなんて。わかつたらさっさと失せろ。てめえが近くに居つとk「ちょ、もうええやん！！ストツプストツプ！！」……ちっ」

「ふ、ふん！貴様が何を言おうと、僕は騙されないぞ！！」

「あ？まだわかんねえのか？」

「ちょお落ち着きいや、音耶君！！確かにコイツがうざったいのは、ようわかるけどー！！」

「言っておくが、君になのはは渡さないからな！！なのはは僕のものだー！！」

そう捨て台詞を残して、厨二は教室から去っていった。  
つつか、なのはは僕のもの、だって。  
マジキモす。

「……魔王も災難だな。あんな奴にす………何故泣いている」

振り向くと魔王が泣いていた。  
しかもマジ泣きだ。

「ふえっ…グス…えぐっひくっ…」

「音耶君、いいすぎだよ…。なのはちゃん可哀想…」

「アンタ最低ね」

「ストレートに、お前にチャンスなど存在しない、って言われたも  
同然じゃからな」

「なのはを泣かせたなのはを泣かせたなのはを泣かせたなのh…」

何故、俺が悪者になっている？

つつか、忠犬フェイトがやばい。

「自分の胸に聞いてみい。そういえば、音耶君の言ってた雪音って  
誰や？」

「ワシも気になっつたわ。愛する人言つてたもんな」

「雪音は俺だけの聖女だ」



「いや、わからへんから」

「ふむ、雪音は愛しい愛しい妹だ」

「え？アンタの妹さんって亡くなったんじゃ…」

「勝手に殺すな。現在進行形で元気だ」

「「「え？」「」」

何故驚く。

「はあ…今日は本当に面倒だった…」

現在俺は、マイホームのリビングに居る。

結局、いつまでも泣き止まなかった魔王に、俺はD O G E Z A  
をした。



「で、何のようだ？」

『いきなり普通になったな。突然やけど明日暇？』

「暇じゃない。雪音を一日愛でないと」

『よし、暇やな。明日私人家で鍋パーティーするから、よかったら参加せえへん？勿論妹さんも連れてきてええで』

「全ての判断は雪音に委ねる。雪音、狸が話たいつて」

「狸さん…？」

「ああ、狸さんだ」

俺はケータイをスピーカーモードにして、雪音に近づける。

「……こんにちわ」

『ああ、妹さんやな？こんにちわあ』

「狸さん…？」

『たぬッ！？音耶君…後で覚えときい……。雪音ちゃん、狸ちゃんで。はやくてさんや』

「覚えてたらな」

「はやくて…さん？」

『せや。それでなあ、明日鍋パーティーするんやけど、よかつたらウチに来いひん?』

「鍋……食べ放題?」

『うん、たんまりあるでえ』

「……行く」

『そか、ほな待ってるわ。じゃあ、兄ちゃんに代わってもらってもええか?』

「……うん」

俺はスピーカーカモードをオフにして、再び耳に持ってくる。

「てな訳で、明日参加な」

『わかつたわ。それにしても音耶君』

「なんだ?」

『雪音ちゃんの声たまらんなあ。まさにAngel voiceや』

「よし、肉は俺に任せろ」

『え?あ、おおきに。ほな、また明日な』

「おお」

ピッ

「雪音、明日は鍋パーティーだ！」

「…わーい」

可愛いなあ、雪音は。

しかし狸よ。良くわかってるじゃないか。

## 第9話 鍋パーティー！。マジで幼女だ（前書き）

こんにちわ、二足歩行犬です！！

皆様には様々なご感想をいただき、本当に感謝しています。

その中でも多かったのが、なのはフラグについてです。  
なので、補足として説明しておきます。

なのははまだ、音耶君のことが気になってるだけです。  
まだなのは自身、好きという気持ちに気づいていません。

泣いたり構ってもらおうとしているのは、あくまで音耶君にボロク  
ソ言われたり、もっと音耶君を知ろうとしているからです。

なので、なのはは『まだ』純粋な少女です。

なのはについての詳しい事は、近々予定している番外編にてご確認  
ください。

では、本編へどうぞ。

## 第9話 鍋パーティー！。マジで幼女だ

土曜日。

本日は八神家の鍋パーティーへと、ご招待されますた。  
で、現在リビング。

「お前達！鍋は食いたいか!？」

「おーーーーー!!！」

「おー……」

「よし、いい返事だ!!イガグリ、肉は持ったか!？」

「うっすー!!！」

「雪音、今日も可愛いぞ!!！」

「……おにちゃんも、かつこいい……ぞ」

「ヒヤッハーーーーー!!！気分は最高潮だ!!イガグリ、今の時間!？」

「2時っすー!!！」

「2時だな！迎えの人との待ち合わせの時間は!？」

「1時半っすー!!！」

「完全に遅刻だ」

「どうすんだよ兄貴!?!」

「お前が素振りしてたから遅れた」

「兄貴だって姉ちゃんとイチャイチャしてたら!?!」

「雪音分を補充してただけだ。なー?」

「…なー」

「もう!早く行こうぜ兄貴!?!」

「うむ、これ以上待たせるのも悪いか。では、出陣だ!?!」

俺たちは迎えの人との待ち合わせ場所である、図書館へと向かった。

「やて、この辺のはずなんだが…」



図書館に着いた俺たちは、目的の人物を探している。  
はやてから聞いた話では、迎えに来る人はピンクの髪をしたポイン  
さんらしい。

きつとニート侍のことだろう。

「なあ兄貴、あの人じゃない？」

隣にいたイガグリが指差す先には、ベンチに座り目を閉じたピンク  
ポインがいた。

一見、落ち着いた雰囲気です座っている。

だが、俺にはわかる。

あいつは切れている。

だってオーラがパネエっすもん。

「イガグリ、確認して来い」

「え、俺が？やだよ」

「いいから行け。何か言われたら」とりあえず、そつつすねww  
「つて応えとけ」

「だから俺はや」素直な男子はモテるらしいぞ？」オーケー。俺に  
任せな！」

ふむ、俺らは傍観させてもらおう。

逝って来い、イガグリ。

「あの、すみません」

「む？貴様が西野音耶か？」

「とりあえず、そうっすねww」

「遅れてきた者の態度とは思えんな。貴様、今何時か分かっているのか？」

「とりあえず、そうっすねww」

「……からかっているのか？」

「とりあえず、そうっすねww」

「主はやてから聞いていたが、本当に度胸のある奴だな」

「とりあえず、そうっすねww」

「どうやら私の剣の錆になりたいようだな？」

「とりあえず、そうっすねww」

「ほう、ならばその望み叶えてやるっ」

「とりあえこつて?!なんで木刀もってんすか!?あ、やmがああ  
あああああ……!」

「で、本物の西野音耶だ」

ボコボコにされるイガグリがあまりにも不憫なので、仕方なく姿を現してやった。

ピンクボインは心なしか肌がツヤツヤになっている。

「ああ、分かっている。先程まで物陰で見っていたろ？」

む、さすがニート侍。

まさか俺に気づいていたとは。

「しかしコイツは一体誰なんだ？」

「イガグリ紫音。俺の愚弟だ」

「本当に変な奴だな。普通、家族が殴られたら怒るものではないか？」

「コイツは痛いのが好きなんだ」

「そ、そうか」

ピンクボインが、紫音に可哀想な眼差しを向ける。  
ドンマイ紫音！君の評価はガタ落ちさ！！

「では自己紹介しよう。私はシグナムだ」

「西野音耶とは俺の事だ」

「……雪音……」

ふむ、やはり雪音は恥ずかしがり屋さんだな。  
だが、そこがいい！！

「では八神家へと案内しよう。着いて来い」

「うい。おら、さっさと起きろやイガグリ」ドゴッ！！

「あう！？はッ！？ここは一体？」

イガグリも起きたようだし、さっさと行くか。  
俺たちは、ピンクボイン改めシグナムの後を追った。

「主はやて、ただいま戻りました」

「主はやて、ただいま戻った」

「主…はやて。ただいま…戻りました…」

「主はやて！！ただいま戻ったす！！」

「おかえりシグナム。いらっしやい音耶君、雪音ちゃん。で、あんたは誰やイガグリ」

「イガグリじゃないツ！坊主だ！！」

「似たようなもんやろ。で、あんたは誰や？」

「西野紫音！！兄貴の弟だ！！」

「ぶはっ！ちよっ、坊主なのに紫音とかっww」

「笑ったな！俺だつて恥ずかしいんだよ！！」

「まあ怒んといてな。歓迎するで紫お、つぶはッ！！ww」

「いつまでも笑ってんなや、狸」

「ああ、久々にこない笑ったわ。みんな改めていらっしやい」

こうして八神家に着いた俺たちは、狸に歓迎されてリビングに通さ

れた。

リビングに入ると、そこには…

「あつ、シグナムおかえり。随分遅かったな」

幼女がいた。

「くっ！実際目になると、なんて破壊力だ!？」

「変なことしたら怒るで？ヴィータ、紹介するわ。こちらが西野音耶君。そんで妹の雪音ちゃんに、弟の紫音くんや…ククっ…」

「ああ、はやての言ってた奴？あたしはヴィータ、よろしく」

「…よろ」

「よろしく!!」

「……………」

「????どないしたんや、音耶君？」

俺の目の前には幼女がいる。

気の強そうな目に、背伸びしたかのようなしゃべり方。  
ツンデレ幼女か!?

ああ、八神家のモビルスーツは化け物か!?

これは……愛・で・な・く・て・わ!!

「ぬあゝ、なんだお前かわゆいなあゝ」

「あつ、頭を撫でるな!!」

「お菓子食つか?アイスもあるぞ?」

「アイス!?食う!!」

「そかそか。ほら、ハーゲンオーツだ」

「おお、これギガつまだよな!なんだお前、いい奴だな!!」

「ありがとよ、俺のことは音耶って呼んでくれ。または兄ちゃん、にいにいでも可」

「そつか、よろしくな音耶!」

「ああ、よろしくヴィータ」

いつかヴィータの兄になりたい、今日この頃。

「こつちがシャマルで犬の方がザフィーラや」

「よろしくね、音耶君」

「……………」

「ああ、よろしく。しかしあれだな。デカ犬、お前無愛想だな」

「…ッ!?!?」

「デカ犬やのうて、ザフィーラや」

「……………わんわん」

「こんなデカイ犬はあまり見ない。お前アレだろ？もののけ姫に出てたよな？」

「……………」フルフル

俺の問いに犬は首を振った。

ちよっ、人の言葉理解してるとか。

そういえばこの犬、元は人間だっけ？

確か…た…た…縦の主語銃だっけ？忘れちゃったよ。

「そういえばこの後、なのはちゃん達も来るで?」

「ま・た・ま・お・う・か」

「それまでは寛いでてやあ」

なんだ魔王も来るのか。



となると、他のメンバーも来るな。

ちっ、雪音に悪影響を及ぼさなければいいんだが…。

「なあ音耶君」

「なんだ？」

「雪音ちゃん…抱いてもええか？」

「だが断る」

「このっ！音耶、はやてが邪魔するー！！」

「おk。ギターにハンマー取らせろやあー！！」

「ちよっ、ゴリラ邪魔やー！！」

「コロコロ転がってるてめえの方が邪魔なんだよー！！」

俺たちは八神家にあつた大乱闘なゲームをしている。  
俺はゴリラを。

ヴィータは大食い丸男を。

はやてはオレンジ機械女を使っている。

しかし機械女、コロコロしまくっててウゼエ。

ちなみに雪音はデカ犬と戯れている。

イガグリはシグナムに剣の稽古をつけて貰うんだって。

魔法の事は言わないって約束で了承した。

リミッターも掛けて来たし、まあ、ばれないだろう。

シヤマル？

ああ、いたなそんな奴。

「よっしゃあ！ハンマー取ったぜ！！」

「よし、はやてを潰せ」

「任せろ！！轟天爆碎！！」

「ちよつ、ヴィータはそんな事せえへんよな！？ええ子やもんな！  
？」

「ギガント…シユラーク！！！！」

「あああああああ……」

ヴィータの一撃は文字通り粉碎…いや、飛ばした。

はやてはコントローラーを持ったまま、チーンってなってる。

「「いええい！！」「パシン！」

「2人がかりなんて卑怯や…」

ヴィータとハイタッチを交わす。

何だろう。凄くヴィータとの距離が縮まった気がする。

ヴィータに兄ちゃんって言われる日も近いか？

うへへ…。

続く!!!

第10話 鍋パーティー！。マジ・か（前書き）

今回は長めです。

では、本編へGOー！！

## 第10話 鍋パーティー！。マ・ジ・か

「へえ、包丁の扱いうまいなあ」

「家でやってるからな」

6時。

八神家の食卓に参戦することになった西野家。

長男という重い役職に就いている俺は、鍋パーティーの準備を手伝っていた。

因みに、次男は汗を掻いたため風呂を借りている。

西野家のマリア様こと雪音は、遊び疲れたのか、デカ犬に寄りかかって夢の中へ行っている。

しかし可愛いお、雪音。

眠ってる姿はまるで天使のようだ。いや、むしろ天使が霞むくらい美しい。

もうダ・ヴィンチに描いてもらいたいくらい。

「西野、少し尋ねたいことがあるのだが」

「あん？なんだよ」

「紫音に剣術を教えたのはお前か？」

「いや、あいつの我流だ。俺は剣術なんてできねえし」

「そうか？すっかりとした太刀筋をしていたから、てっきりお前が教えたのだと…」

「だから剣術はできねえって」

マジでイガグリののは我流だしな。

太刀筋がしっかりしているのは、きっと修行の賜物だろう。

つつかシグナムが、さっきから何か探ろうとしているのは気のせい  
か？

「シグナム、紫音君凄かったん？」

「はい、まだまだ青いですが、将来はいい使い手になるかと」

「へー、意外やなあ。そういえば、紫音君って何で剣術やっとなるん  
？」

「最近は何騒だからな。自衛手段としてやってんだろ」

「自衛手段か……。すまん、つまらぬ事を聞いたな」

「気にすんな」

俺に質問を終えたシグナムは、リビングのソファーへと戻っていつた。

シグナムがあんな事聞いてくるなんて、イガグリがなんかやらかしたか？

つつかシグナム、てめえ暇なら手伝えや。

所詮は二ト侍だった。

「あつ、白菜買い忘れとったわ……」

「なんだと」

「「「お邪魔します」「」」

「邪魔すんなら帰れ」

「いらっしやい、みんな」

7時。

ちょうど鍋の準備が終わった頃、魔界生物御一行がきた。メンバーは魔王に魔犬に魔虫。バーニングと類友は用事で来れないらしい。

「はやてちゃん、これお母さんが持っていきなさいって」

「ケーキやないか。ありがとうなのはちゃん」

「はやて嬢、お土産じゃ」

「のり……。お歳暮の残りやな」

どうやら魔王と魔虫は土産を持ってきたようだ。  
ケーキを持ってきたこと褒めてつかわす。  
雪音が喜ぶだろう。

「で？お前は？」

「え？私？」

「おいおい、まさか貢物持ってきてねえのか？」

「あ、うん。持ってきたほうが良かった？」

「当たり前だろ。人の家にお邪魔するのに土産がねえとか。常識考  
えろや。それとも、飼い主が持ってきてるからいいってか？はっ、  
育ちの悪さが手に取るようにわかるな」

「気にせんでええで、フェイトちゃん」

「……育ちが悪い……」

「どうすんねん！フェイトちゃん落ちこんどるやないか！？」

「しかし俺も鬼ではない。犬、お前にチャンスをやるう。お前が見  
事こなせば、さっきの言葉は撤回してやるう」

「ど、どうすればいいの？」

「5分以内に白菜と焼きそばパン買ってこいや」



「白菜と焼きそばパンだね？うん、すぐに行ってくるよ！！」

「バタンッ！！」

「アンタ最低やな」

「鬼なの」

「フエイト嬢がパシリになってるんじゃ」

俺は悪くない。あくまで教育だ。

八神家の人たちと挨拶を交わした魔界生物コンビは、見かけぬ二人に首をかしげた。

ちなみに雪音は眠りから目覚めて、2人を凝視している。

イガグリは絶賛スクワット中だ。

「ああ、この子達は音耶君の弟君と妹さんや」

「音耶君、弟もいたんだ。はじめまして、わたしは高町なのは」

「ワシは音耶の親友の海堂く、虫だ」虫じゃないけん!？」

「俺は、弟の、フンツ、西野、紫音、つす!?!」

「…雪音…妹…」

恥ずかしがる雪音、かわいいお。

イガグリはスクワットやめろや。

「よろしくね雪音ちゃん、紫音君」

「親友の家族や、可愛がつてやるんじゃ!」

「うつす!虫の、兄貴と、魔王の、姉さん!?!」

「…うん…虫のおじちゃんと…魔王さん…」

「虫のおじちゃん!?!」

「魔王!?!」

ふむ、さすが我が家族。

いい感じに教育されてる。

「音耶君……。2人とも、魔王じゃないよ?なのはさんだよ」

「…な…のはさん…?」

「はう!?!」

魔王は雪音の上目遣いの餌食になった。  
さすが雪音、魔王をも浄化させるとは。

「雪音ちゃんかわいいなあ……。紫音君もなのはさんって呼んでね？」

「うっすー！、なのは、のッ！、姉さんー！！」

「……にはははっ、まあいいか」

「今度はワシのことじゃ。呼び方はなんでもええよ」

「……虫のおじちゃん」

「虫の、兄貴ー！！」

「やっぱりそれ！？」

虫だしな。

「お前らさつきから何言ってるんだ？」

「あ、ヴィータちゃん」

エターナル幼女ヴィータが話に加わった。

音耶の精神力が80上がった。

スキル発動『撫で回す』

「だから撫でんじゃねーよ！！」

「ツンデレかわゆす」「ナデナデ」

「ロリコンじゃな」

「ロリコンなの」

「ロリコンやな」

「失敬な、あくまで父性本能だ」

「あたしはロリじゃねえ!!」

「くくくくいや、ロリだろ(なの・やる・じゃろ)」「」「」

「ヴィータがロリじゃなかったら何になる？」

「あ、幼女か。」

「で、お前ら魔王とか虫とか何言ってるんだよ？」

「そつなの！聞いてヴィータちゃん！！音耶君ってば、いつもわたしのこと魔王って言うんだよ!？」

「ワシは虫って言われるんじや」

「海斗はどうでもいいけどよ……音耶、なのはは魔王じゃねえぞ?」

「ヴィータちゃん……」

「ワシはどうでもええんか……」

「どっちかと言うと悪魔だ」

「ヴィータちゃん!？」

まさかの悪魔でくるか。

さすがヴィータ。良くわかってる。

「把握。すまん今まで勘違いしてた、デビルなのは」

「!？音耶君のばかッ!！」

「音耶君、デビルなのはさすがに可哀想やで」

「結構いいと思うんだが…。しかしあれだな、魔犬も飼ってるし魔王の方がしっくりくるか…」

「どっちもやめてよ!！」

「ったく、協調性のない奴だな。わかった、好きなほうを選ばしてやるよ」

「あれ？わたし悪くないよね？」

「5…4…3…」

「ちょ、ちょっと待って！ええっと、w「ただいま!！はあはあ…」  
ふえ、フェイトちゃん…」

「0…。決まらなかったようだから魔王な」

「うっうっ…」

「なのは？どうしたの!？」

「お前のせいだ、犬。で？白菜は買ってきたか？」

「え、私のせい？うん、白菜は買ってきたよ」

「よくやった。褒めてつかわすぞ」

「ありがとう。あと、はい。焼きそばパン」

「は？」

「え？」

焼きそばパン？何買ってきてんの、こいつ。

白菜買って来いって言ったよな、俺？

「さて、グループ分けを決めるか」

フェイトも帰ってきたので、俺たちは鍋パーティーを開始すること

になった。

大きいテーブルを引っ張り出し、ソファの前に設置する。  
つまりテーブルは2つ。

だから2つのグループに分かれなければならない。

「俺と雪音とヴィータが一緒なのは決定事項だから…あと2人か」

ここにいるのはデカ犬を除いて10人。  
つまり5・5に分かれる。

「適当でええんちゃう？みんな仲ええし」

「バカ野郎、適当でいい訳ねえだろ。雪音に悪影響及ぼす奴が一緒だと困るんだよ。そんな事も分からないのか。だからお前は狸なんだ」

「よう分かったわ。とりあえず一発殴らせろ」

「だが断る」

「早く決めて飯食おーぜ」

「だな。じゃあヴィータが決めていいぞ」

「あたしははやてがいい」

「よし狸、お前はこっちだ」

「まあええけど」

狸が仲間に加わった。

あと1人か。

と、俺が誰にするか考えていると、魔王が期待を籠めた瞳で見つめてくる。

簡単に言つとあれだ。

捨てられてる子犬の目だ。

「だが俺はスルーのできる人間」

「兄貴、俺シグナムの姉さんとがいい!!」

「よし、イガグリはシグナムと一緒にな。と、なると残るは…」

「ワシはどつちでもええんじゃ」

とりあえず虫は却下。

なんか危ねえ。

「私もどつちでもいいですよ」

「ん?……誰だお前?」

「シャマルです!!」

「ああ、マル子ね。つうかお前いたんだ」

「ずっといたわよ!??ってマル子!??」

うるせえ奴だな。影薄いくせに。

とりあえずお前も却下。



存在の薄さが感染しても困る。

「わ、わたしもどっちでもいいかな？（チラッ）」

「じゃあ、あつちな」

「ふえ！？」

なに残念がつてんの？どっちでもいいって言ったじゃん。つつか、こつちには来させない。

お前は色んな意味で危ないからな。となると、残りは…

「フェイト、こつちに来い」

「私？うん、わかった」

「な、なんでフェイトちゃんはそつちでいいの！？」

「なんでって…一番無害そつだし、ピユアだから」

「確かにフェイトちゃんは純粹やもんな」

「へ？あ、ありがと／＼／」

「な？ピユアだろ？」

「た、確かにそつかもだけど…。じゃあわたしは？」

「言っているの？」

「…あつちで食べるの」

なんだ、言っても良かったのに。  
てな訳で完成！

心がキレイなチーム+狸と、なんか危ない奴チーム。  
こうして鍋は始まった。

く心がキレイなチーム+狸く

「てな訳で鍋を始める。肉の貯蔵は十分か？」

「ええで、というかもう出来とるわ」

「ならいただきますだ。皆さん手を合わせましょう」

「ん？なんやそれ？」

「は？何って…小学校の時やったろ？」

「やったことないわ」

「私も初めて聞いた」

「マ・ジ・か。つたく、最近の小学校は…」

「なんや知らんけど、いただきます」

「」「」いただきます」「」

「わんわんおねえちゃん…あれ食べたい…」

「うん。……はい雪音」

「…ありがとう」

うむ、懐かれてるなフェイト。

雪音は何故かフェイトに懐いている。

ちなみに呼び方は、わんわんおねえちゃん。

実に良く分かっている。

どうでもいいが、イガグリにはフェイトの姉さんって呼ばれてる。本当にどうでもいいけど。

「雪音、こっち向いて」

「……………」

「口元にご飯がついてるよ」

「…うみゆ……………」

「あう、雪音は可愛いなあ」

…………… 本当に、良く懐いてるなあ……………。

「ちよつ、音耶君！！血い、手から血い出とるから！！」

「ああ…………… 本当だ……………。こりゃいけねえ、ははは」

「笑つとるけど、顔がおつかないで……………」

「なにを言う。俺はいつだって優男だ。なあ、ヴィータ？」

「おつかねえよ！！こつち向くな！！」

皆してなんだよ……………。

グス……………お兄ちゃん寂しい。

くなんか危ない奴チームく

「……はあ……」

「なのはちゃん？」

「シヤマルさん……」

「さっきからため息ばかりついて、どうかした？」

「たいしたことじゃないんですけど……音耶君ってホントわたしには意地悪だな〜って、思ってたりました」

「ああ、音耶君……。あの子って意外と皆にひどいわよね……」

「マシなほうですよ。わたしなんて……毎日魔王……魔王……魔王魔王魔王魔王m」なのはちゃん落ち着いて！」「にゃっ！？わたしは一体……」

「何やってるんじゃない？」

「海斗君。音耶君について話してたのよ」

「うむ、音耶か。ホンマなのは嬢は音耶が好きじゃなあ」

「ふえ！？／＼／」

「あら！なのはちゃん、音耶君のこと好きだったの？」

「ち、違うの！好きというより、気になるだけなの！／＼／」

「それを世間では好きと言っくんじゃ」

「ほう、高町は西野のことが好きなのか？」

「シ、シグナムさんツ!?だ、だから……」

「そうじゃよ、シグナムの姉御。なのは嬢は音耶にホの字じゃ」

「だから……」

「えーーーーー!?なのは姉さん、兄貴のことsぎゃあああああ  
あああ!」パキンツ!!!!!!

「……なのは嬢、卵は投げるもんやないんじゃ」

「みんなが、わたしのことからかうからいけないのっ!」

「なのはちゃん……」

「高町……」

「そんな目でわたしを見ないでえ」

「ふう、食った食った」

「美味しかったね、雪音」

「……うん」

「はやて、アイス食べていい？」

「ええで〜」

食事が終わり、みんなで寛いでいる。

なのはとマル子は後片づけだ。

しかしイガグリよ。

お前は何故卵を装備している？ 防御力なんて上がらんぞ？

「ねえ音耶」

「なんだ？」

「雪音って可愛いね。私、あんな妹欲しかったんだ」

「やらんぞ、雪音は俺の天使だ」

「ふふっ、わかってるよ。でも妹っていいよね。私、お兄ちゃんな

らいるんだけど……」

ああ、そういえばコイツも妹だったけ？  
ん？妹？

「フェイト、ちょっとこっち来て」

「どうしたの？」

「ふむ」なでなで

「お、音耶！？／／／」

「おお、案外悪くない……」なでなで

「きゅう／／／／／」

「……何やっとなるん？」

「いや、フェイトも妹だったな、と思って」

「あんたシスコンやったな……」

「それは認める。妹LOVE」

妹はいいよ。癒される。

しかしあれだな。

結構フェイトも癒されるな。

純粹で素直で金髪の妹……アリだな。



「フェイト」

「な、なに？／＼／」

「俺の妹になれ」

「妹！？」

「ぶっ！！あんた何言つとるん！？」

「フェイトが妹つてもアリだと思っ」

「あんた妹居るやないか！？」

「妹は何人いても困らない。あつ、勿論一番は雪音だが」

「妹萌えのロリコン……いつか捕まるで？」

「やましい気持ちなどない。あるのは父性本能だ。てことで、今日からお前はフェイト・T・西野だ」

「ど、どうすればいいの！？助けてなのは……！」

「うち、飼い主を呼んだか。」

「だが、あたふたするフェイト……アリだな。」

「どっしたのフェイトちゃん？」

「お、音耶が妹つて……」

「???はやてちゃんどういふこと?」

「実はな、音耶君はロリコンで妹萌えだったっちゆうことや」

「ロリコンじゃねえ。妹好きは認める」

「で、妹属性を持つてるフェイトちゃんを、毒牙にかけようとしてたんや」

失敬な。

やましい気持ちなど一切ない。

ただ、お兄ちゃんって呼ばれたいだけなんだ。

「妹萌え……音耶君、わたしも妹だよ?」

「魔王が妹とかww一寸先は魔界ww」

「なんでわたしだけ……」

「む、もうこんな時間か」

時計を見ると、10時になっていた。  
随分話し込んでしまったようだ。  
そろそろ帰るか。

「じゃあ、そろそろ帰るわ。雪音、帰る……ぞ……」

「……んじゃ……」

雪音は既に夢の中のような。  
つづかフェイト。  
誰に断って雪音を膝枕している。

「ごめんね。撫でてたら寝ちゃった」

「いや、背負って帰るから別にいい。イガグリ、帰る……ぞ……お前  
もか」

「がー……うへへ……」

イガグリも夢へと旅立ったようだ。  
つづかニヤけんなや、きめえ。

「うち、雪音は背負って、イガグリは蹴って帰るか」

「そんな石やないんやから」

「頭が石っぽいだろ？」

「確かに…。そや、今日は泊まっただけじゃええやん」

「は？泊まる？八神家に？」

「まあいいか。」

「俺の辞書に遠慮の文字はないしな。」

「なら好意に甘える。今日は世話になるぞ」

「わかったわ。みんなもどうや？」

「私も泊まらせてもらおうかな？」

「ええで。なのはちゃんは？」

「わたしもお泊りするの！」

「やっぱり帰るわ」

「急に何言っとなねん」

「いや、魔王がいるし寝込みを襲われたらたまらん」

「そ、そんなことしないもんツ！！／＼／＼」

「勘違いしてるようだが、食われるって意味だぞ？それに服がない」

「あゝ偶然やなゝ、なぜか家に男物の服があったわゝ」

「謀ったな孔明」

「てな訳で泊まりは決定やな」

マ・ジ・か。

続く！！！！

第10話 鍋パーティー！。マジ・か（後書き）

てな訳で次回に続きます。

次回はお泊り編！！

音耶は無事に家に帰ることができるか！？

第11話 予定変更！お泊り会。なんか…マジですまん（前書き）

八神家編も今回で終了です。

ちょっと長めかも。

そして今回は、残念な頭をしている患者さんが登場！！

では、本編へどうぞ！！

第11話 予定変更！お泊り会。なんか…マジですまん

八神家に泊まることになった西野家&魔王御一行。

泊まると決まれば、当然することもある。

それは入浴。

己の身体を清めるといふ聖なる儀式。

しかし、事件は起こった！！

あれは…私が中学二年生の時、友達の家へ泊まりに行ったときのことです。

トウルルル〜ル〜

〜ついでさつき〜

「じゃあ皆、先に入浴してええで」

「そつ？じゃあ雪音、一緒に入るっか」

「……………うみゅ……………」

「にやははっ、凄く眠たそうだね」

「雪音かわゆす」

「行こっか雪音」

「……………う……………」







「シャワー…水だった…」

「水？故障かな…。あの狸…雪音を驚かせやがって」

「それで…わんわんおねえちゃんと…雪音…びっくり…」

「だから悲鳴をあげてたのか。……ん？わんわんおねえちゃん？」

「……そう…」

「………おお…」

「~~~~~!!!!!!////」

おおおおお、お、音耶に見られた!!??//  
ぶつぶつぶ、ぶつぶつぶじやう!!??//

「………ひゃ…きゃ…」

「きゃ?…ああ、そのパティーンね」

「きゃ、きゃ…」

「散る前にーっ言っとおく」

「きゃ…」

「妹は貧乳じゃないとイカンッ!?!?!」

「きゃあああああああああああああああああ!?!?!?!」

／／「バシンッ！……！！」

）end）

で、風呂が壊れてたらしく、俺たちは現在銭湯へと来ていた。

「季節は春終盤。しかし今の俺は秋」

「せやな。顔に大きな紅葉がついとるわ」

「痛そうじゃのお」

そう、俺の顔には大きな紅葉がついている。

しかも数十分前にできた、できたてホヤホヤな紅葉だ。

「……………／／／」

「フェイトちゃん、犬に噛まれたと思えばええんや」

「俺は犬の裸を見たと思えばいいんだな？」

「気にしないほうがいいよ、フェイトちゃん」

フェイトはさつきから真っ赤になっている。

魔王の言つとおり、気にしないほうがいいぞ。

俺も気にしてないし。

「フェイトちゃん、漫画でこういうシーンは良くあってな。殴られた主人公は、大体記憶が飛んどるんや。だから、きつと音耶君も忘れてるで。なあ〜音耶君？」

なるほど、そういう事か。

つまり記憶がないと嘘をつけてことだな。

そしたらフェイトも元気になるし、今回ののはなかった事にできる。まさに一石二鳥だ。

「だが俺は素直な日本人。細部までじっくり覚えてます、ごつつあんです!!」

「あんて「いやあああああああ!!!」／／／」バシッ  
!!!!!!

紅葉が1つ増えます。

「音耶、ホンマ度胸あるなあ」

「やめろよ、照れるじゃねえか」

「兄貴、ねみい〜〜〜」

「黙れイガグリ、そしてさっさと服脱げや」

現在、脱衣所。

男メンバーは入浴のために、自らの装備を脱ぎまくっていた。

「なあなあ、どっちがデカイか勝負せえへん？」

「はっ！海鳴市のスカイツリーと言われた、この俺に勝てるだけでも？」

「おお。ワシの如意棒が火を噴くで」

「なに？兄貴達勝負すんの？俺も勝負してえ！！」

「ばかやろー、ガキにはまだ早い」

「さあ、勝負じゃ！！」

ふふふ、残念だったな海斗。

俺の息子は強いぜ？

「俺のターン！！俺はパンツを生贄にし、息子・ジヨニーを召喚！！」

「ワシもピンクパンツを生贄に、息子・清二を召喚じゃ!!」

今、俺たちのスピリット・サンが放たれる!!

「なっ!? 攻撃力5300じゃと!?!」

「俺の息子はアタッカーだからな。そういうお前こそ、防御力4900か…やるじゃねえか」

「ち、やるしかないんか…」

「ああ、いざ尋常に…」

「決闘!!!!!!」

結果は引き分けです。

いいライバルを見つけたぜ。

「つむ、見事に普通の銭湯だな」

「時間も遅いから、ワシら以外誰もおらへん……いや、おったわ」

海斗の視線の先には、配置されている小さな台に座りながら、目の前の鏡を見て、・・・ってしている金髪がいた。

「音耶……ワシ眼科行ったほうがええんかな？」

「現実逃避すんな。アレは間違いなく厨二だ」

「兄貴、あの人なんで鏡に向かって、・・・ってやってるの？」

「きつとキメ顔の練習をしてたんだ。可哀想に……そこまで病気が進んでいたか……」

「なあ音耶」

「なんだ？」

「ここは風呂や。そんで風呂には知り合いがおった……もう、わかるじゃろ？」

「把握。お、先手は俺に任せろ」

「ジョニー、もう一度出番だ。」



厨二は俺が近づいてることに気づかず、まだ（・・・）をしている。  
なんというか、アホだ。

「おい厨二」

「ッ！？何故貴様がここにいる!？」

声をかけるとビクッ、ってなって振り向いた。  
例えると?（・・・ノ）ノ!!!ってな感じだ。

「それはこっちの台詞だ。それとキメ顔の練習なんてしてんじゃねえよ」

「家の風呂が故障したから来たんだ。それと、キメ顔なんてしてないッ!!」

「偶然だな、俺たちもだ（・・・）」

「真似をするな!!!本当に貴様はムカつく奴だな!!!」

「ほう、俺がムカつくか?ならば勝負してやるっ」

「勝負?...クククッ...貴様ごときが僕に勝てるっても?」

厨二はイタイ笑みを浮かべながら、顔を手で隠している。  
簡単に言つと厨二病のポーズだ。

「さっさと勝負しろよ」

「ああ、いいだろ。ハンデだ。先手は貴様にやろう」

「後悔すんなよ……。俺は腰に巻いたタオルを生贄に！！ゆけ！ジヨニー召喚！！」

「なっ！？貴様、何を見せる！？」

「何って…。風呂で勝負ついたらこれだろ。漢王デュエル息子モンスターズ」

「知らん！！ば、僕はそんな変態じみたことはやらんぞッ！！」

「言っと思ったよ。トラップカード、オープン。『虫のタオル下ろし』」

「任せんしゃいー！！」

隠れていた虫が飛び出し、厨二のタオルを下ろす。  
因みに事前に決めていた作戦だ。  
厨二は分かりやすく助かる。

「クレスの息子、強制召喚じゃああああああ！！！！」

「や、やめるおおおおおおおお！！！！」

虫の手によって厨二の息子は強制召喚される。

さあ厨二よー！！

いぞ尋常！！！！

「デュエル……………海斗……………」

「……………わかつとる……………」

「うわっ、俺のよりちつちええ!!」

「言っつなイガグリ。俺も予想外だった」

「…あ……………ああ……………」

「攻撃力1、防御力2ってところか。すまんクレス、軽率じゃった」

「しかも皮のホルスターまで装備してやがる……………いい病院を紹介してやるうか？」

まさかワイトよりも弱いとは。  
なんかすまん。

「……………ああああ……………」

「許せ厨二。これも勝負だ」

「せやな。勝者…音耶の息子・ジヨニー……………」

「き、貴様らあああああああッ……………!!……………」

俺たちが慰めてやると、いきなり厨二が切れだした。

厨二は右の拳を振り上げ、俺に迫ってくる。

「やっば、そういうパティーンね。イガグリ!」

「うつす！！せやああああああああああああああ！！！！」

イガグリは俺たちの間に移動し、厨二の右手を掴んで放り投げた。良くやったイガグリ。

伊達に修行バカじゃない。

「うわあああああああああああ！？」

バッチー————ンツ！！

「うわ、痛そうじゃ……」

円を描いて飛んだ厨二は、背中からモロに湯船に着水した。しばらくすると、スウーッと厨二が湯船に浮かんでくる。

「…身体洗うか……」

「せやな」

俺たちはプカプカ浮かんでる厨二に合掌し、身体の洗浄を始めた。

「すまん、遅くなった」

「ホンマ遅いわ。何やってたん？」

「聞くな。ただ…1人が天に帰っただけだ…」

「よう分からんけど。大変だったな」

「ああ…」

俺は、今だプカプカしているであろう厨二に敬礼して、八神家へと歩を進めた。

「とりあえず部屋割りは、男組と女組でええな？」

八神家へと帰還した俺たちは、早速寝るための部屋割りを決めていた。

まあ、男と女は普通別だよな。

しかし俺は意義を申し立てる。

「意義あり!!」

「却下。どうせ、雪音ちゃんとヴィータと寝たいって言っんやろ?」

「分かってるじゃねえか。とりあえず虫とイガグリ、雪音とヴィータをトレードだ」

「絶対嫌や。あんたに渡すと何されるかわからん」

なんだと?

それじゃあ俺がまるでロリコンじゃないか。

「ロリコンやろ」

「とうとう心の中まで読むか、狸よ。俺は久々に雪音と寝たいんだ。雪音、お兄ちゃんと寝るか?」

「…っん」

「よし!ヴィータも俺と寝ような?」

「ん〜…はやてと寝る…」

「ちっ、つけ込めなかったか」

寝ぼけてるから行けると思ってたんだが…。仕方ない。今日は雪音と2人で寝るか。

「という訳ではやて。もう一部屋プリーズ」

「まあ、雪音ちゃんがいいって言うならええけど……変なことしたらあかんで？」

「俺はロリコンじゃない。ただのシスコンだ」

俺を何だと思ってるんだ、コイツは。  
まあ、雪音と一緒に寝れるから許す。

「…おにいちゃん…」クイクイ

「ん？どうした？」

「…わんわんおねえちゃんも…いつしょ…」

「ッ！？」

「私も？」

フエイトも？

まあ、妹属性あつからいいけど。

「てな訳でフエイト、お前もこつちだ」

「む、無理無理無理！！お、音耶と寝るなんて…／＼／」

「何もしねーよ。つつか俺じゃなくて雪音と寝ればいいだろ」

「……おねえちゃん…」 涙目& amp…上目遣い

「うつ……わ、わかった。一緒に寝ようか……」

落ちたかフェイトよ。

まあ、雪音のあれは破壊力抜群だからな。

俺だったら失神ものだ。

「音耶君、フェイトちゃんに何かしたら……わかつとるな？」

「オーケー。だから包丁はしまえ」

「ならええんや。ほな、私達は先に行くわ。おやすみ〜」

「……おやすみ……」

ヴィータとはやては去っていった。

シグナム達？

あいつらはもう寝たよ。

「ワシも寝るんじゃ。ほなな〜」

「おやすみっすー!!」

今度はイガグリと虫が去っていった。

残るは俺たちか……。

「さて、俺たちも寝」 「音耶君……ま・た・お・ま・え・か」

くそっ、気づかないフリしてたのに。

魔王はモジモジしながら俺を見ている。



背のせいか、若干上目遣いだ。

「……その、わ、わたしも一緒に寝ても……いいかな？」

「だが断る。エデンが地獄と化すのはごめんだ」

「うつつ……また断られたのお」

おいおい、冗談は存在だけにしてくれよ。

「はあ……おやすみ、みんな……」

魔王は去っていった。

「ねえ、音耶」

「なんだ？」

「なのにもう少し優しくしてあげたら？」

「俺は優しくしているつもりだ」

「あ……そう」

何故ため息をつく。

「俺たちも寝るか」

「そうだね……って、部屋はどこ使えばいいんだろ？」

「あ」

俺たちは狸を叩き起こしに行きますた。

「……むにゃ……」

叩き起こした狸に部屋を案内させ、部屋に布団を引かせ、俺たちは  
やっと寝ることができた。

布団に入って数分。

雪音は既に寝てしまっている。

因みに俺、雪音、フェイトと川の子で寝ている。

「音耶、起きてる？」

「…おお」

ぼー、っとしているとフェイトが話かけてきた。  
雪音が寝ているので、若干声が小さい。

「音耶はさあ、雪音のことが本当に好きだよな」

「当たり前だろ。いつだって雪音LOVEだ」

「ははっ、……何か溺愛する理由があるの？」

何言ってるんだコイツは？

溺愛する理由？そんなの決まってるだろ。

「家族だからだよ」

「……え？」

「理由なんてないようなもんだ。家族だから、妹だから大切にする。溺愛する。愛情をたっぷり注ぎ込む。当然のことたる？」

「家族だから当然……。…そうだよね…」

そういえばコイツって訳アリだったな。

死んだ娘の変わりに作られたんだっけ？

……ああ、思い出した。

確かビリビリ母ちゃんに嫌いって言われたんだっけ。

で、母ちゃんは身投げ……と。

「あのさ、俺はお前の事よく知らんけどよお。お前が悩んでるって事くらいわかるぞ」

「…私ってわかりやすいかな？」

「ああ。すぐ顔に出る」

「ははっ、そっか……」

「ずばり親子喧嘩かなんかだろ？」

「……そうだね。そんなところかな……」

「ふむ。なら俺から言えるのは1つだ」

「なに？」

「子を、家族を愛していない親なんていない」

「!?!?……どうしてそんな事が言えるの？」

「簡単だ。子を愛すつもりがないなら、最初から子をつくるうとは思わない」

「……けど……子供をつくった後に、愛は消えたりするかもよ……?」

「それもあるかも知れないな。けど、それは本人にしか分からないだろ？」

「確かにそうかもだけど……じゃあ嫌いとか面と向かって言われたら??」

「言われたことがないから分らん。ただ、不器用なだけじゃないのか? 憎しみと愛は、コインの裏表のようなもんだし」

「そう……もし音耶がそんなこと言われても、音耶は相手を愛せる?」

「愛せる」

「……そっか。音耶は凄いな」

「別に凄くなんかない。つうか、今まで色んな事言ったけど、やっぱり一番大事なのは、自分が相手を愛すことだと思っ」

「…自分が相手を愛す…」

「たとえ相手が自分を嫌ってても愛す。憎しみをぶつけられようが愛す。罵倒されても愛す。相手の全てを愛す。相手のありのままを愛す。相手の心を受け止めてやる。愛って漢字は、心を受け止めるって書くだろ？」

「……1画足らなくない？」

「細かいことは気にすんな。つまり大事なのは自分が愛するってことだ」

「くすっ、うまく纏めたね」

「ホント一言多いな。俺はもう寝るかな」

「うん、おやすみ。……相手にどう思われようと、自分は愛せ…か。  
…うん、そっだよな」

「音耶…ありがとう」

こうして、八神家での夜は過ぎていった。

「あとフエイト」

「ん？どうしたの？」

「俺の妹にならないか？」

「まだ言ってるの！？」

うるさい奴だな。

雪音が起きちまうたる。

く午後11時50分・銭湯く

「ふく、今日は店じまいだな」

「しかし、なんでウチには客が少ない？24時までやってる銭湯なんて、あまり無いんだぞ？」

「やっぱ外見が古臭いせえなのか？」

ガラッ

「さてと、掃除でもすつか」

「フンフンフン あ？なんだありや？」

「浴槽になんか浮かん出んぞ？客の忘れ物か」

「なんかいい物だったらいいんって？人！？」

「お、おい！！アンタ、大丈夫か！？」

「…ん……ここは…？」

「アンタ、浴槽で気を失ってたみてえなんだ！」

「浴槽…ああ、銭湯に来てたんだったな…？はッ！？西野音耶！！  
あいつは何処にいる！？？」

「あん？アンタ以外客はいねえけど…」

「くっそ〜！！あいつ絶対に許さん！！！！！！」

ザバァ！！

「ん？貴様、何を見ている？」

「ちよつ W W W 皮のホルスター W W W W W」

「貴様もかああああああああああああああああああッ!!!」

今日も平和な海鳴市でした。



**第11話 予定変更！お泊り会。なんか…マジですまん（後書き）**

音耶君ミニイケメントタイム！！

主人公として初めて活躍してくれた！！

それと音耶君の中で、フェイトへの好感度がグングン上がっています。

次回はついに！！

西野家兄妹の戦闘スタイルが発覚します！！

そして、今まで登場しなかった親達も！！

今回は『西野ファミリー大集合』です！！

お楽しみに〜！！

第12話 西野ファミリー大集合。マジで家族が増えた(前書き)

今回でバトルまで持っていくつもりだったんですけど、重大な事を思い出し、次回に持ち越しにしました。  
本当にすみません。

重大な事についてなんですが……

音耶のバリアジャケットもとい騎士甲冑が決まってない……。

どうしよう……。

皆様、よかったら音耶のバリアジャケット、騎士甲冑について、アイデアをお願いします!!

本編を読んだら、音耶の戦闘スタイルが分かると思うので、ご参考にしてください。

どうか、ご協力おねがいします!!

## 第12話 西野ファミリー大集合。マジで家族が増えた

これは、6月のある日の出来事。

俺はいつも通り学校へ行き、魔王と虫をからかったり、妹候補のフエイトを愛でたり、類友と狩りに行ったりして一日を過ごした。  
狸とバーニング？  
いたな、そんな奴も。

で、放課後になり、俺はまっすぐ帰宅。  
実にいい子だ。

し・か・し！帰宅後…事件は起こった。

「ただいま」ガチャッ

「音耶ちゃん！おかえり〜！！」ダダダダッ！！

ドアを開けた瞬間、無駄乳をぶら下げた女が現れた！！  
俺は…

- 1・避ける
- 2・押し倒す
- 3・今こそ魔法の呪文だ！！

「秘技、ムーンウォーク！！」

「きゃん!!」ベシント!!

女はたおれた。

音耶は5の経験値を手に入れた。

レベルアップ!!

息子・ジヨニーが光合成をおぼえた。

「で？アンタは何をしている？」

「いったくッ！なによ、息子にハグしようとしただけじゃない!!」

「そんなものぶら下げて、俺に抱きつくな。圧迫死するだろ」

「そんなものってなによ。音耶ちゃんも昔はこれ飲んだのよ？」

「もうしゃべるな、無駄乳が」ツンツン

「あんっ!!」

とりあえず、靴べらで突いてみた。

おお、なんて弾力。

だがデカ乳は認めんぞ。

「……お前達は親子で何をやっている……」

俺がデカ乳をフェンシングのように突いていると、リビングから白髪オールバックのダンディーなおっさんが出てきた。

「カイさ〜ん、音耶ちゃんがいじめる〜」

「なにを言う。俺は無駄乳を駆除しようとしただけだ」

「いいからやめんか。親子そろってバカバカしい」

「ちっ、親父に感謝しろよ」

「音耶ちゃんのバ〜カっ！」

はいはい、言ってる無駄乳。

ん？紹介？

まあ、焦るなっで。

とりあえず、この無駄乳もとい母さん。名前は西野夏音。黒いロングで美人だとか言われている。俺は認めんぞ。管理局ではデバイスマイスターをしている。階級は三等空尉。一応、戦闘もできる。で、白髪オールバックが俺の親父。カイ・リルウィーゼ・西野。因みに西野家の婿さんだ。管理局ではそこそこ偉いらしく、階級は一等陸佐。タバコを常に持ち歩く、ヘビースモーカーだ。

まあ、そんなこんなで西野家両親、帰宅した模様です。

「んまいっ!! やっぱ音耶ちゃんの料理は美味しいわ〜!!」

「本当はアンタが作れないといけねえんだけどな」

「え〜!?! 私、料理できないし〜」

「母親失格。退場を願います」

家族揃つての夕飯。

本当に久しぶりなので、イガグリも雪音も嬉しそうだ。  
というか親達よ。

久しぶりに帰ってきたんだから、少しは家事手伝えや。

「お前達。学校の方はどうだ？」

飯を食べてると、親父がありきたりな質問をしてくる。  
他にはないのか？

まったく、つまらんおっさんだ。

「…ふっ…」

「俺は楽しいぜ!!」

「俺は雪音に会えなくて寂しい」

「ふむ、思ったとおりの返答だな」

「というか、音耶ちゃんのシスコンっぶりも相変わらずね」

「それは認める。雪音ほど可愛い者なんて存在しない」

「……………／／／」

「照れる雪音かわゆす」

「む……………音耶ちゃん、私は？」

「帰れババア」

俺の一言が効いたらしく、母さんは親父に泣きついていた。  
つうか親父。

飯ん時はタバコやめろや。

「そついえば音耶」

「んあ？」

母さんに抱きつかれながら親父が話しかけてくる。  
だからタバコやめろや。

俺は味噌汁を飲みながら耳を傾けた。

「先日、私の部隊に高町なのという、地球出身の魔導師が入隊したんだが」

「ビュホッ！！」

「あつちいいいいいい！！！？坊主だからモロ頭皮にいいいいいいいいいつ……………！！」

は？親父の部隊に魔王が！？

なんだそりゃ！？

つうか親父の部隊ってなんだっけ？

「ゲホツ…それは本当か？」

「ああ、私の部隊、時空管理局本局武装隊 航空戦技教導隊に確かに入隊したぞ。ちなみに私は部隊長だ」

「説明どうも…。で、まさかバレてないよな？」

「ああ、地球出身かは尋ねられたが、ミッド出身と言っておいた。一応、嘘は吐いていない」

助かった…。

親父がもし「私の息子も海鳴市に住んでいるんだ」なんて言ったら、バレるのも時間の問題だしな。

バレたら、きつと今以上に絡んでくるはずだ。

ああ、想像しただけで鳥肌が…。

「もしかして知り合いか？」

「知らん」

「兄貴の友達だよ。この前会ったし」

「イガグリー、てめえは黙ってる」

「兄貴、顔がこええ！！」



「友人だったのか。ならば言っても良かったか？」

「ダメだ。俺は魔導師なんて面倒なもんに関わりたくねえ」

「でも、魔法や戦闘の訓練してるじゃない」

「それは雪音を守るためにしてるんだ。力は持ってたほうがいいしな」

「そうだ、俺は雪音を守れる力が欲しいから、親父や母さんに魔法を教わってるんだ。」

「管理局なんて微塵も興味ねえ。」

「俺は平穩に暮らしたいだけなんだ。」

「ねえ、私は守ってくれるの？」

「……………気が向いたらな。つうか、あんた俺より強いだろ」

「や〜ん！カイさん、音耶ちゃんが私のこと守ってくれるってえ〜」

「!?!」

「話は聞いてたかババア？耳鼻科紹介すつぞ、このやるー」

「私うれしいわ〜！そんな音耶ちゃんにはプレゼント!?!」

ババアが懐から何かを取りだし、俺に手渡しする。  
とりあえず受け取ってみる。

「……………銃弾？」



イガグリうぜえ。

しかし杭が待機状態のデバイスか。

まあ、杭は俺の戦闘スタイルの象徴だしな。  
俺がデバイスを眺めていると……

『あなたがわたしのますたーなの？』

ロリヴォイスが聞こえた。

「ッ！？こ、これは…！？」

「音耶ちゃん、そういうの好きでしょ？だからAIの人格をロリロリにしてみました」

「母さん、今ほど感謝した日はない」

「あゝん、もっとほめて〜！」

Good Job母さん。

しかし、ロリロリか……うへへ……。

『ますたー？』

「おお。俺は西野音耶だ、よろしくな」

『ますたー…西野音耶…。うん！おっけーなの！』

「デバイスってええなあ〜（（）」

『ますたー、わたしのなまえを決めて？』

「名前？うん……田中」

『田中？うん、w「キャンセル」！』…キャンセルするの』

「ちょっと音耶ちゃん、真面目に考えて」

いや、いきなり名前を決めろって言われても。  
つつか田中よくね？

「音耶ちゃん。この子は今日から音耶ちゃんの相棒であり、西野家の一員となる子なんだから、ちゃんとした名前つけてあげて？」

「じゃあ、母さんはなんかいい名前があんのかよ？」

「う~~~~ん……………おつことぬし？」

「お前もつ帰れ」

「ふむ。音耶の戦闘スタイルから取ってみるのはどうだ？」

俺の戦闘スタイル？

拳でのクロスレンジだから……………ゴッドハンド？

「兄貴のパンチって既に鈍器だよな」

「だまれイガグリ。俺の拳は鉄じゃねえ」

「いや、鉄で殴られるより痛いかも……………鉄？……………鉄……………鉄……………あ！！」

「なんだよ？」

「鋼…なんてどうかな（、・・・）」

「最近流行ってんのかそれ？」

鋼か…。まあ、悪くは無いな。

けど、鋼だけじゃなんか物足りん。

「……家族だから……なまえ……きょーつーの……」

「共通の名前？…お！なる。さすが雪音。母さんとは大違いだ」

「可愛いのに…おっことぬし」

となると、やっぱり音をつけたほうがいいのか？

鋼の音…鍛冶屋って感じだな。

「音に関連するものでもいいんじゃないか？」

「音に関連するもの…騒音…音色…奇声…歌…んゝ、どれもいまいちだ」

「…おにいちゃん」

「ん？なにか閃いたか？」

「うん…シユタール…クラング…」

「！！？…雪音…お前は天才だ！！なんて良い名前なんだ！！」

「……がんばった」

「兄貴。シユターム何とかって、どついう意味なの？」

「知らん」

「知らないのかよ!？」

「『鋼の響き』という意味だ」

「鋼の響き…… かけえじゃん兄貴!!」

「さすが雪音。もう愛してるっ!!」

「…えへへ… / / /」

雪音サイコーーーーーッ!!!!!!

お兄ちゃん、なんでも買ってあげちゃう!!

「そういう訳で、お前の名前が決まったぞ」

『うん…じゃあ、わたしになまえをくださいなの!!』

「おう、お前の正式名称は『シユタールクラング』、愛称は『クラ  
ン』だ」

『はいなの!これからよろしくなの、ますたー!』

「ああ、よろしく」

西野家に新たな家族が加わった、今日この頃。

「しゅ、おっしとぬし可愛いの下~~~~~.....!」

第12話 西野ファミリー大集合。マジで家族が増えた(後書き)

音耶君の戦闘スタイルは、己の肉体を使うクロスレンジ!!

音耶君の必殺は……杭にクロスレンジ…この意味…わかりますね？

という訳で、よろしければバリアジャケット、騎士甲冑のアイデアをお願いします…!

できれば、明日中までに集まればいいんですが…。

皆様、どうか小生にアイデアをッ!!)・・・(ヾキリッ



第13話 はじめてのセットアップ。マジでゲグッたる(前書き)

すみません、更新遅くなりましたm(´|´)m  
デバイス設定にかなり時間が掛かったorz

今回、音耶君のバリアジャケット&武装が出ます。

バリアジャケットや武装について、様々なアイデアを出していただき、本当にありがとうございました!!

では、本編へどうぞ!!

### 第13話 はじめてのセットアップ。マジでゲグツたる

両親帰宅の翌日。

今日は平日。普段なら学校に行き、教師の声をBGMに惰眠を貪っている頃だ。

しかし本日は普段のようにはいかない。

何故だつて？

それは両親が帰ってきたからだ。

偶にしか帰ってこない両親が帰宅した日は、学校を休む。

西野家の暗黙の掟だ。

だからと言って、のほほんと過ごすわけではない。

西野家が揃ったというと、やる事は1つ。

魔法の訓練だ。

てな訳で西野ファミリー、無人世界へとやってきました。

いやあ、見渡す限りの荒野。

草の一本も生えちやいねえ。

人が住める要素ゼロだな。さすが無人世界。

「お前達、今日は一日中訓練だ。真剣に訓練に取り掛かれ」

「うつす!?!」

「うん」

「…うん」

「」「」「はいッ!?!」「」「」

親父の言葉に、それぞれ返事を返す。

親父も気合が入ってるのか（．．．）

こんな感じだ。

親父はきつとニコ中で早死にするだろ。

まあ、今はどうでもいいか。

それと、先程から気になつていたんだが…。

「あんたら誰？」

俺は先程の親父の言葉に、元気に挨拶をした三人を見る。

西野ファミリーにこんな奴らはいない。

「そういえば紹介していなかったな。この者達は私の護衛だ」

「護衛？」

「はい、私達は無人世界に行く西野一佐に」

「何かあつたときのため」

「護衛として派遣されたんだ」

「なるほど。とりあえず説明すんのは一人でいいだろうが。なに、

その無駄なコンビネーション」

「そういう訳で、私の護衛につく3人だ。なお、この者達にも訓練に参加してもらつことになる」

ふーん。別に構わないけどね。

「俺は西野音耶。敬語は使わなくていいから」

「西野紫音っす!!今日はお互い頑張ろっす!!」

「…雪音…」

「こいつらが私の子供だ。お前達も自己紹介を」

「はいッ!!私は局員Aです。敬語は癖なのであしからず」

「俺は局員B!西野一佐、直々の教導を受けられて光栄です!!」

「僕はティード・ランスター。今日はよろしく」

モブキャラ2人に、名前有りが1人か。

ちなみにAは女で、残りは男だ。

「ではこれから訓練に移る。雪音とAは西野三尉の所へ。音耶はデバイスの武装の確認。残りは私の下で訓練だ」

「…はいッ!!」「」

「つつすッ!!」

「雪音、がんばれよ」

「……うん…おにいちゃんも…がんばっ…」

雪音に励まされた俺は、魔王をも超える。

我がデバイス、クランよ。

1時間でお前を掌握してやろう!!

「で、クラン。俺は何をすればいい？」

『わたしに聞かれてもこまるの』

ちっ、ダメダメデバイスが。

まあ、可愛い声だから許す。

「とりあえず、セットアップするか」

『おーけーなの！ますたー、わたしの名前をよんで！』

「おう。田中、セットアップ」

『だれ！？』

「すまん、間違った。クラン、セットアップ」

『真面目にやってほしいの。せつとあつぷなの！』

次の瞬間、俺は光に包まれた。  
別に爆発はしねえよ？

『せつとあつぶ完了なの！』

「だな。……で？なんだこりゃ？」

『なにつて、せつとあつぶなの』

「ちげえよ。バリアジャケット？騎士甲冑？のことだ」

『それは、おかあさまが決めたの。ちなみにますたーは、ベルカ式だから騎士甲冑なの』

俺は自分の姿を確認する。

うん。盾の騎士リリースの格好です。

ベースはリリースだが、所々改良されている。

まず、胸のプレートアーマーが無く、黒のインナーになっている。

腕には、服の上から装着されている、肘から指の根元まである銀色の籠手。

外側だけを守るように、装着されている。

つまり内側は服と、籠手を固定するために半分に切った鉄の輪が二本。

左の籠手には、なんかスライドできそうな所がある。

そして脚部には銀色の脛当てがあり、表面が銀色のブーツを履いている。

腰にはリーズのようなヒラヒラマントではなく、アーチャーのような前の開いたヒラヒラマントをつけている。  
色は白で変わらないが。

どちらかと言うと、騎士甲冑ってよりも騎士服だな。

『騎士甲冑について説明するの。ますたーはクロスレンジによる格闘戦が主体だから、全体的に身軽な甲冑にしたの。腕は防御も出来て、素早い打撃に特化した籠手なの。脚部は蹴りやすく、走りやすい甲冑。胴はアクロバティックな動きが可能になるように、無駄な装備を取った軽装なの』

「まあ、たしかに動きやすいわな。でも軽装だったら喰らうダメージもでかいんじゃないか？」

『ますたーは、頑丈って聞いているの』

「把握」

まあ、俺が頑丈なのはとりあえず置いておこう。  
今はもつと大事なことがある。  
アレがないではないか。

「おい、俺のロマンがないぞ」

『ロマン？もしかしてパイルバンカーのことなの？』

「ああ、漢のロマンだ。で？なぜパイルバンカーがついてないんだ？」

『あの武装は別に用意してるの。今はこのフォームから説明をする』

から、後にして欲しいの』

「このフォルム？つまりモードチェンジもあるってことか？」

『当たり前なの！』

「よし、なら早速そっちも…」

『ちよつと待つ。まだ1つ残ってるの』

「あ？なんだよ」

『左の籠手。そこにはカートリッジシステムが搭載されてるの。装弾数は4。大事に使って欲しいの』

このスライドってカートリッジの排出口だったのか。フリスクを入れる所だと思ってた。

「おっけー。んじゃ、もう1つの方いくか」

『わかったの。ちなみに今のモードはゲシュヴィントフォルムなの。覚えておくの。そして今からなるモードは、ランメフォルムなの』

「おう。クラン、ランメフォルム」

『ランメフォルムなの！！』

俺はまたもや光に包まれた。だから爆発じゃねえって。



フォームチェンジした俺は自分の姿を見た。  
まず黒のインナーが、アーチャーのしている筋肉みたいなアーマー  
になっていた。

そして両腕全体を覆う銀色の甲冑。

肩の甲冑の後ろ根元部分には、腰くらいまでの長さのある銀色の何  
かが、折りたたんで装着されていた。

右腕の肘から手首にかけて、大きな装備が装着されていた。

6連式リボルバー型の弾倉。

真っ直ぐ突き出ている銀色の杭。

色は銀一色だけど、形は完全にアルトアイゼンのステーキですね。  
ありがとうございます。

「なんつうか、さつきとは違い重装備だな」

『パイルバンカーを生身で撃つのは、それくらいの装備が必要なの。  
それでもその装備は、結構軽装なの』

「これが軽装ねえ」

肩まで覆う銀の甲冑を見る。  
確かに重装備は腕だけだな。

『じゃあランメフォームについて説明するの。ランメフォームはゲ  
シュヴィントフォームとは違い、重い一撃を喰らわすために攻撃特  
化したフォームなの。まずは右腕のパイルバンカーを見て欲しいの』

「撃ち抜くのみ!!! だな」

「???よくわからないの。それはリボルバーステーク。名の通り、6発入るリボルバー型の弾倉が装備されてるの。弾倉には術式カートリッジという、特別なカートリッジを装填するの」

「術式カートリッジ?聞いたことねえな」

「当たり前なの。だって作者はおかあさま。その武装のためだけに作られた非公式の新システムなの!」

「……大丈夫なのか?」

「安全性は無問題なの!3年もかけて作った、おかあさまによる最高のシステムなの」

「ならいいけどよ」

「信用していいの!それじゃあ、術式カートリッジについて説明するの。使い方は本来のカートリッジシステムと同じで、魔力を溜めとくことで使用可能なの。で、ここからが本来のカートリッジシステムとの違いなの。」

1. まずロードした時の魔力は、自分の魔力になるのではなく、パイルバンカーを使用するための魔力に運用されるの。
2. ロードをすると自動的に魔法が発動されるようになってるの。
3. 発動される魔法は3つあって、1つはパイルバンカーを撃つための爆発的瞬間加速術式。もう1つは威力を上げるため、ステークに魔力付与術式。最後は衝撃を緩和するための術式が組み込まれているの!」

「ふん。そういえば、これって非殺傷設定できるのか?」

『一応できるの。ただ威力は変わらないから、1撃喰らったら3日は意識不明になると思うの。だから人に向けて撃っちゃダメなの』

「というか死なないのが不思議だ」

『細かいことは気にしちゃいけないの。6発しか撃てないから、撃ち終わったらカートリッジを補充するの。大切なことだから忘れな  
いで欲しいの』

「おk。もう説明は終わりか？」

『次の武装で説明は終わりなの。最後の装備。肩の根元ら辺に設置されてるそれなの』

「ああ、これね」

『それはエナジーウイングなの』

「まじか。俺は空を飛べるのか…」

感無量とはまさにこのことだ。

まだ飛行魔法は教えてもらってなかったしな。

気分的にはアレだ。

安西先生……空を、飛びたいです……。みたいなの。

『飛べるには飛べるの。けど、本来は加速のために付けられた装備なの』

「加速のため？なんでよ」

『フォームが重装備だからなの。重装備だから普段よりも動きが鈍くなるし、相手との距離を詰めるのも一苦労なの。クロスレンジにもちこめなきゃ、パイルバンカーをつけた意味がないの。そこで、この魔力式エナジーウイングの出番なの！』

「魔力式か。つまり魔力をエネルギーに動くのか」

『そうなの。そのエナジーウイングは、直進で脅威的な瞬間加速を發揮するの』

「直進しか動けないのか？」

『全方向、動けるには動けるの。けど、瞬間加速は直進にしか使えないの』

「？もつとわかりやすく頼む」

『簡単に説明すると、飛行は一般空戦魔導師並み。直進の加速はソニックムーブ並みなの』

「なるへそ。戦いの時は避けて避けて、一気に距離を詰めるって感じか」

『そんな感じなの。そうだ、試しにエナジーウイングを出してみるよ』

「おう。エナジーウイング発動」

『エナジーウイング展開なのー！』

肩の根元（めんどくさいから背で）に設置してあった物が開き、そこから薄い銀色のエナジーウイングが出てきた。

「こりゃあまた、どこかで見た事のある作りだな」

俺から出てきたエナジーウイングの形状。

どうみても紅蓮聖天八極式のエナジーウイングですね、ありがとうございます。

母さん、絶対ググッたる。

『とりあえず飛んでみるの』

「童貞喪失の記念日だな」

音耶、行っきまーす！！

フワァ

「おお、浮かんだ」

『当たり前なの』

感激のあまり泣いてしまいそうだ。

これで俺も超能力者。

あ、エナジーウイングのおかげか。

「いざゆかん、彼の空へ」

ビュンッ

ビュンビュン

ビューーーンッ

「わたし、飛んでるわー!!」

『???とりあえず、ソニックブーストを使ってみるの』

「ソニックブースト?」

『さっき言った加速なの』

「ああ、ソニックブースト」

ヒュンッッ

俺は風になった。

つて、ちょっとまてや。

「おい、なんで止まった。不良品か?」

ソニックブーストを使い一瞬で移動はできたが、俺が目指していた場所とは違った。

『限界距離は100mなの』

「なん…だ…と…」

『とりあえず今ので、説明は全部終了なの。ご苦労様なの』

「ああ……ああ」

なんだ、このやるせない気持ちは。  
気分的には、絶望したツツツツ！！！！って感じた。

地面に降りて、騎士甲冑を解除する。

俺はクランに失望した視線を向けながら、親父達の下へ向かった。

最後に1つ。

大気圏の外へ行ってみたかったorz

続く！！

第13話 はじめてのセットアップ。マジでググッたる(後書き)

ティーダ出現ww

死亡数ヶ月前のティーダさんです(笑)



## 第14話 模擬戦。マジヤバス（前書き）

どうも、二足歩行犬です。

更新が遅くなってしまいました。

昨日パソコンが戻ってきたので、やっと執筆できます。

いやあ、電源が入らなくなった時は鳥肌マックスでした。

今年で一番怖い思いしたかも（笑）

しかも修理に2万ってどうゆうことよ。

高すぎでしょ。

そんな感じで、諭吉が2人巣立ちました。

しかし、久しぶりにinしたら驚いた。

結構、批判的な感想が来ますね（笑）

いつか来るとは思ってたけど…

本当に駄小説ですみませんm（| |）m

この小説は作者の自己満足のようなものです。

本当にすいませんでした。

できれば、これからも応援よろしくお願いします。

## 第14話 模擬戦。マジヤバス

無人世界。

見渡す限り荒野で囲まれているこの世界に、1人の少年がいた。

少年の手には、数々の血が染み付いてきた鈍く輝く銀色の殺傷兵器。この場には似合わぬ、肉の焼ける匂い。

少年はただ無言に、新たな肉塊を切り刻む。

いや、確かに無言ではあるが、少年の表情はどこか嬉しそうにも感じる。

少年は何を感じ、その凶器を振るうのか。

少年は何を思い、口角を吊り上げているのか。

その答えは少年にしか分からない……。

「音耶ちゃん、お肉なくなっただ」

「暇なら手伝えや」

「…おにいちゃん…お肉…」

「今、音速の速さで準備するから待っててな！」

無人世界で向かえる昼食時。

我が家＋ はバーベキューの真つ最中だ。

俺？

ただ豚と牛の肉塊をmy包丁で切ってたただけだぞ。

雪音の嬉しそうな表情を見ると、ニヤニヤが止まらない。

「すまん、音耶。お前に全部任せて」

「あんたらは家事が苦手だからな。肉を奇怪なアートの変えられても困るしな」

「どうも調理などは好かん」

親父が言ったとおり、西野家の両親は家事が壊滅的なので俺が家事全般を引き受けている。

因みに西野家の家計簿も俺の手の中。

そんなんでいいのか？両親達よ。

俺は心の底から、両親達のミッドでの生活を心配した。

栄養失調で倒れるとかはマジで勘弁願いたい。

収入源が無くなっちまうからな。

「音耶君」

俺が機械のように次々と肉を切っていると、優男が声を掛けて来た。たしかティードだったけ？

「何か用か？」

「はい、君の分を確保しておいたよ」

そう言つてティーダが肉の乗った小皿を、差し出してくる。  
ふむ、ありがたい。

俺はティーダに礼を言つて、小皿を受け取る。

とりあえず補充用の肉を親父に渡し、ティーダの横に腰を下ろす。

「雪音ちゃん、可愛いね」

「だろ？俺の妹は世界一可愛い」

「ちょっとまつて、それは聞き捨てなら無いな」

「あ？雪音が世界一なのは世の理だろ」

「いや、雪音ちゃんも可愛いよ。けど、一番は僕の妹だ」

「ん、お前妹いたのか？」

「いるよ、雪音ちゃんと同じくらいの年の妹が」

「へえ。けど一番は雪音だ」

「いや、ティアだね」

「雪音だ」

「ティアだよ」

「……………」

こやつやりおる。

ティードも妹主義者か。

「妹のスペックは？」

「オレンジツインテール。おそらく将来はツンデレになる」

「ツ！？やるじゃねえか。お前に対する扱いは？」

「デレ」

「……………手ごわいな……。しかし将来はツンに変わり、「兄さん！洗濯物は別にしてよ！臭いがうつるでしょ！！」とか言われるはずだ」

「ツ！！！？…ありえない……………ティアは僕に優しいよな…………？」

「冗談だ。そこまで落ち込むな」

ティードがorzしながらブツブツ言ってるのが、あまりに奇m…  
可哀想に見えた。

「ほら、顔上げろよ。今度、飲みながら妹自慢でも聞いてやるから」

「ああ…、って君未成年だよな？」

「細かいことは気にすんな。禿げるぞ？」

「禿げっ！？……僕は禿げるのか…ティア…僕が禿げても…兄さん  
って、呼んでくれるよね…？」

「お前めんどくさっ」

ティアダはネガティブゾーンを纏っていた。  
まあ、気持ちはわからなくもない。

「さて、これから模擬戦を始める」

昼食が済み少し休憩したところで、親父から集合の合図があった。  
次の訓練は模擬戦。

雪音がいるんだ、いいとこ見せないとな。

「チームは音耶、紫音チームと、管理局チームだ」

まあ妥当だな。

雪音は母さんと魔法の訓練か。

「あの、西野一佐」

「ん？どうした」

「このチーム分けで大丈夫なのですか？」

局員Aが親父に尋ねる。

普通はそうだよな。子供対大人だし。

しかも相手は局員。

こっちの事を心配してんだろ。

「大丈夫だ。こいつらはそこそこやる。お前達も本気で戦え」

「はあ…」

「俺たちは問題ない。だから本気でこいよ」

「はは、なめられたもんだね。いいよ、本気で相手をするよ」

ティードが俺の言葉に反応した。

子供になめられたから、イラっときたか？

「撃墜判定は私が出す。両チーム今から10分やる。それまでに作戦を決めておけ」

「」「」「はい！」「」「」

「うい」

「さて、どうするかイガグリ」

「ううん、俺こつこのの苦手なんだよね」

「俺もだ。つつか相手の事も、なんもわかんねえしな」

「あつ、俺わかるよ」

そついえばイガグリは、男2人組みと訓練してたつげ。

「ティーダさんが銃型デバイスの射撃型で、Bさんが斧を使う近接型だった」

「おk。Aつて女の人には？」

「あの人にはわかんない」

クロスレンジが1人にロング…いや、銃型つて言つてたしミドルレンジか。

あとはスタイル不明が1人。  
ん、かなり不利じゃね？



「兄貴、どうすんの？」

「……よし、イガグリ」

「なに？」

「お前はティータと当たれ。俺はBを確実につぶす。俺が終わらせるまで持ち堪えろ」

「おーけー！！倒してもいいんだよな？」

「ああ。Aについては戦闘が始まり次第、念話で対応を伝える」

「おつす！！絶対勝とうぜ、兄貴！！」

「おう。俺も親父の前で恥をかくつもりはねえ。勝ったら雪音に褒めてもらうつもりだしな」

「いつちよやってやるか。」

「雪音、兄ちゃんに力を分けてくれ。兄ちゃんも愛を分けるから。」

「準備はいいか？」

「「「はい!!」「」」

「うっす!!」

「ああ」

荒野の真ん中で両者距離をとり、開始の合図を待つ。  
俺はクランのゲシュヴィントフォームに身を纏う。

イガグリはを中国風の袖なしの赤い服に、黒い半ズボンを着ている。  
そして手には赤い片手剣が握られている。

対する相手は全員、共通の防護服を身に纏っている。

デバイスはティードが銃型。

Bは身の丈ほどある斧。

Aは青い宝石のついた杖だ。

Aは砲撃型か？

サポートにまわられたら厄介だな。

「イガグリ、予定変更」

「なに？」

「お前はティードとAを相手してくれ。時間を稼ぐだけでいい」

「つまり、2人の目を俺に向けさせればいいの？」

「そういうことだ。できるな？」

「任せな!!」

イガグリは気合が入ったように、剣を構える。  
俺も特攻を掛けるために腰を落とした。

「では模擬戦……始めッ!!!!!!」

「紫音!行く!ぞ………うおい」

「兄貴、どうする?」

「とりあえずヤヴァイ」

開始の合図と同時に、俺と紫音は立ち尽くしてしまった。  
つうか、開始と同時に空を飛ぶとかどんだけ。  
しかも三人。

いきなり手が出せないとです。

「兄貴、空飛べないよね?」

「一応飛べる。けど機動力が下がる」

「どっしする?」



と、考えている間に紫音がBと接触したようだ。  
俺も奴らの下に移動すっかな。

〈ティータ side〉

僕は模擬戦が開始して、直ぐに驚くことになった。

いや、僕だけじゃなくチーム全員だ。

驚きの要因は紫音君。

彼は空を飛ばず、空中を走ってきたのだ。

おそらくレアスキルか何かだと思う。

今はB相手に、クロスレンジでの戦闘を繰り返している。

僕とAは紫音君をBに任せ、音耶君に攻撃を仕掛けていた。

「クロスファイア…シュート!!」

僕の形成した7つのスフィアが、音耶君に向かって発射される。

Aは僕の後方で詠唱中だ。

クロスファイアシュート。

僕が得意とする魔法の1つだ。

誘導性に優れていて、空間制圧を目的とした射撃魔法。

さて、君はどうするかな？音耶君。

「つたく、めんどくせえな」

音耶君は軽いため息をつき、その場で構えた。どうやら避ける気はないらしい。

僕は2つの魔力弾を様子見のため先行させた。防がれたなら、他の方向から仕掛ければいい。

僕は魔力弾をシールドで防がれると思っていた。しかし、その期待は裏切られる。

バキンッ！！  
バキンッ！！

「なッ！？」

何かが割れる鋭い音が耳に届く。

僕はその光景を見て、驚きを隠せなかった。

音耶君はシールドで防いだわけでもなく、魔力弾を弾いたわけでもない。

己の拳で魔力弾を破壊したのだ。

「まったく…君達は本当に滅茶苦茶だ」

こんな戦い方をする魔導師は見た事もないよ。

side out

いてえ…、拳がヒリヒリする。

魔力弾を殴った拳が地味に痛い。

強化したといっても、あんなの殴れば痛いのは当たり前か。もうちょい必要だな…。

俺は腕に更なる魔力を送り、固定する。

これは簡単に言えば、魔力付与のようなもの。

身体に魔力を流し、圧縮、固定する。

これをする事によって、魔力付与した部位が強化される。

威力UP、耐久度UP、筋力UPと、中々使い勝手のいい技法だ。

剣とかなら魔力弾を斬ったりできるだろうけど、あいにく俺は拳なら、その拳を強化しなければ、まともに戦闘などできない。

「うしっ、次」

今度は前と左右から3つの魔力弾が襲ってくる。

ギリギリの場所で見計らうがみ、前から襲ってきた魔力弾をアッパーで破壊する。

と思ったら、今度は後ろから2つの魔力弾が襲ってきた。

「めんどくせえ、なッ!!」

足を強化して飛来した魔力弾を、後ろ回し蹴りで破壊する。

若干できた隙を見計らうかのよ様に、先程避けた魔力弾が再び襲ってくる。

俺は魔力弾をイナバウアーで避ける。

避けたと同時に、イナバウアーの体勢から右手を地面につき、左足を片方の魔力弾に向かって振り上げる。  
破壊した音を聞きながらバク転のように、地面に着地する。  
もう一つの魔力弾を確認しようとすると、既に魔力弾は消えていた。

「ははっ…随分アクロバティックな動きをするんだね」

ティーダは苦笑いをしながら銃を向けてくる。

ちっ、紫音はまだか？

俺は紫音の状態を横目で見る。

「うおおおおおおおおおおお！…！！！」

「はあああああああああ！…！！！」

ガキンッ！！

ガキンッ！！

いい感じに盛り上がっていた。

あれ？

あいつまさか、作戦忘れてねえよな？

「ははっ、楽しいっすよ！！Bのおっさん！！」

「俺も楽しいぞ、紫音君！！」

ガキンッ！！

いい笑顔でやりあってるじえねえか、おい。

あいつ、終わったら殴ろっ。





「はああああ！！！！」

バキンッ！！

バキンッ！！

前方から迫る魔力弾を破壊しながら、後方からバンバン撃って来る火の玉から逃げる。

ああ、このままじゃジリ貧だ。

「クラン、ランメフォルム！！」

『わかつたの！！』

一瞬でランメフォルムへと姿を変えた俺は、火の玉をサイドステッ  
プで避けて、空に飛び立つ。

「そんな装備初めてみたよ！！」

ティードは笑いながらバンバン魔力弾を撃って来る。

同じくレウスも、遠慮無用にバンバンと火の玉を放ってくる。

それらを最小限の動きで回避しながら、反撃のための隙を探っていた時……

『マスター、砲撃が来るの！避けてなの！！』

クランの声に反応してすかさず辺りを見渡すと、翠色の砲撃を今にも発射しようとしているAがいた。

「余所見はいけななっ！！」

一瞬だった。

わずかな隙を見せた俺に、ティードの魔力弾が2発直撃した。身体がぐらついた俺に、さらに追い討ちをかけるかのように、レウスが巨大な尻尾をぶん回す。

「ぐツー！」

尻尾スイングは見事に直撃し、身体が野球ボールのように跳ね上がった。

しかも打ちあがった俺に止めをさすかのように、視界いっぱい広がる魔力の奔流。もちろん回避などはできず、砲撃を喰らった俺は地面に落ちた。

「ますたー！？」

「……がはッ、ゲホッ……全身強化をしといたからゴホッ……一応、無事だ……」

咄嗟に全身に強化を施して、何とかダメージは軽減できた。

だが軽減したといっても、かなりのダメージを受けたのは違いない。

あー、身体中がいてえよ。

なんで俺が、リンチなんか受けなきゃならないんだろ。

あ、イガグリのせいか。

あいつが作戦忘れっから悪いのか。

……なんか腹立ってきた。

この魔導師達もなんなの？集団でリンチかけてきたり。

騎士なら正々堂々戦えよ。騎士じゃありません。

「クラン……非殺傷設定には、してるよな？」

『当たり前なの。だから杭の先で殴っても、刺さったりしないの』

「じゃあ、使うわ」

『へ…？…ま、ますたー！！人に撃っちゃ危ないの！！』

「人には撃たん。あのトカゲ野郎に撃つだけだ」

『あ、それなら大丈夫…夫、じゃないの！？可哀想なの！！』

「あ？可哀想？知るかそんなもん。あのトカゲ見てみるよ。何、あのドヤ顔？絶対バカにしてるだろ」

『でもダメなの！可哀想なの！！』

「パイルバンカーくらい喰らっても、あのトカゲは大丈夫だよ。なんたって、多種多様な武器で攻撃されても、平気な顔をしてるような奴だからな」

『うーん、わかったの。でも当てるのは一発しかダメなの！』

「おk。それで充分」

さて、覚悟しろよトカゲ。

「クラン、アクセル！！」

『はいなの！！』

加速を使いレウスの懐に潜り込む。



しかしあれだな。

なんかパイルバンカー撃つたら、テンション上がったきた。

『わたしもなの!!』

最近のデバイスはハイテクだな。  
でも残念。

もうパイルバンカーは撃てないんだよ。  
俺は残った2人の魔導師に視線を移す。

Aは「は？」って顔してるし、  
ティーダはめっちゃ苦笑い。

うん、とりあえず呆けているAを潰そう。

俺は瞬間加速を使用する。  
加速で得たスピードを利用して、某熱血先生の技を繰り返す。

「ダイナミック、エントリー!!」

「ッ!? きゃあ!!??」

ギリギリAはデバイスで防御したが、Aは衝撃に耐えられず地面に  
ダイブした。

「A、撃墜!!」

親父の声が耳に届く。  
残りはティーダか。  
ティーダを見ると、まだ苦笑い。

「ははは…まさか、それ…人には撃たないよね…？」  
パイルバンカーを指差しながら尋ねてくる。  
そんなに怖いかな？

「ああ、人には撃たないから安心しろ」

「それなら、いいんだけど…」

ティードは顔を引き締めて、こちらを睨んでくる。  
やる気マンマンですな。

「クラン、速攻で潰すぞ」

『わかったの！！ああ、戦いつて最高のの！！』

なんかおかしいぞ、クラン。

戦闘狂のデバイス？

あれだな。某妹アニメっぽく言うと、

『俺のデバイスがこんなに戦闘狂なわけがない』

打ち切り候補上位に入れそうな題名だ。

「いくよー！！」

ティードのデバイスから魔力弾が、次々と撃ち出される。

それを回避しながら徐々に距離を詰める。

弾幕を回避しながら進む俺は、さながら某シューティングゲームの  
戦闘機にでもなった気分だ。

「アクセルツ！！」

『はいなの!!』

ヒュンッ

一瞬でティーダの眼前に移動し、左腕を突き出す。

しかしティーダはギリギリのところまでバリアを発動し、俺の攻撃を受け止めた。

しかも意外と硬い。

俺は即座に右腕を振り上げる。

「ちょッ！それ使わないんじゃない!?」

「バリアを破壊するだけだ！クラン!!」

『ぶち抜くの!!』

ガシヨンッ

ズガンッッッ!!!!

振り下ろした右腕から、とんでもない速さの杭が飛び出す。バリアはもの見事に破壊された。

ティーダは破壊された衝撃なのか、身体のバランスを崩す。

「隙あり!」

俺はティーダの腕を掴み引き寄せせる。

このまま右拳を腹部に入れて気絶させるつもりだ。

俺は大きく右腕を振りかぶった。

ティーダは「しまった!？」って表情をしている。



「これでラストォ！」

後に俺は思う。

どうして俺は右手で殴ったんだろうと。

どうして俺は、デバイスの状態に気づかなかったのだろうと。

「はああああ！！」

「避けられなッ！！」

『ヒヤッハーーーー！！！！ぶち貫くの！！！！』

「「え（は）？」」

ガシヨンッ

ズガンッッッ！！！！

「ちよ……」

「ぐあッ……あ……」

「テイ、ティーダーーーーー！！！！！！！！！！」

モロ腹部にパイルバンカーを喰らったティーダは、ゆっくりと背中から落ちていった。

落ちていく時の「あ……」って表情。

天に向けるように突き出す右腕。  
ちよつと涙目。

まるでビルから落ちた人を見た気分だ。

『ふう、さいっこーなの!!』

「……………」

『ますたー？どうかしたの？』

いや、お前がどうした。

そんなキャラじゃなかったよな？

人に撃つなって言ったのお前だよな？

率先して撃つてるお前は何なの？バカなの？死ぬの？

とりあえず…

「ティータ・ランスターに敬「おい」……随分ファンキーなヘア  
スタイルだな、親父…」

振り向くと親父がいた。

オールバックだった髪は逆立って、額には血管が量産されている。

親父はスーパーサイヤ人だったらしい。

「音耶…お前という奴は……………」

「俺が……悪いのか？そうだ、クラン先生がやったんだ！俺は悪く  
ねえ！俺は悪くねえ!!」

殺されるなら、せめて一花咲かせて死のうぞ。

「言いたいのはそれだけか…?」

「クリリンのことかああああああ!?!?!?!」

次の瞬間、俺は宙を舞っていた。

「ティード、すまん」

「ははは…」

1時間後。

母さんの治療を受けたティードは無事復活した。

俺は親父にフルボッコ。

まさか親父が虚空瞬間を使えるなんてな。

「おらクラン。てめえも謝れ」

『ごめんなさいなの。ついハイになっちゃって…』

「ははは…」

ティードは笑っているが、やっぱり痛そうだ。

本当に申し訳ないことをしたな。

…あれ？そつえば俺悪くなくね？

「ティード、俺の駄デバイスが本当に悪い事をしたな」

『駄デバイス！？』

「ははは…」

「お詫びといつちやなんだが、困ったことがあったら力になるから  
」よ

「ははは…」

ん？

なんかおかしいな。

「ティード？」

「ははは…」

「食べ物を嘔む場所は？」

「ははは…」

「母は？」

「ははは……」

やべ、バグった。

ティータはこの後、ミッドの病院へ搬送されたそうなの。

ちなみにイガグリvsBの勝負は、引き分けだったらしい。

とりあえずイガグリには罰として、1ヶ月ブリーフ生活を言い渡した。

ざまーみる。

〈ミッドのとある病院〉

ガラッ

「おにいちゃん、大丈夫？」



今日もミッドは平和だった(笑)

## 第15話 最高だった日常（前書き）

どもども、二足歩行犬です。

今回は音耶の過去編です。

いままで音耶のアレな言動&行動。  
それも今回で明らかになります。

長いので、2つに分けました。  
しかし2話を一気に書くのは疲れました。

ほのぼの重視の今回。  
最後はちよつとシリアスです。

くそ  
シリアスは苦手ば

寝不足で若干ハイになっている作者でした。



## 第15話 最高だった日常

「ふう、今日はやけに疲れた…」

時刻は11時。

親父達との休みを終え、家に帰宅したのは先程。

両親はミッドへ帰り、イガグリと雪音は疲れたのか直ぐに寝てしまった。

俺は簡単な夕食をとり風呂へ入って、自室へと向かった。

机の上に1日置いてあった携帯が、ウルトラマンの胸のライトばりにピカつている。

確認するためにケータイを開くと、画面には雪音の寝顔が写っていた。

今日の疲れが一気に吹き飛ぶ。

雪音の寝顔はポーシヨンや薬草が霞むほどの回復力を持っている。

まさに女神の歌声ならぬ、女神の寝顔。

そんな神々しい待ち受けに、メールが2件来ているというメッセージが映し出されていた。

俺は確認のため受信履歴を開く。

From 海堂海斗

sb (、・、・、)

音耶あゝ

なんで今日は休みだったんじゃゝ

ワシは寂しいと死んじゃう・・・  
寂しさを紛らわすために、今日はエロ本を抱いて寝ることにするん  
じゃ・・・。

……………なんだ、迷惑メールか。  
送り主には感謝の気持ちを籠めて、兄貴動画を送ってやろう。  
さて、次は…

From エセ関西人

sb 今日はどないしたん？

なんや今日はどないしたん？  
風邪か？

まあ。それはさておき。  
明日みんな遊ぶんやけど、よかったら来いひん？  
来れるんやったらメールしてなあ。

……………。

カチカチッ

TO エセ関西人  
sb 無題

明日は行けない。  
悪いな。

パタンッ

「……知り合いから心配されるなんて、久しぶりだな」  
閉じた携帯を机に置き、ベットに横たわる。  
カーテンの隙間から射す月の光が部屋を照らす。

なんか最近、あいつらとの距離が縮まってきたよ……。

音耶あゝ

今日はどないしたん？

はあ……アリサでいいわよ

わたしはライダーかな？

音耶、起きてる？

音耶君っ！

祐！

ッ！？

……ああ、わかってる。

友達なんていららないよな。

あいつらとの付き合いも知り合いとしてだ。

これ以上先には進まない。

友達にはならない……。

俺の友達……いや、親友はあいつらだけだから。  
だから……友達……なん……て……。

夢を見ていた

これは前世の記憶

俺が俺だった時の記憶

俺が俺でいれた時の記憶

~~~~~

「祐！早く起きなさい！！」

眠気を吹っ飛ばす甲高い声が聞こえる。

常人ならきつと怒り狂うほどの大声だ。

しかし毎日聞いている俺には、既にフィルターが架かっている。

この程度じゃ、ベットから飛び起きるほどでもない。

ま、俺は優雅に睡眠を貪らせてもらっよ。

次の瞬間、俺は自分でもビックリするような声を出すのであった。

ドゴツツ！！！！

「ッひ！？ぎゃあああああああああッ！！！！」

とんでもない衝撃…というよりも鈍痛が額を襲った。

まるでサイと頭突き対決したような痛みだ。

「っいつてえな！！何すんだよ！？」

「あら、起きてるじゃない」

上体を起こし、この痛みを与えた奴に文句を言う。

視線の先には、六法全書を片手に佇んだ美少女。

って、おい！！

六法全書はいかんだろ！？  
俺を殺す気か！？

「弁護士目指してるんだもん。六法全書は必需品よ」

「だからって殴るのはダメだろ…。俺の頭が凹んだらどうする？」

「あら、反対から殴れば直るんじゃない？」

「俺の頭は、そんな愉快的構造はしていない」

「はいはい。どうでもいいからさっさと支度なさい」

少女はそういうと、部屋を出て行った。

俺は溜息を吐いて、学校へ行く支度を始めた。

「おう、祐。って、どうした？デコが赤いぞ」

「…その六法ウーマンに聞いてくれ…」

「六法？ああ、美希か」

家の玄関先に立っていた大男と挨拶を交わす。

こいつは大貴。

1つ年上の幼馴染だ。

愛称は大<sup>だい</sup>。

俺は大さんと呼んでいる。

「祐、おっは〜」

「鈴か、おはよ」

「今日も美希と朝からラブラブだねえ〜」

「冗談は髪型だけにしろ」

俺の言葉に頬を膨らますこいつは、鈴。

同じ年の幼馴染だ。

特徴はパイナップルヘアと明るいい性格。

からかうと面白い元気っ娘だ。

「で？だれが六法ウーマンですって？」

「お前以外に誰がいる。六法全書なんか携帯しやがって」

「だっ弁g」あ〜、はいはい。そうでしたね〜」……なんかムカッ

く

六法全書を携帯しているこいつは、妹の美希。  
双子の妹だ。

弁護士を目指している才色兼備、文武両道な完璧美少女。  
妹ながら実に誇らしいぞ、うん。

俺？

普通の高1ですよ。  
ちよつと人付き合いが苦手な。

「さあ、早く行きましょ」

「だな。遅刻はいかんからな」

「大さんは、あいかわらず真面目だな」

「だって大だもくん」

「お前達も高校生になったんだから、しっかりな。ほら、皆行くぞ」

「「「はい」」」

これが俺の生活

幼馴染達との日々

最高に幸せだった日常

こんな毎日が続けばいいって、俺は願っていた  
けど・・・

それは唐突に訪れた



~~~~~

「ジャッジャジャ〜ン!!!」

「いきなりどうした？」

土曜日。

俺たちは当たり前のように今日も遊んでいた。  
いや、これが俺たちの普通なんだ。

幼馴染4人で遊ぶ。

これは俺たちにとって当たり前の日常。

今日は大さんの部屋に集まっていた。

で、ほのぼのと駄弁ってる時、鈴が突然騒ぎ始めた。

「鈴、どうかしたの？」

「見てよこれ!!!福引で当てちゃった!!!」

鈴はポケットから紙を取り出し、俺たちに見せ付けてくる。

なになに、『商店街感謝祭！！福引大会2等賞』  
なんじゃこれ？

「だ〜か〜ら〜、福引で当てたの！！日帰り温泉旅行だっ〜て！！」

「ほ〜、やるな鈴」

「でしょでしょ〜？」

「へえ、良かったじゃない」

「うん！！それで皆で行かない！？」

「そうだな。皆で温泉行こうぜ」

「そうね。最近肩こりが酷いし」

「ババくさいぞ美くすまんすまん！俺が悪かった！」

「大さんも喰らっつけよ、六法アタック。俺の苦しみが良くわかる  
から」

「あれは洒落にならんだろ…」

「で、皆行くよね？」

「当たり前だ」

「そうね」

「俺も温泉に入りたいしな」

「それじゃ、明日の9時に駅前集合ね!!」

「皆遅れるなよ」

「祐が一番心配だな」

「私に任せなさい！祐は気絶させてでも起こすから」

「それは起こすって言うのか…?」

明日が楽しみだな。

久々の遠出だし、きっといい思い出になるだろ。

久しぶりの遠出

幼馴染達との旅行に、俺は凄く心が弾んでいた

これからも、こつやつて楽しい日々が続いていくんだ

けど…この旅行が、俺の人生の分岐点だなんて思いもしなかった

~~~~~

カポーンッ

「あ、あ、いい湯だあ」

「親父くさいぞ、祐」

「しょうがないだろ、気持ちいいんだからあ」

「ま、確かにわかるがな」

俺たちが温泉に着いたのは、つい先程。

まずは温泉つてことで、さっそく温泉に入りしてきた。現在は入浴中である。

しかしまあ、極楽ですなあ。

「祐、久々に勝負しないか？」

「おつ、俺に勝負を挑むのか？俺のは凶暴だぜ？」

「ふつ、若造が。洗練された相棒を見せてやるつ」

「なら、いざ尋常に…」

「決闘!!!!!!」

俺たちは勢い良く立ち上がり、己の魂を見せ付ける。  
なッ!? 大さんの相棒は化け物か!?

「ほ、祐の息子も成長したようだな」

「毎日鍛錬を欠かさないからな。そういう大さんのは核兵器だな……」

「ハハハッ、これが強者よ! ウィルソンは無敵だ!」

「名前付けてんのかよ……」

「相棒だからな。どれ、祐の息子にも名前をつけてやるっ」

「威厳のある名前で頼むよ。信長とか」

「ん~~~~、よし! ジョニーだ!」

「ジョニーか……。うん、いいな」

「だろ? 改めてよろしくな、ジョニー!」

「ジョニー、これからもよろしくな!」

2人して笑っていると、誰かが肩を叩いてきた。  
振り返るとそこには、おっさんがいた。

「お前達は何をやっている……」

「せ、先生!？」

「ん? 大さんの先生?」

「ああ、担任の畑先生だ」

「どうも、大さんの幼馴染の祐です。よろしくです、畑さん」

「ああ、知ってるよ。いつも大貴が話してるからな」

畑さんはそう言って、湯船へと腰を下ろす。

俺たちも教師の前で決闘は続けられないので、先生の横へ腰を下ろした。

「それにしても、先生はどうしてここに?」

「家族旅行だよ。昨日から来ていてな」

「へへ、畑さん家族思いですね」

「女房がな、怖くて…」

「「あへ、ご愁傷様です」「」

ドンマイです、畑さん。

俺と大さんは静かに合掌した。

「それはそうと、お前達も旅行か?」

「日帰りですけどね。幼馴染が福引当てて」

「あゝ、なるほど。じゃあ4人で来たのか」

「ん？なんで人数知ってるんですか？」

「お前達4人は、いつも一緒だからなあゝ。先生の間でも有名だぞ。幼馴染4人組ってな」

「やだ、照れちゃう」

「気持ち悪いぞ、祐」

その後、俺たちは3人で少しの時間談笑して、風呂から去った。

「2人共おつそゝい！」

「まったくよ」

集合場所だった旅館の前に行くと、2人は既に待っていた。しかも、ちよつと怒ってる。

「悪いな、ちょっと先生に会って」

「先生？学校の先生がいたの？」

「ああ、畑さんって言って、面白い人だったよ」

「へへ。そういえば男湯うるさかったぞ」

まじか。

どうやら決闘の声が聞こえていたらしい。

「まさか、全部聞こえてたか…？」

「ん〜と、ジョニーがどうのこうのとかが、毎日鍛錬してる〜とか、それくらいしか聞こえてなかったよ？」

「お、おお…。ならいいんだ」

あつぶね〜。

全部聞こえてたら、きつと六法アタックが飛んできてたよ。  
下品なツ！〜とか言ってる。

「で、結局何話してたのよ？」

「息子の話だ」

「あ、ちょ、大さん！」

「???息子?...息子...毎日鍛錬...浴場.....ツ〜!?!?へ、変態ツ!!!  
!!!/!/」



ズゴツツツ！！！！

「ぐはぁッ！！！！！！」

なんで…俺だけ…。

「さっきは酷い目にあつたぞ、まったく」

「アンタが悪いんでしょ！！」

「まあ、無事で何よりだ」

気絶した俺を大さんが介抱してくれたみたいだ。

無事ではないんだけどな。

復活した俺を引き連れ、幼馴染組は土産屋を転々と周っていた。

「ん〜、パパとママのお土産どうしようかな〜？」

鈴は食べ物コーナーで頭を捻っていた。

どうやら両親に土産を買っていくらしい。

大さんは何故か、木刀を見て「うんうん」と頷いている。  
訳がわからんよ。

「祐、お父さん達のお土産何にする？」

「ん〜。この能面は？」

「却下。本当に祐は変な物が好きねえ」

「イカしてるだろ、これ」

能面を被り、土産に悩んでる鈴の下へ向かう。  
そつと、肩に手を置く。

「ん？だ〜れ〜っ！！！！！？？？きやああああああああああ  
あああああ！！！！！！！！！」

ドゴッ！！

「いったあああああ！！！！！！」

土産で殴るなよ…、商品だぞ…。  
つつか木箱いてえ…。

「は~~~~つ、旅行も終わりがあ~~~~」

駐車場の脇にある展望台で、鈴が大きく背伸びする。

そう、俺たちの旅行はそろそろ終わりなのだ。

今はバスの到着を待っている。

「それにしても、キレイね」

「ああ、そうだな」

俺たちは横一列になって、展望台から見える景色を眺めている。  
ここから見える景色は、まさに絶景だった。

山一面を覆う紅葉。

夕日が眩しい空。

山の間を縫う様に流れる川。

本当にキレイな景色に、俺は心奪われた。

「ねえ…」

「どうした、鈴？」

「また、皆でこんな景色が見れるかな？」

「ああ、また見れるさ、きつと」

「大ちゃん…」

「そうね、また4人で来ましょ」

「美希…」

「俺たちなら、どこだって行けるさ。俺たち4人なら…」

「祐…：…ぷっ、ちよつとクサイ台詞」

言うな。

俺だって恥ずかしいんだ…。

「でも、そうだね！きつとまた来れる！うっん…もつと素敵な場所も行けるかもね！！私達4人なら！！」

「そうだな。俺達に不可能はない！！」

「大、意味わかんないわよ、それ。でも…確かに私達なら何でもできそうね…」

「ああ、俺達4人は最高の幼馴染だからな。これからもきつと、楽しい事が待ってる!」

「祐、だからクサイ台詞だった」

「……うるせ」

「あ〜〜!祐が照れてる〜〜!!」

「うっせえ!」

「はははっ!!!」

本当に最高だよ、俺たちは。

「そつだ、記念撮影しようよ!!」

バスがそろそろ到着する時、鈴がそんなことを言い出した。  
記念撮影か、確かにいいな。

「誰かカメラ持ってた?」

「俺は持ってきてないぞ。祐は？」

「同じく」

「私も持ってきてない」

「私もよ。って、記念撮影できないじゃない!？」

まったく…そんなに騒ぐなよ、マイシスター。

今の携帯にはカメラ機能つてのがあるんだぜ？

「あ……べ、別に忘れてた訳じゃないわよ!!」

「はいはい、そーですね。んじゃ、誰かに撮ってもらっか」

隣で騒ぐ美希をスルーして、誰かいないか探す。

おっ、いい人がいた!

「畑さ〜ん!!」

俺の声に気づいたのか、畑さんは一緒にいた家族と思わしき人物と話して、こちらに駆け寄ってきた。

「また会ったな。何か用か？」

「これ。シャッター押して欲しいんだけど」

俺が携帯を渡すと、畑さんは「お安い御用だ」と言っつて、携帯を受け取った。

「さて、お前ら並べ〜」

「は〜い！美希と祐は真ん中ね〜〜！」

「ちょ、ちょっと！押さないでよ鈴っ」

「俺は祐の隣だな」

「祐、祐！美希に抱きついちゃえ〜！」

「え！？祐！やったら〜…」

「お〜い、そろそろいくぞ〜」

「祐、一気にガバーツとやってしまえ〜！」

「祐、本当にやったら〜…」

「いくぞ〜、ハイ…」

「ふむ、それもまた一興なり〜ってね「グイッ

「きゃっ、ちょ、祐！」

「…チーズ！」

パシヤッ

「おっけーだ。皆よく撮れてるぞ〜」

畑さんは俺に携帯を手渡してくる。  
見てみると、確かに良く撮れていた。

「祐、後で皆に送ってね〜」

「ああ、任せろ」

お、バスもちょうど到着したようだな。

俺たちは畑さんにお礼を言って、バスに向かおうとした。

ガッ!!

「……………何故、肩を掴むのですか？美希さん…?」

「あ、アンタって奴は〜〜〜〜ノノノ」

「うん、調子に乗りすぎました」

「覚悟は?」

「い、痛くしないで…ね?」

「却下」

ドゴッッッッ!……………!!

俺はこの日初めて、空を飛んだ。

夕日が眩しいぜ、ちくしよ〜。



「あゝ、今日は楽しかったな？」

「そうだな。俺も初めて空を飛んだよ」

「あれは祐が悪いんだからねッ！！」

「すみませんでしたー」

「くうく、なんかムカつく」

バスの中。

帰るのに2時間ほどかかるバスの中も、喋っていると退屈ではない。  
席順は男女別々。

俺たちの座席の後ろには女子組が座っている。  
2人とも身を乗り出して危ないじゃないか。  
ちゃんと座りなさい。

「ねえねえ！ポッキー食べる！？」

「サンキュー」

「俺も貰う。それと鈴、少し静かにしろ」

「え〜！？だって、あそこの人も騒いでるよ！」

鈴が指差す先には、1人の学生服を着た少年が携帯片手に騒いでいた。

「寝ぼけてたから仕方ないじゃろ！というか、だれかバス違うつて教えて欲しかったんじゃない？！……え？教えた？…ワシはそんな聞いてないんじゃない？！」

「……どうやら乗るバスを間違えたみたいだな」

「あれって修学旅行生だよな？」

「普通間違えるかしら？」

「アホな奴もいたもんだな」

俺たちは惨めな学生に合掌した。  
なんつうか、ドンマイ。

このまま家に帰って、俺たちの旅行は終わるはずだった

しかし、この時の俺は思ってもいなかった

まさか、あんな事が起きるなんて

「ふあゝあつ……ねむ……」

「何だ？祐はお寝む時間か？」

「あほ。ただ、ちょっと疲れてな」

「今日は楽しかったもんね。私もはしゃいじゃった」

「そうね。私も疲れたわ……」

「皆、明日遅刻なんて許さないからな」

「へいへい。わかってま」

大の忠告に軽口で応えようとした時だった。

ズドンツツツツ！！！！！！！！！！

突然、大きな衝撃が身体を襲う。

「なツ！！！？？」

席から放り出される身体。

この時、俺は理解した。

バスが何かにぶつかったんだ。

ここは崖に面した道路。

ツ！？

気づくのが遅すぎた

俺は座席に叩きつけられ、その衝撃で足が動かなかった

視界に映ったのは、鈴と美希を守るように抱きつく大さん

必死に俺に向かって手を伸ばす美希





第16話 俺が俺であるために（前書き）

さて後編です。

では、じゃあー

## 第16話 俺が俺であるために

楽しい旅行だったはずが、1つの事故で台無しになった

いい思い出が…最悪の思い出へ

この事故が俺を変えた

俺が俺でなくなる……最悪の目覚め

……声が聞こえる……。

……何故か懐かしいと感じる声……。

……誰だ？……。

……姿が見えない……。



……ああ…俺が目を瞑っているからか…。

「ん……父さん…母さん……?…」

「っ!?!…ゆ、祐!…」

「祐!!!良かった…本当に!…」

目を開けると、驚いた表情をしている両親がいた。

母さんは泣きながら抱きついてくる。

父さんは片手で顔を隠して泣いてるようだ。

父さんの泣くところなんて、かなりレアだな。

というか、母さん。

抱きしめすぎじゃない?

身体がヤバイくらい痛いんだけど…。

「祐っ、祐っ、祐!…」

「母さん…ちょっと、痛いんだけど…」

「あっ!?!?ごめんなさいっ、大丈夫だった!?!?」

「ああ、大丈夫だけど…」

「祐、今先生を呼ぶからな…」

先生?

あ、ここ病院だったのか。

道理で消毒液臭いと思った。

あれ？なんで俺は病院なんかにいるんだ？  
さっきまでみんなと……。

「か、母さん……」

「どうしたの？」

思い出した……。

確か帰りのバスで事故に……。

思い出した瞬間、身体の震えと強烈な吐き気が襲ってきた。  
声は裏返し、身体から妙な汗が流れてくる。

「み、……みんなは？」

「ッ！？あ、あ……うう……うう……」

どうして泣くんだよ母さん？

みんなはどうしたんだよ。

答えてくれよ……。

「父さん……」

「くッ……みんなは……」

父さんは悔しそうな顔をしながら、拳を握りしめている。

おいおい……。

なんだよ、その反応……。

みんなはどうしたんだよッ！？

「だ、大さんは！？美希は何処だよッ！？鈴もなんでいないんだよ

「!?!?!?」

「祐……皆は……」

「みんなは何だよッ!?!?何処にいるんだよ!?!?!?」

「みんなは……亡くなったよ……」

みんなが亡くなった…?!

みんなが死んだってことか?

父さん…冗談はやめろよ…!?!?

悪質な冗談だぞ…!?!?

「父さんッ!?!?冗談はやめろよッ!?!?みんなは何処だよッ!?!?!?!?!」

「祐ッ!?!?」

「離せよ母さん!?!?頼むから嘘だつて言えよッ!?!?なあ、父さん!

!?!?!?!?!」

「嘘でこんな事が言えるか…ッ!?!?!?!?!みんな…死んでしまったんだよ!?!?!?!?!くうう…」

ははは…。  
ああ、嘘じゃないんだ…。  
みんな…死んだんだ…。

みんなの死を実感した瞬間、目の前が真っ白になった  
自分でも何を考えていたのか、よく分からない

ただ、両親を追い出して泣き続けた事は覚えている

この日、俺の中の何か壊れた気がした

「……………」

何時間泣いていたんだろう…。  
両親が何かを言って帰ったが、それさえも覚えていない。

月明かりが射す病室で、俺は人形のようにただ座っていた。そんな時、俺の視界にある物が映った。ベットの横に配置された台の上に置いてある携帯。紛れもなく俺のだった。

「…………壊れてなかったんだな……」

携帯を手に取り、ゆっくりと開く。

画面に映っていたものを見た瞬間、形容しがたい感情が溢れてきた。画面には、夕日と紅葉に彩られた山を背景に、幸せそうな顔を浮かべる俺達。

中央には、美希を抱き寄せピースをする俺。

俺に抱き寄せられ驚いたのか、困惑した表情を見せる美希。

美希に寄りかかるようにして、満面の笑みを浮かべている鈴。

俺の頭に手を乗せて、豪快な笑みを浮かべている大さん。

「ははっ…美希の奴、面白い顔だな…。鈴は幸せそうな顔をしてる…。大さんは…相変わらず豪快な笑みだな…。俺…幸せ…ぞう…。だ……………う。ああ…みんな……………どうして……………なんでえ……」

大さん…

みんなのまとめ役で、優しい兄貴分。

鈴…

いつも明るく、俺達の大切な盛り上げ役。

美希…

厳しいけど、結構兄思いな大切な妹。

みんな大切な幼馴染と妹だった。

世界一番と言っていていいほどの友達と妹。

俺の人生では決して欠かせないピース。

なのに…。

「なんで…俺だけ残して…みんな死ぬんだよあ…」

俺の全てと言っても過言ではない3人。

みんながいなくなったら、俺はどうすればいいんだよ…。

俺は携帯を抱きしめながら、何時間も泣き続けた。

~~~~~

俺が目覚めてから1ヶ月が過ぎた。

あの日以降、俺は涙を流さない。  
いや、流せなくなった。

悲しい気持ちの後には、恐怖が待っていたから。

みんながいない生活。

みんなに会えない日常。

みんなと送れない人生。

それが堪らなく怖かった。

自分でも何故こんなに怯えるのかわからない。

ひとりでだって学校へも行ける。

ひとりでだって生活もできる。

ひとりでだって何かできる。

けど、理解できない恐怖が俺を襲ってくる。

なぜ怖がる？

みんないなくても生活はできるだろ。

なんで震えが止まらない？

怖いことなんか1つもないのに。

まるで身体感覚を失ったような恐怖が、俺の毎日を支配していた。

この時から、俺の心は狂っていたのかもしれない

俺は理解できない自分が怖かった

~~~~~

目覚めてから2ヶ月が経った。

あの時の事故でわかったことがある。

あのバスの乗客は2人以外、全員亡くなったようだ。  
事故の原因はトラックがバスに衝突したこと。

トラックの運転手は居眠り運転をしていたらしい。

その話を聞いた瞬間、思わず笑ってしまった。

居眠り運転？

そんなことで俺の大切な人は死んだのか？

呆れて笑いしか出てこねえよ。

そしてもうひとつ。

先日、畑さんが見舞いに来てくれた。

畑さんは泣いてた。

とても悔しそうに。



「なんでも力になるから、何かあったら相談してくれ」と言ってくれた。

その言葉は素直に嬉しかった。

最近では恐怖感も消えた。

ただ…恐怖感がなくなると、次に待っていたのは絶望感。毎日がつまらなく。

毎日が色の失ったモノクロの世界。

刺激がなく無気力な生活。

いや、色彩感覚がおかしくなった訳ではない。ただ、全てが意味のないものに見えるだけだ。

俺は最近の日課である瞑想を行う。

前にやったゲームで、俺に似た状況があった。

仲間達との楽しい修学旅行のはずが、バスの事故に巻き込まれるという話だ。

その中で想いが世界を作った、というのがあった。

最後は皆生き残ってハッピーエンド。

結構おもしろい作品だった。

だから、俺が想えば皆生き返るかもしれない。

そんなことを思っていた。

俺は狂っていた

こんなのゲームの中だけのことだって分かっている

けど、そんな希望に縋らないと俺はきつと壊れていた

~~~~~

目覚めから3ヶ月経った、この日。  
思わぬ来訪者が来た。

ガラッ

「おつす！　、見舞いに来てやったぞ！！」

見かけない男子が病室へと現れた。

「……誰？」

「え？…っあ、すみません！！間違えましたああああ！！！！」

バタンツ

どうやら間違いだったらしい。

と、隣の病室から騒がしい声が聞こえた。

『お〜すっ！　、来てやったぞ！』

『なんじゃ、来てくれたんか！』

『しかし、ここ遠いな〜。おかげで小遣いスツカラカンだぜ』

『　聞いてよ。こいつ、部屋間違えたんだぜ！』

『言うなよ！？……しかし、まあ、　、元気そうでよかったぜ。  
相変わらず虫並みの生命力だな』

『ワシは人間じゃ！！まあ、心配してくれとつたのは感謝するんじ  
ゃ。持つべきものは友達じゃな！！』

『じゃあ、大事な友達にお小遣いくれ』

『却下じゃ』

……………友達か…。

俺は最近の日課である読書を始めた。  
瞑想？

ああ、もう意味がないってわかったよ。  
というか、最初から分かってたかもな。  
本当に何してんだか、俺は。

希望も何もない

俺はただ、この無意味な生活を送る

この後、退院が決まったのは直ぐだった

俺は普通の生活に戻る

そして、退院後

俺は急速に自分を見失うことになる

~~~~~

今日から学校への復帰だ。

職員室に挨拶に行くと、様々な教師が声をかけてくれた。

「大丈夫か？」

「身体はもういいの？」

「つらいと思うけど頑張れ」

「いつでも相談に乗るからな」

どいつもこいつも同情、同情。

そんなに俺が可哀想か？

そんなに俺が惨めか？

ふざけんな、クソやろう。

教室でも同じだった。

どいつもこいつもかけてくるのは同情、同情。

どうしてそんな目で俺を見る。

どうしてかけてくる言葉が全部同情なんだ。

そんな…哀れんだ視線で俺を見るな。

学校生活が落ち着いた頃。

俺は畑さんに呼び出された。

「なんですか？」

「祐君。君はこれからどうするつもりだ？」

「どうするって…何がですか？」

「……君は前を向いて歩く気があるか？」

「……………」

「今の君は見ていて危なっかしい。まだあいつらのことを引きずっているだろ？」

「…当たり前ですよ。そんな簡単に割り切れないですから」

「ああ、確かにそうだ。じゃあ君は、このまま亡き人に縛り付けられているつもりか？」

「…あいつらが死んだってのは、もう受け止めています。ただ、あいつらのいない生活が奇妙なほど怖いんですよ」

「怖い…か。なあ、私からひとつ提案があるのだが…」

「提案？なんですか？」

「友達を作ってみてはどうだ？」

「…友達……。つまり、あいつらが抜けた穴に代用品を使えってことですか？」

「まあ、言い方は悪いがそんな感じだ。君はあいつらとの日常が無くなったことに怖がっている。なら、友達を作って楽しい日々を送れば、きっと恐怖もなくなると思う。それにあいつらの事を忘れるなんて言わない。ただ、君には今を生きて欲しいんだ」

「…頑張ってみます」

友達を作れば、この恐怖が消えるのか？

友達を作れば、俺の世界に色が戻るのか？

友達を作れば、また楽しい日々を送れるのか？

この日、俺に希望の光が射した

俺は前を向いて進めるのか？

大切な人達に顔向けできるような人間になれるのか？

友達を作る…。

やるしかないよな…。

「でさあ、そこでモンスターが…」

「あのさっ」

「ん？どうかした？」

「あ、あの…」

どうして身体が震える。

なんで声が思うように出ない。

今を生きるんだろ？

前を向いて進むんだろ？

「ん？大丈夫か？」

「あ……………大丈夫だ…」

「そっか、ならいいや。でさ、続きなんだけど…」

できなかった。

前は普通に話しかけることができたのに。

何故だ？

なんで怖かったんだ？

意味がわかんねえよ…。



「通算24回…全滅か…」

今日もダメだった。

畑さんの助言から1週間。

俺はできるだけ友達を増やそうと努力した。

けどダメだった。

なぜか話掛けようとする、震えが止まらなくなる。

友達になろうとすると、恐怖が俺を襲う。

でも、1つわかった事がある。

いや、理解した。

俺が恐れているものを。

俺は理解できなかった恐怖を知る事ができた

自分の中に恐怖を理解した俺は

もう今までの俺をやめた

~~~~~

2年後

黄咲峠。

かつて大切な人を失った場所に、俺は来ていた。

その場所には小さな地蔵があり、多くの花束と供え物がしてある。

俺は持参した花束を供えると、手を合わせて黙祷した。

数秒後、瞼を開いて友人と妹に言葉を送る。

「久しぶりだな、元気にやってるか？」

「俺は元気にやってるぞ。まあ、毎日つまらねえけどな」

「今日で俺も高校卒業だ。就職先も決まったし、一応これからも生きてはいけるよ」

「まあ、俺は生きてる心地がしねえけどな。…お前らはきつと今の俺を見たら、怒り狂うだろうな」

「中途半端に生きて、今を生きようとはせず、過去の事に縛りつけられている。最悪だろ？」

俺はポケットからタバコを取り出し、火をつける。

「……俺さ、自分が何に対して怖いのか理解したよ」

「俺は、お前達が死んだのがトラウマになってたんだだろうな。対人恐怖症ならぬ友人恐怖症だよ」

「笑えるだろ？大切な人を無くすのが、凄く怖いんだ」

「でも、一応人付き合いはできるぞ。知り合いつてどこまでなら。けど、それ以上の関係を望むと身体が拒否反応を起こしちまう。きつとあの絶望感をもう味わいたくないって、心が俺にストップを掛けるんだと思う」

「だから俺は、人に嫌われるような人間を目指してる。こんな面倒くさい身体なんだ。相手が近づいてきて、それを裏切るのもなんだしな」

「それなら最初から嫌な人間だと思わせる。相手が近づこうとしなように。相手が傷つかないように」

「おかげで俺の評価はボロボロ。毒舌、人でなし、不良、DS、鬼畜。ああ、変人とかも言われたことあるぞ。はははっ」

「どうだ？今の俺相当狂ってるだろ。自分でも分かってるんだ」

「けどさ、相手が傷つかないためにも。自分が傷つかないためにも。これが1番だと思うんだ」

タバコの吸殻を携帯灰皿にしまい、俺は腰を上げる。

「どうしようもない弱虫野郎の、独りよがりだったのも分かってる。だから俺が逝ったら、とことん殴ってくれ。とことん説教してくれ。それでまた、一緒に遊ぼう」

「ふう、話過ぎたかな？そろそろ行くわ」

「あ、最後に1つ」

またな、俺の最初で最後の親友達。またな、俺の最愛の妹

~~~~~

「……………ちゃん…」

ん？声が聞こえる。  
もう朝か？

「ん~~~~……………おはよう、雪音」

「……………おにいちゃん……………大丈夫？」

俺は心配そうに見つめる雪音を撫でてやった。  
上目遣いの雪音マジカワユス。

「ちょっと怖い夢を見ただけだ。今、朝食の支度をするから先降り  
てな」

「……………うん」

雪音はトテトテと部屋を出て行った。  
まったく仕草ひとつひとつがなんて可愛いんだ。  
ああ、雪音カワユス。

「ん？メールか…」

机に置いといた携帯が「マジで早く見てくれよ!!もう時間がないんだよ!!活動時間が限界なんだよ!!」といった感じで、俺にアピールしている。

「まったく、ワガママな携帯だ」

携帯を開くと、受信が一件来ていた。とりあえず確認のためメールを開く。

From エセ関西人

sb そうかあ(´・`・´)

そっかあ、これへんのかあ。

分かったわ。

じゃあまた今度あそぼつなあ。

それじゃ、また月曜日に ノシ

「……………本当にわるいな」

ふう、やっぱり近づきすぎたな……。

雪音や紫音、親父や母さんのおかげで、俺の考えは少しは変わってきたけど……。

いや、変わったんじゃない。  
きつと甘くなつたんだ。  
だから俺はあいつらに近づきすぎた。

「きつと、今まで以上に傷つけるだろうな……」

けど、あいつらに関わる＝管理局に関わるって事になる。  
死亡率がグンツとアップだ。

俺は大切な人を失うのが怖い。  
つて、それは当たり前のことか。  
けど、俺は次失ったらマジで壊れちまう。  
だから増やさなくていい。  
大切な人は家族だけで十分だ。

本当に悪いな、俺は自己中だから。俺はお前達と距離を置くこ  
とにするよ

「さて、妹みきにあまり与えられなかった愛情を、妹ゆきねに存分を与えてき  
ますか」

もし俺が俺に戻れる日があるなら、それは……



第16話 俺が俺であるために（後書き）

お疲れ様でした。

つまらないシリーズをよんで頂いてありがとうございます（笑）

そろそろ序章も終盤。

どんどん頑張りたいです！！

序章・最終話 友達（前書き）

今回で長いプロローグ的な序章が終了。

では、ごきげん

## 序章・最終話 友達

7月7日。

今日は太陽サンサン、青空には雲ひとつない晴天じゃった。こんな日は気分上々で楽しい昼食になるはずじゃった。そう、はずじゃった…。

「……………」

ワシらの周囲だけ、めっさ重い空気なんじゃ。

みんなお通夜みたいな表情をしておる。

なんかもう、めっさ逃げ出したい。

みんなのテンションが低い理由はわかつとる。

ここにいないアイツのことじゃ。

西野音耶。

新学年になってから、ワシ達と遊ぶようになった友達じゃ。

音耶を言葉で表すなら、唯我独尊、マイペース、毒舌、シスコン。まあ色々ある。

そんな奴じゃけど、結構一緒にいておもしろい奴なんじゃ。

けど、この場に音耶はいない。

今日だけに限らず、最近ずっとじゃ。

音耶が変わったのは数週間前。音耶が学校を休んだ日の週明けじゃ。音耶は何故かワシらから距離をとるようになった。

いや、前々からどこかよそよそしいところも確かにあったのじゃ。

けど、今回は明らかに距離をとっておる。  
本当に何がなんだかわからないのじゃ。

「ねえ、なのは」

「ん？どうしたの、アリサちゃん？」

「もう、やめにしない。アイツに関わるの」

「……もう少しだけ」

「いい加減諦めなさいよ！アイツがあたし達に心を開くことなんてない！！きつとあたし達といるのも、暇つぶし程度に思っていたはずだわッ！！」

「あ、アリサちゃん、ちょっと落ち着こうよ」

「すずかもそう思うでしょ！？もうアイツに付き合ってる義理はないって！！」

「わ、わたしは……」

アリサ嬢ご立腹じゃなあ。

すずか嬢は戸惑ってるし、なのは嬢はめっさ暗い。

「アリサちゃん、ちょっと落ち着きい」

「……わかったわよ……」

「なあ、なのはちゃん。もうやめにせえへん？こんな事続けても意味ない気がするで？」

「なのは…」

「……でも、わたしはまだ知らないから……」

「私は、なのはちゃんが知りたい事をアイツが話してくれるとは思えへん。なのに、こんな友達ごっこを続ける意味あるんか？」

「うわあ、きつぱり言うなはやて嬢……」

まあ、確かにワシ達が音耶に近づいたのは、ただ友達になろうとした訳じゃない。

なのは嬢が知りたい事。

ワシらはそれを知るために、音耶に近づいたんじゃ。

けど音耶はワシらに心を開くわけでもなく、むしろ遠ざかるうとしておる。

最低なことやってわかつとるんじゃ。

知りたい事があるから友達の真似して近づくんなんて。

ワシも最初は反対じゃった。

けど、なのは嬢たつての願いじゃし、ワシは結局この話に乗った。

「わたしも自己満足ってわかつてるよ。……けど、知りたいの。どうしてあんなに寂しそうなのか……」

寂しそう…か。

なのは嬢の知りたい事。

それは音耶がどうして、あんなに寂しそうにしてるかじゃ。

ワシはアイツが寂しそうなんて、わからへんかった。

けど、なのは嬢は会って直ぐに気づいたらしい。

なのは嬢は、そんな音耶を救ってあげたかったらしい。  
だからワシ達に、新学期初日の放課後に相談してきたんじゃ。

「なのはちゃん。こんな事言うのは酷かもしれへんけど……。音耶君  
のこと知って、私たちになにができる？きつと、なんもできへんよ  
？」

「……………」

「なあ、もうやめよ？アイツが心を開くとも思えへんし、心を開い  
たところで、私らになにができるん？そもそもこんなの、最初から  
間違ってたんや」

「……………」

あーあ。

なのは嬢泣きそうやん。

まったく、泣き虫なんじゃから。

ワシもそろそろ、言いたいこと言っていていいじゃろ。

「なあ、みんないいじゃろうか？」

「…なによ？」

「さっきから心を開くやら言っとるけど、音耶がワシらに心を開く  
なんて絶対ありえないのじゃ」

「なのは、海斗もあたしと同じこといってるじゃない」

「ちゃうで、アリサ嬢。意味が違うんじゃ。ワシが言いたいのは、

友達として近づいた訳じゃないワシらに音耶が心を開くはずないじやろ、って意味じゃ」

「あ……」

「そもそも、知りたいから近づくってのが間違いじゃったんじゃ。そんな嘘っぱちの友情に心を開く奴なんておらへん。だからワシは、こんな事もつやめるのじゃ」

「……でも」

「海斗の言うとおりね。あたし達が間違ってた。あたしも悪いけどやめるわ、なのは」

「アリサちゃん……」

「ごめんね、なのはちゃん……」

「すずかちゃん……」

「せやな。私も抜けさせてもらっわ」

「なのは、また6人で遊ぼう?」

「はやてちゃんに……フェイトちゃんまで……」

「そうよ、なのは。音耶のことは諦めて、また昔みたいに6人でいましよ」

「それが一番や。フェイトちゃんもそう思うやろ?」

「うん。」「めん、なのは」

「……みんな「けどー!」…海斗君…?」

「ワシは友達として、音耶が悩んでるなら力になりたい!!」

「ちょっと海斗!言ってることが無茶苦茶よ!!さっきは友達の真似してたって言ってたじゃない!!」

「そんな事言った覚えはないんじゃ!確かに最初は友達になろうとして、近づいたわけじゃない。けど、ワシは音耶といて楽しかった!一緒に居て楽しかったら、それはもう友達なんじゃ!!だから今度は、友達として音耶の力になりたいんじゃ!!」

「でも、今更…」

「細かいことはどうでもいいんじゃ!!ワシは音耶に今まで嘘を吐いていた事を謝る!!それで、音耶にワシらを避けてた理由を聞いて、また一緒に遊ぶんじゃ!!文句は受け付けないんじゃあ!!!!」

「海斗が壊れた…」

「わかった、わかったから落ち着きい!!」

「分かればいいんじゃ」

せや、始まりなんてこの際どうでもいいんじゃ。  
ワシは音耶と遊びたい。



この気持ちに嘘はないんじゃない。

「ワシは行ったとおり、音耶と居て楽しかった。みんなはどうなんじゃ」

「……まあ、口は悪いけどつまらなくはなかったわ」

「話も意外と合うし…口は悪いけど」

「確かにノリはよかったわ。毒舌やけど」

「うん。妹思いなところもあるし。たまに引いちゃうけど…」

「一癖ある奴やけど、面白い奴じゃったろ。みんなも楽しかったなら友達じゃ。なのは嬢はどうじゃ？」

「……わたしも悪口いっぱい言われたり、からかわれたりしたけど…。音耶君も居て、みんなも居るときは楽しかったの」

「うんうん。なら、みんなで謝るんじゃない。それからのことは……まあ、どうにでもなるんじゃない！」

「そうね。あたし達が悪い事をしたのは確かなんだし、謝らないといけないわね」

「そうだね、アリサちゃん」

「なんや、海斗君もたまにはええ事いうな」

「ははは、そうだね」

「ワシは基本ええ子じゃからな。みんな、今日は神社で七夕祭りがある。音耶はワシが連れてくるから、みんなで謝るのじゃ。そんで7人で遊ぶのじゃ!!」

みんな納得してくれたようじゃ。

これで一安心じゃな。

さて、あとは音耶のほうか。

一番の難関じゃな。

「あの、海斗君……」

「ん？なんじゃ、なのは嬢？」

「その……ありがとね」

「なんじゃ、その事か。ワシはただ暗いのが苦手じゃから、意見しただけじゃ」

「ははっ、海斗君はやっぱり優しいね」

なんじゃ、照れるやないか。

（海斗side out）

「はあ……」

ども、西野音耶です。

俺は現在、ソファーで1人寂しく寝転んでいる。

理由は、あれだ。

下の子たちが2人共、友達と祭りに行つちまったんだよ……。

兄ちゃんサビシス。

「そうだ、寂しい時は歌を歌おう。y「寂しいんじやったら、祭り行かへんか？」どこから湧いてきた、不法侵入者」

「窓が開いとつた」

「窓が開いてると勝手に入ってくるのか。おめでとう、君はマジで虫に一步近づいたよ」

「虫じゃないんじや！！で、祭り行かへん？」

「……行かねえよ」

「なんでじゃ？」

「弟と妹の世話をするからだ」

「さっきそこで2人に会ったで？」

「……1人が好きなんだ」

「自分で寂しいって言ったんじゃ」

「……………」

なんなんだよコイツは…。

不法侵入して、いきなり遊びに誘ってきたり。

俺、最近お前から距離とってただろ。

ひどい事も言いまくったろ。

なのに、なんで構うんだよ。

「なあ、音耶」

「…なんだよ」

「なんでワシらを避けるんじゃ？」

「……………」

海斗は向かいのソファに座ると、そんなことを言ってきた。  
ああ、問い詰めに来たのか。

「特に意味なんてねえよ。なんとなくだ、なんとなく」

「嘘じゃろ。なんとなくにしては態度が露骨すぎる」

「はあ。俺がどうしようとか俺の勝手だろ。お前が気にする理由なんてねえだろ。前みたいにアイツらと遊んでろよ」

「気にする理由はあるんじゃない」

「友達だとかふざけたこと抜かすなよ」

「その通り、友達だからじゃ」

「……俺はお前らを友達だなんて思ってねえ」

「ワシは思つとる」

「……くそ。」

「なんでコイツは避けねえんだよ。」

「今まで知り合つた奴は、みんな避けてくぞ。」

「俺と友達？」

「ふざけんな。」

「なんで思い通りに進まねえんだよ。」

「お前が思つてても俺は思つてねえ。お前達は友達でも何でもねえんだよ」

「そか……。音耶、ワシがうざいか？」

「ああ」

「ワシの事嫌いか？」

「ああ」

「みんなも嫌いか？」

「ああ」

「ワシ達と居て楽しかったか？」

「ああ…ッ！嵌めたなこのヤロー…」

「引つかかる音耶がわるいんじゃ」

うわっ、そのニヤけた面殴りてえ。

「音耶」

「ああ？」

「すまんのじゃ！！」

は？

なんでコイツが謝ってるんだ？

悪いことしてたのは俺だろ。

「ワシは音耶をずっと騙してたのじゃ！音耶に近づいたのは、友達になろうとしてた訳じゃなくて、実は音耶の秘密を知ろうと近づいたんじゃ…！」

「秘密？」

「なのは嬢が言ってたんじゃ。音耶はどうして、あんなに寂しそうなんだって。それでなのは嬢は音耶が寂しがる原因を知りたがっていたんじゃ。それで音耶を寂しさから救ってあげたいって」

何言ってるんだコイツは？

俺が寂しそう？

救いたい？

「だから俺に近づいたと？はっ、最初からおかしいと思ってたんだよ。なんでこんな自己中野郎に近づくのか。なんだ、俺が寂しそうにしてたから同情して、俺に近づいてきたのか」

「ほんまにすまん！！」

「……はあ。許してやるよ。俺も結構ひでえことしてたしな」

「許してくれるんか？」

「ああ、許してやる。だからさっさと帰れ」

ま、最初からそんなもんだってわかってたしな。

あーあ。

なんか気が楽になったわ。

こいつが帰ったらゲームしよ。

「嫌じゃー！！」

「は？」

「ワシは帰らん!」

「普通は帰るところだろ」

「ワシは音耶が悩んでる理由を聞くまで帰らん!」

「いや、帰れよ」

「い———や———じゃ———!」

「……勝手にしてる」

どうせ直ぐに飽きて帰るだろ。

俺は自室で狩りでもしてるよ。

俺はバカを放置して、二階へと上がった。



「あー…もうこんな時間か」

ゲームに夢中になり過ぎたのか、外は真っ暗になっていた。  
時計を見ると7時。

2時間もやってたのかよ…。

「飯でも食つかないかな…」

俺はゲーム機をベッドに置き、一階へと向かう。

ちょうど階段を降りている時だった。

「……………チヨォー…セ……………アアアアア！！……………」

なんか奇声がリビングから聞こえてきた。

???

まだイガグリは帰ってねえよな。

俺は不思議に思いながら、リビングのドアを開ける。

「いやあああああああ！！！！また死んだんじゃあああああああ  
あ！！！！！！」

人ん家のゲームをしながら、奇妙な動きをしているバカがいた。  
つつか、コイツ居んの忘れてた…。

まだ居たのかよ。

「あ、音耶〜〜、ここのボス強すぎじゃろ〜」

「知らねえよ。いいからさっさとkああ!?!てめえ、何回死んでんだよ!!!金がかなり減ってんじゃねえか!!!」

「だって、強いんじゃよ〜〜!」

「ったく。おら、貸してみろ」

海斗からコントローラーを引ったくり、ソファーに座ってボスに挑む。

「おお!音耶やるなあ!」

「てめえがへたくそなんだよ!」

……って、何俺はゲームなんてしてんだ。  
コイツには帰ってもらうんじゃなかったのかよ。

「音耶、右や右!!!」

「わーってるよ!」

「今度は左やあああああ!!!!!」

「うるせえ、わかってるよ!」

「ぎゃあああああ!!!今度は正面じゃあああああ  
!!!!!」

「……………はあ」

いちいち騒ぐなドアホ。

なんでコイツはこんな緊張感ないんだ？

一応喧嘩中？だろ。

「音耶、いまやあああああああ！！！！」

「……………」

「避けたのじゃッ！？相手チートじゃろ！！」

「……………昔……」

「ん？なんじゃ？」

「……………大切な親友がいたんだ」

「……………え？」

おい、なんでそんな驚く。

……………まあ、今までの俺の態度見てればそう思うつか。  
こんな奴に友達いたんだ、みたいな。

つつか、何口走ってんだ俺……。

「音耶の親友……………って、夢を見たんじゃろ？」

「殺すぞ、虫」

「…………顔が怖いで」

「ったく……。今は聞かなかったことにしろ」

「無理や。もう聞いてしまったのじゃ」

下手こいた。

ああッ！

なんでこんな調子が狂うんだよ……！

「いた、ってことは……」

「死んだよ。ずっと前に」

「そか……」

「ああ……」

「ワシ、音耶の悩みてのがわかった気がするわ」

「……………」

「怖いんやろ？友達がなくなるのが」

「……………」

「その顔はダウトやな。しかしなんじゃ、音耶も可愛いところあるんじゃないな」

「……………殺すぞ？」

「堪忍してや。そか……失うんが怖いか……」

「笑えよ。デカイ態度して、中身はチキン野郎だぜ」

「いや、笑わへん。大切な人を失う気持ちはようわかるからな」

「……そういう訳だから俺は友達を作る気はない。わかったら帰れ」

「ああ、ようわかった。ほな帰るわ」

……やっと帰るか。

つつかコイツに話ちまった。

今日は本当に調子狂うな。

「あ、帰る前にひとつ」

「んだよ？」

「そこに立ってくれへん？」

バカはちよいちよいつと、自分の前を指差す。  
？意味分からん。

とりあえず、言われたとおりバカの前に立った。

「で、なにすんだ」「バカやるおおおおおおおおおおおお  
おおお！！！！！！」「ちよ、あべしっ！？」  
バキッ！！

フラ

ゴンッッ！！

「!?!?~~~~~ッ!?!?!?!?!」

いきなりバカが殴ってきた。

それだけでも痛いのに、体勢を崩した俺は、こけてテーブルにヘディングした。

「あゝ、スッキリしたのじゃ。一度、青春漫画っばいのやってみたかったんじゃ」

「てめッ！頭割れっかと思っただぞ!?!」

「すまんすまん。で、ここからはちょっと真面目に話すぞ?」

「……なんだよ」

「音耶の今やってることを知ってら、きつと悲しむと思うのじゃ」

俺のやってること…。

友達を作るのが怖いから、遠ざけることか。

ま、確かになのは辺りが悲しむかもな。

いや、同情するか呆れるかだな。

「あいつらには悪いと思ってる…。俺の自分勝手に付き合わせたからな」

「ちやう、なのは嬢達のことやない。音耶の親友達じゃ」

「……あいつらが?」

「せや、今の音耶を見たらきつと悲しむはずじゃ。もしかしたら自分達が死んだせえかもしれへん…ってな」

「ツ！？」

「少なくともワシはそう思うで。いや、本当に音耶が大事な友達やったら、死んだ親友達もそう思うはずじゃ」

「……………」

「自分のこと、もう一度見つめなおしてみい。ワシらは神社の裏で待つとるから。みんなもきつと謝りたいはずじゃろうし。ほな、またな」

海斗はそう言つと、家から出て行った。

「あいつらが悲しむ…か…」

海斗が去った後、俺はソファで力なく座っていた。

はあ…、なんか意味分かんなくなってきた。

今の音耶を見たらきつと悲しむで

ああ…確かに悲しみそうだな。

というか切れそうだな。

大さんだったら、「いつまでも俺達のことを引きずってるな、バカもん！！」とか言いそうだな。

鈴は、「男のくせにウジウジしてる祐つてば、かつこ悪い〜！！」  
とか言うな。

美希は…無言で六法全書を投げてきそうだな。

「はははッ！！マジでありそうだな…」

こんな俺じゃ、死んでも顔なんて見せられねえや。

ま、あいつらに顔向けできないほど腐りきったのは、既にわかっているけどな。

そうだな。

俺はもう決めたんだ。

友達なんて作らないって。

相手のためにも、自分のためにも。



「…………結局来ちまう俺って、意思が弱いのかねえ……」

来ちまったよ、神社。

いつもは寂しいほど静かな神社も、今は露天と多くの人で賑わっている。

と、なんとなく歩いていると、腰らへんを誰かが引っ張った。

ツ！？この引っ張られる感触は……！？

「…………来てたんだ……」

「雪音！！こんな所で会えるなんて……！」

マイルスウィートエンジェルこと、妹の雪音がいた。

ああ……見慣れてるけど、私服カワユス。

見れば近くには、雪音の友達が2人いた。

うんうん。どれも雪音に劣らず可愛い子だ。

ま、雪音が一番だけだ。

「……みんなと……きたの……？」

「みんな…か」

「わたしね…最近のおにいちゃん…少し、こわかった…」

「怖い？俺が？」

「…うん。…なんだか…つらそうで…かなしそうなおにいちゃんが…こわかったの…」

「……………そうか」

「わたしは…おにいちゃんに…笑ってほしい…」

「たのしそうな…おにいちゃんが…そのお……………だいすき…だから…／／／」

「……………雪音……………」

なにやっつてんだか、俺は。

妹にまで心配かけて。

守る？

なにが守るだ。

俺が心配されてちゃ、どうしようもねえだろ。

「ありがと、雪音。俺さ、少し頑張ってみるよ」

「…うん」

「はははッ！よし！兄ちゃんが何か買ってやろう！お友達も好きな

もの買ってやるからな」

「「「ありがとうございます…!」」

「…ありがとう」

ありがとな、雪音。

やっぱ俺の妹は最高だ。

（海斗side）

「来ないね…」

すずか嬢が沈んだ声で言った。

ワシらがここにきて1時間。

音耶は今だ現れない。

神社の表のほうでは、にぎやかな喧騒が聞こえてくる。

「やっぱり…来ないのかな…?」

ヤバイ。

今のワシは冷や汗ダラダラじゃ。

あんな啖呵きつといて、来ませんでしたじゃ話にならない。  
ヤバイのじゃ、音耶はよ力モ~~~~ン。

「ねえ、あれって…！」

フエイト嬢が声を上げた。

指差す先には、男のシルエツト。

間違いない、音耶や！

来てくれたんじゃな！！

音耶らしきシルエツトは、こちらに近づいてくる。

そして、顔が見える位置までやってきた……あれ？

「って、めっちゃ祭り楽しんでるんじゃ！？」

「むじゅ？」

現れた音耶は狐のお面を装備して、イカ焼きにかぶりついておった。

〈side out〉

「って、めっちゃ祭り楽しんでるんじゃ！？」

「むじょ?」

なんだよ急に。

海斗の言っていた神社の裏手に来てみたら、なんか俺の姿を見て騒ぎだした。

他の奴らも呆然としている。

「あんた…何よそれ…」

「あ?イカ焼きだけど?」

「違うわよ!そういう意味じゃない!!」

「じゃあどういう意味?」

「なんでこっちには重い空気の中、あんたを待ってたのに、あんたは普通に祭りを楽しんでるのよ!!」

祭りは楽しむもんだろ?

楽しまなきゃ、運営の人に失礼だ。

「とまあ、冗談はこれくらいにしといて…。話があるんだろ?」

「え、ええ、そうよ」

「うん、聞いているから言ってみ」

「え〜と…」





「すまん、今のナシで。俺も仲間に入れてください」  
なぜか皆笑い出した。  
意味がわからん。  
まあ、自分でもキモイと思ったけど。

「そうと決まったら、さっそく遊びに行くのじゃー!!」

「そうだね。なのは、りんご雨食べよ?」

「うん。ほら、音耶君も行こっ」

「…ああ、行くか」

大さん、鈴、美希

俺さ、もう一回頑張ってみようと思っ

だから、そっちで見といてくれよ

俺がそっちに行くまで

それで、また一緒に遊ぼうな



『魔法少女とかマジ笑える』

序章的なプロローグ・終了

序章・最終話 友達（後書き）

お疲れ様でした。

今回で序章が終了です！！

次回からが本命！！

本当に友達として接するようになる主人公に、ご期待ください！！

そして次回からは長い学校生活！！

おそらくシリアスなしｗｗ

ずっとコメディー！！

色々やらかす予定です（笑）

追伸

音耶君の言動、行動が柔らかくなると思いますので、あしからず。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0912z/>

---

魔法少女とかマジ笑える

2011年12月30日01時28分発行